

埼玉県熊谷市埋蔵文化財報告書 第27集

中西遺跡Ⅰ

—熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書X—

2018

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財報告書 第27集

なか にし い せき
中西遺跡Ⅰ

—熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書X—

2018

埼玉県熊谷市教育委員会



第1号周溝墓（平成22年度調査）



序

平成 17 年 10 月 1 日、熊谷市、大里町、妻沼町の一市二町が、さらに平成 19 年 2 月 13 日、江南町と合併して、新『熊谷市』が誕生いたしました。

新『熊谷市』は、南北約 20 km、東西約 14 km にわたり、面積は 159.88 km²、人口は 20 万人を越えることとなり、県北最大の都市として生まれ変わりました。新市は、関東平野を縦横に流れる荒川と利根川の 2 大河川が最も近接する流域に位置し、平坦な地形に肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。

こうした自然環境のもと、新市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

本書は、熊谷市教育委員会において平成 22～24 年度に発掘調査を行った中西遺跡（旧 箱田氏館跡）について報告するものであります。本遺跡からは、縄文時代後・晩期、弥生時代中期後半、古墳時代前期、奈良・平安時代の人々の営みが確認されました。その中でも縄文時代後・晩期については、集落が確認され、遺物包含層からは多量の縄文土器や土偶等が出土しました。また、古墳時代前期では墓域が確認され、首長墓といえる前方後方形周溝墓の検出や溝内埋葬施設が確認された方形周溝墓の検出など、貴重な成果が挙がっており、本市の歴史的発展を考証する上でも非常に重要なものといえます。本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご利用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、御理解、御協力を賜りました熊谷市都市整備部土地地区画整理中央事務所並びに地元関係者には厚くお礼申しあげ、発刊のあいさつといたします。

平成 30 年 3 月

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市中西四丁目2400番1ほかに所在する中西遺跡（埼玉県遺跡番号59-114）の発掘調査報告書であり、二分冊に分けたうちの『中西遺跡Ⅰ』として遺構編及び附編等を収録したものである。後日、『中西遺跡Ⅱ』として遺物包含層編の刊行を予定する。
 - 2 本調査は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
 - 3 本事業の組織は、第Ⅰ章3のとおりである。
 - 4 発掘調査期間は、下記のとおりである。
平成22年度：平成23年1月 5日～平成23年3月31日
平成23年度：平成24年1月10日～平成24年2月29日
平成24年度：平成25年2月 1日～平成25年3月15日
- 整理・報告書作成期間は、平成25年4月1日から平成30年3月31日まで断続的に実施した。
- 5 本調査に係る基準点測量は株式会社東京航業研究所に委託した。
 - 6 発掘調査の担当及び本書の執筆・編集は、藏持俊輔が行った。
 - 7 発掘調査における写真撮影及び遺物の写真撮影は、藏持が行った。
 - 8 第Ⅳ章7については、熊谷市文化財保護審議会委員小野美代子氏に御指導・御協力を賜った。
 - 9 第Ⅵ章1は清水康守氏、小勝幸夫氏、小川正之氏、武藤博士氏に玉稿を賜った。
 - 10 第Ⅵ章2は独立行政法人国立科学博物館人類学研究部梶ヶ山真理氏に玉稿を賜った。
 - 11 第Ⅵ章3は木製品保存処理・分析業務委託の際に提出された報告書を藏持が編集し掲載した。
 - 12 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。
 - 13 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

阿部常樹 市川 修 内田勇樹 大井教寛 大賀克彦 大谷 徹 大屋道則 小勝幸夫 小川正之
小野美代子 柿沼幹夫 梶ヶ山真理 金子直行 坂本和俊 澤口和正 清水康守 菅谷浩之 蛭間健吾
福田 聖 細田 勝 武藤博士 山岸良二 吉田 稔 渡辺清志
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 遺構挿図の縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

遺構の略記号は次のとおりである。

SI：竪穴建物跡 SD：溝跡 SK：土坑 SZ：周溝墓 P：ピット

調査区全測図…1/300 遺構平面図・断面図…1/100 1/80 1/60 1/50

- 2 遺構挿図中のスクリーントーン等は次のとおりである。

 = 地山

- 3 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

- 4 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器…1/4 石器…1/4、1/8

土製品・石製品…1/1、1/2 木製品…1/4

- 5 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

縄文土器・弥生土器・土師器：白抜き 須恵器：黒塗り

実測図の中心線は実線で示している。

遺物挿図中のスクリーントーン及び赤色箇所は赤彩を示し、断面の右は外側、左は内側の彩色範囲を示す。

 = 赤彩範囲

- 6 遺物拓影図のうち、向かって左に外面、右に内面を示した。

- 7 遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcm、gである。()が付されるものは推定値、現存値を表す。胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で、含有量の多い順に示した。

A…白色粒子 B…黒色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子 F…白色針状物質 G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石 L…片岩 M…砂粒 N…礫

- 8 写真版図の遺構・遺物の縮尺は、すべて任意である。

- 9 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局編集、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

目次

口 絵

序

例 言

凡 例

目 次

I	発掘調査の概要	1
1	調査に至る経過	1
2	発掘調査・報告書作成の経過	2
3	発掘調査、整理・報告書刊行の組織	3
II	遺跡の立地と環境	5
III	遺跡の概要	9
1	調査の方法	9
2	検出された遺構と遺物	9

IV	遺構と遺物	13
1	竪穴建物跡	13
2	周溝墓	47
3	土器棺墓	84
4	溝跡	84
5	土坑	87
6	ピット	95
7	土偶	97
V	調査のまとめ	107
VI	附 編	109
1	新規荒川扇状地南東部の地形地質	109
2	中西遺跡出土の骨	118
3	中西遺跡出土木製品の自然科学分析調査	120

挿 図 目 次

第 1 図	埼玉県の地形	5
第 2 図	周辺遺跡分布図	7
第 3 図	調査地点位置図	8
第 4 図	調査区全測図	10
第 5 図	第 1 号竪穴建物跡	13
第 6 図	第 1 号竪穴建物跡出土遺物	14
第 7 図	第 2 号竪穴建物跡	15
第 8 図	第 2 号竪穴建物跡出土遺物	16
第 9 図	第 3 号竪穴建物跡	19
第 10 図	第 3 号竪穴建物跡出土遺物 1	20
第 11 図	第 3 号竪穴建物跡出土遺物 2	21
第 12 図	第 3 号竪穴建物跡出土遺物 3	22
第 13 図	第 3 号竪穴建物跡出土遺物 4	23
第 14 図	第 3 号竪穴建物跡出土遺物 5	24
第 15 図	第 3 号竪穴建物跡出土遺物 6	25
第 16 図	第 3 号竪穴建物跡出土遺物 7	26
第 17 図	第 4 号竪穴建物跡	32
第 18 図	第 4 号竪穴建物跡出土遺物 1	33

第 19 図	第 4 号竪穴建物跡出土遺物 2	34
第 20 図	第 4 号竪穴建物跡出土遺物 3	35
第 21 図	第 5 号竪穴建物跡	38
第 22 図	第 5 号竪穴建物跡出土遺物	39
第 23 図	第 6 号竪穴建物跡	40
第 24 図	第 6 号竪穴建物跡出土遺物	41
第 25 図	第 7 号竪穴建物跡	43
第 26 図	第 7 号竪穴建物跡出土遺物 1	44
第 27 図	第 7 号竪穴建物跡出土遺物 2	45
第 28 図	第 1 号周溝墓詳細図配置図	47
第 29 図	第 1 号周溝墓等値線図	48
第 30 図	第 1 号周溝墓平面図	49
第 31 図	第 1 号周溝墓断面図	50
第 32 図	第 1 号周溝墓詳細図 A・B	51
第 33 図	第 1 号周溝墓詳細図 C・D	52
第 34 図	第 1 号周溝墓出土木製品	53
第 35 図	第 1 号周溝墓出土遺物 1	55
第 36 図	第 1 号周溝墓出土遺物 2	56

第37図	第1号周溝墓出土遺物3	57	第73図	発掘区西壁の地質	111
第38図	第1号周溝墓出土遺物4	59	第74図	発掘区北東部の地質	111
第39図	第1号周溝墓出土遺物5	60	第75図	方形周溝墓の周溝部の地質	111
第40図	第1号周溝墓出土遺物6	61	第76図	トレンチ中央の地質柱状図	112
第41図	第2号周溝墓	67	第77図	第④地点南壁の地質	112
第42図	第2号周溝墓溝内土坑詳細図	68	第78図	第④'地点の発掘域	112
第43図	第2号周溝墓出土玉類	69	第79図	白色シルト質火山灰の分析結果	113
第44図	第2号周溝墓出土木製品1	69	第80図	第④地点の火山灰の分析結果	114
第45図	第2号周溝墓出土木製品2	70	第81図	第④'地点の火山灰の分析結果	114
第46図	第2号周溝墓出土遺物	71	第82図	礫分析資料採取地点	115
第47図	第3号周溝墓	73	第83図	個数による礫種組成	116
第48図	第3号周溝墓出土遺物	73	第84図	礫径(長径)区分による個数分布	117
第49図	第4号周溝墓	74	第85図	歯式	118
第50図	第4号周溝墓出土遺物1	75	第86図	第2号周溝墓溝内土坑出土唐	119
第51図	第4号周溝墓出土遺物2	76	第87図	木材・炭化材	123
第52図	第5号周溝墓	78			
第53図	第5号周溝墓出土遺物	79			
第54図	第6号周溝墓	81			
第55図	第6号周溝墓出土遺物	82			
第56図	第1号土器棺墓	83			
第57図	第1号土器棺墓出土遺物	83			
第58図	第1～3号溝跡	85			
第59図	第2・3号溝跡出土遺物	86			
第60図	第1～16号土坑	88			
第61図	第1～8号土坑出土遺物	90			
第62図	第8～11号土坑出土遺物	92			
第63図	ビット	95			
第64図	ビット出土遺物	96			
第65図	土偶1	98			
第66図	土偶2	99			
第67図	土偶3	100			
第68図	土偶4	101			
第69図	土偶5	102			
第70図	土偶6	104			
第71図	衣川とその支流	109			
第72図	模式地質断面図	110			

挿 表 目 次

第 1 表	周辺遺跡一覧表……………8	第 14 表	第 3 号周溝墓出土遺物観察表……………73
第 2 表	第 1 号竪穴建物跡出土遺物観察表…14	第 15 表	第 4 号周溝墓出土遺物観察表……………77
第 3 表	第 2 号竪穴建物跡出土遺物観察表…17	第 16 表	第 5 号周溝墓出土遺物観察表……………80
第 4 表	第 3 号竪穴建物跡出土遺物観察表…27	第 17 表	第 6 号周溝墓出土遺物観察表……………82
第 5 表	第 4 号竪穴建物跡出土遺物観察表…36	第 18 表	第 1 号土器棺墓出土遺物観察表……………83
第 6 表	第 5 号竪穴建物跡出土遺物観察表…38	第 19 表	第 2・3 号溝跡出土遺物観察表……………86
第 7 表	第 6 号竪穴建物跡出土遺物観察表…42	第 20 表	土坑出土遺物観察表……………94
第 8 表	第 7 号竪穴建物跡出土遺物観察表…46	第 21 表	ビット計測表……………96
第 9 表	第 1 号周溝墓出土木製品観察表……………54	第 22 表	ビット出土遺物観察表……………96
第 10 表	第 1 号周溝墓出土遺物観察表……………62	第 23 表	土偶観察表……………105
第 11 表	第 2 号周溝墓出土玉類観察表……………69	第 24 表	放射性炭素年代測定結果……………121
第 12 表	第 2 号周溝墓出土木製品観察表……………69	第 25 表	樹種同程結果……………122
第 13 表	第 2 号周溝墓出土遺物観察表……………72		

図 版 目 次

図 版 1	調査区遠景 1・2 調査区全景 1
図 版 2	調査区全景 2・3
図 版 3	調査区全景 4・5
図 版 4	調査区全景 6・7
図 版 5	第 1 号竪穴建物跡 第 2 号竪穴建物跡 (平成 22 年度調査・23 年度調査) 第 3 号竪穴建物跡 同遺物出土状況 1～4
図 版 6	第 4 号竪穴建物跡 同遺物出土状況 1～3 第 5 号竪穴建物跡遺物出土状況 第 6 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2 第 7 号竪穴建物跡
図 版 7	第 1 号周溝墓 同遺物出土状況 1・2 同内第 4 号土坑遺物出土状況 同前方部土層断面
図 版 8	第 1 号周溝墓東溝 1・2 同内第 1・2 号土坑遺物出土状況 同内第 3 号土坑遺物出土状況 第 2 号周溝墓 同第 1 号溝跡 同北西溝遺物出土状況 同北西溝第 1 号土坑
図 版 9	第 3 号周溝墓 第 4 号周溝墓 第 5 号周溝墓北溝 同西溝 同東溝 同北溝遺物出土状況 第 6 号周溝墓南溝 同遺物出土状況
図 版 10	第 1 号土器棺墓 第 2・3 溝跡 第 1・2 号土坑 第 3 号土坑 第 4 号土坑 第 5 号土坑 第 7 号土坑遺物出土状況 1・2
図 版 11	第 6 号土坑 第 8 号土坑遺物出土状況 第 9 号土坑 第 11～15 号土坑
図 版 12	第 6 図 SI01-1～9 第 6 図 SI01-10 第 6 図 SI01-23 第 6 図 SI01-26 第 6 図 SI01-36 第 8 図 SI02-24.25.27～35.37～40.42.43 第 8 図 SI02-41

- 図 版13 第10図SI03- 1 ~ 15 第10・11図SI03-16.18 ~ 24.26 ~ 35 第10図SI03-17
第10図SI03-25 第11図SI03-36 ~ 38.40 ~ 51.56.58 ~ 60 第11図SI03-39
第11図SI03-39 第11図SI03-53
- 図 版14 第11図SI03-54 第11図SI03-55 第11図SI03-57 第11図SI03-62
第12図SI03-63 第12図SI03-64 第11 ~ 13図SI03-61.65 ~ 75.77 ~ 81.83
第13・14図SI03-84 ~ 86.88.89.92.96 ~ 111 第13図SI03-76 第13図SI03-82
- 図 版15 第13図SI03-87 第13図SI03-90 第13図SI03-91 第13図SI03-93 第13図SI03-94
第14図SI03-95 第14・15図SI03-112 ~ 118.121.124.126.128.129 ~ 131
第14図SI03-119 第14図SI03-120 第15図SI03-122 第15図SI03-123
第15図SI03-125
- 図 版16 第15図SI03-127 第15図SI03-132 ~ 146 第15図SI03-147 第16図SI03-148
第16図SI03-149・154 第16図SI03-150 ~ 153 第18図SI04- 1 第18図SI04- 2
第18図SI04- 3 第18図SI04- 4 第18図SI04- 5
- 図 版17 第18図SI04- 6 第18図SI04- 7 第18図SI04- 8 第18図SI04- 9
第19図SI04-10 第19図SI04-11.12.16 ~ 25.28 ~ 31 第19図SI04-13
第19図SI04-14 第19図SI04-15 第19図SI04-26.27 第19図SI04-32.33
第20図SI04-39.43 第20図SI04-34 ~ 36 第20図SI04-37.38.40 ~ 42
- 図 版18 第22図SI05- 1 第22図SI05- 2 ~ 10 第22図SI05-11 ~ 15 第24図SI06- 1
第24図SI06- 2 第24図SI06- 3 第24図SI06- 4 第24図SI06- 5
第24図SI06- 6 第24図SI06- 7. 9 ~ 13.15 ~ 17 第24図SI06- 8
第24図SI06-14 第24図SI06-18 第24図SI06-19
- 図 版19 第26・27図SI07- 1. 2. 7. 8.10 ~ 13.15 ~ 17.19.20.22.23 第26図SI07- 3
第26図SI07- 4 第26図SI07- 5 第26図SI07- 6 第26図SI07- 9
第26図SI07-14 第26図SI07-18 第26図SI07-21 第26図SI07-27 第26図SI07-31
第27図SI07-24_26_28_30_32_33_35_38_41_42
- 図 版20 第27図SI07-34 第27図SI07-39 第27図SI07-40 第27図SI07-43 第35図SZ01- 1
第35図SZ01- 2 第35図SZ01- 3 第35図SZ01- 4 第35図SZ01- 5
第35図SZ01- 6 第35図SZ01- 7 第35図SZ01- 8 第35図SZ01- 9
- 図 版21 第35図SZ01-10 第35図SZ01-11 第35図SZ01-12 第35図SZ01-13 第35図SZ01-14
第35図SZ01-15 第35図SZ01-16 第36図SZ01-17.18 第36図SZ01-019
第34図SZ01- 1・2 第34図SZ01- 3 第34図SZ01- 4・5
- 図 版22 第37図SZ01-20 ~ 42 第37図SZ01-43 ~ 46.48 ~ 63 第37図SZ01-47
第37図SZ01-64 第37・38図SZ01-65 ~ 79 第38図SZ01-80 第38図SZ01-107
第39図SZ01-113 第39図SZ01-114 第39図SZ01-115
- 図 版23 第38図SZ01-81 ~ 95 第38図SZ01-96 ~ 106.108 ~ 112
第39図SZ01-116.118 ~ 121.123 ~ 130.134 ~ 136 第39図SZ01-117

- 第39図 SZ01-131 第39図 SZ01-132.133 第40図 SZ01-137～145.147
第40図 SZ01-146 第40図 SZ01-148～150.157 第40図 SZ01-151_155.156
- 図版24 第44図 SZ02- 1 第44図 SZ02- 2 第44図 SZ02- 3 第44図 SZ02- 4
- 図版25 第43図1 第43図2 第43図3 第43図4 第43図5 第43図6 第43図7
第46図1～7. 9～15.17～21.23.29 第46図 SZ02- 8 第46図 SZ02-16
第46図 SZ02-22 第46図 SZ02-24 第46図 SZ02-25 第46図 SZ02-26 第46図 SZ02-27
第46図 SZ02-28 第46図 SZ02-30.31 第48図 SZ03- 1. 4. 5. 8 第48図 SZ03- 2
第48図 SZ03- 3 第48図 SZ03- 6 第48図 SZ03- 7 第48図 SZ03- 9
第50図 SZ04- 1 第50図 SZ04-11
- 図版26 第50図 SZ04- 2. 4. 6～10.12～17 第50図 SZ04- 3 第50図 SZ04- 5
第50図 SZ04-18～29 第51図 SZ04-30 第51図 SZ04-31～40 第51図 SZ04-41
第51図 SZ04-42.43
- 図版27 第53図 SZ05- 1～18 第53図 SZ05-19～22.24～30 第53図 SZ05-23
第53図 SZ05-31.32 第55図 SZ06- 1～14 第55図 SZ06-15 第55図 SZ06-16
第57图土器棺墓1- 1 第57图土器棺墓1- 2 第59图SD02・03- 1～3
第61图SK01- 1・2 第61图SK02- 1～3 第61图SK03-1.2 第61图SK06- 1・2
第61图SK07- 1・2・3
- 図版28 第61图SK08- 1～9 第61・62图SK08-11～21.24 第61图SK08-10 第61图SK08-22
第62图SK08-23 第62图SK08-25 第62图SK11- 1
第62图SK11- 2～4. 7. 9～11.13.15～23.25 第62图SK11- 5 第62图SK11- 6
第62图SK11- 8 第62图SK11-12 第62图SK11-14 第62图SK11-24
第64图P07- 1. 2 第64图P24- 1. 2 第64图P25-1
- 図版29 第65图1 (表・裏) 第65图2 (表・裏) 第65图3 (表・裏) 第65图4 (表・裏)
- 図版30 第66图5 第66图6 第66图7 第66图8 第66图9 第66图10 第66图11
第66图12 (表・裏)
- 図版31 第67图13 (表・裏) 第67图14 (表・裏) 第67图15 (表・裏)
- 図版32 第67图16 (表・裏) 第67图17 第68图18 第68图19 第68图20 第68图21
第68图22 第68图23 第68图24 第68图25 第68图26
- 図版33 第68图27 第68图28 第68图29 第68图30 第68图31 第68图32 第68图33
第68图34 第69图35 第69图36 第69图37 第69图38 第69图39 第69图40
- 図版34 第69图41 第69图42 第69图43 第69图44 第69图45 第69图46 第70图48
第70图49 第70图50 第70图51
- 図版35 第70图47

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

昭和61年6月6日付け61熊都発第148号で、熊谷市長より上之第一土地区画整理事業（現上之土地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会は、事業地内全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、平成7年11月13日から平成8年1月19日にかけて遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、弥生時代から近世にかけての集落跡及び墓が広範囲に分布することが確認された。この結果を踏まえて、平成8年2月9日付け熊教社発第865号で熊谷市教育委員会教育長から熊谷都市計画事業上之区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。

事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤之宮遺跡、諏訪木遺跡、箱田氏館跡、上之古墳群）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお、発掘調査の実施については、教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、代表者熊谷市長より平成21年11月17日付け熊土中発第81号及び平成23年6月7日付け熊土中発第40号で提出された。このことを受けて、平成22年1月5日付け教生文第4-969号及び平成23年8月15日付け教生文第4-495号にて埼玉県教育委員会教育長より発掘調査実施についての通知があった。

発掘調査は、平成23年1月から3月、平成24年1月から2月、平成25年2月から3月までの3次に分けて熊谷市教育委員会が実施した。発掘調査に関わる熊谷市教育委員会及び埼玉県教育委員会からの通知は、以下のとおりである。

平成21年度 平成21年12月15日付け熊教社発第320号
平成22年 1月 5日付け教生文第5-969号
平成22年度 平成22年12月27日付け熊教社発第1661号
平成23年度 平成23年 7月29日付け熊教社発第1332号
平成23年 8月15日付け教生文第5-495号
平成23年12月27日付け熊教社発第1640号
平成24年度 平成25年 1月28日付け熊教社発第1727号

上記の通知・届出は「箱田氏館跡」の名称が用いられている。しかし本発掘調査の終了後、その成果内容と遺跡名称のイメージが不一致であり、混乱が生じた。状況を鑑みて、範囲が箱田氏館跡とほぼ重複する中西遺跡を新たに設定し、本発掘成果は中西遺跡に帰属するものとして状況の整理を図った。そのため、発掘調査は箱田氏館跡として実施したが、本報告は中西遺跡として報告するものである。

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は、平成23年1月から平成25年3月にかけて3次にわたって断続的に実施した。調査期間・調査面積は以下のとおりである。

第1次調査 期間：平成23年1月 5日から平成23年3月31日まで 面積：800㎡

第2次調査 期間：平成24年1月10日から平成24年2月29日まで 面積：290㎡

第3次調査 期間：平成25年2月 1日から平成25年3月15日まで 面積：240㎡

調査の手順は、原則として重機により遺構確認面まで表土を除去し、その後人力による遺構確認作業を行った。検出した遺構を順次精査し、遺構平面図・断面図を作成し、随時個別の写真撮影を行った。最後に調査区全景の写真撮影を行い、器材等を撤収して現場における作業を終了した。第1次調査については前期・後期に分け、調査区を東・西に半分に分けて西側から調査を実施した。後期調査については、平成23年3月11日の東日本大震災で被害はなかったものの、余震による危険性が懸念されたため、安全面を考慮して限定的な調査とせざるを得なかった。第2次調査は、調査区が東・西に分かれたが、同時に実施した。第2号周溝墓から溝内土坑が副葬品とともに検出されたこと、第1次調査で多大な成果が得られていること等から、記者発表を行ったところ、新聞記事として採り上げられ地元住民の関心を大いに得ることとなった。また、平成24年2月26日に遺跡見学会を実施したところ、200名を超える見学者が来訪し、市民の文化財に対する関心の高さが窺い知ることができた。

(2) 整理・報告書作成作業

整理作業は平成25年4月30日から平成30年3月31日にかけて断続的に実施した。

まず、遺物の洗浄・注記・接合・復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと平行して遺構の図面整理を行った。次に、遺構・遺物のトレース・拓本を採り図版を作成した。そして、遺物の写真撮影、遺構・遺物写真の図版組みを行い、平成29年12月に原稿執筆・割付を実施した。翌年1月に報告書の印刷に入り、校正を経て3月31日に本報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

平成22～24年度 発掘調査

教育長	野原 晃
教育次長	藤原 清 (平成22年度) 鯨井 勝 (平成23年度～)
社会教育課長	齊木 千春 (平成22・23年度) 岩上 精純 (平成24年度)
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	小林 英夫 (平成22年度) 根岸 敏彦 (平成23年度～)
社会教育課副課長兼文化財保護係長	新井 端 (平成22年度) 森田 安彦 (平成23年度～)
社会教育課文化財保護係主幹	吉野 健
主査	鯨井 敬浩 (～平成23年6月)
主査	杉浦 朗子 (平成23年度～)
主査	松田 哲 (平成23年度～)
主任	松田 哲 (平成22年度)
主任	藏持 俊輔
主事	山下 祐樹

平成25～29年度 整理調査

教育長	野原 晃
教育次長	鯨井 勝 (平成25年度) 米澤ひろみ (平成26～28年度) 正田 知久 (平成29年度)
社会教育課長	岩上 精純 (平成25・26年度) 山崎 実 (平成27・28年度) 鶴田 敏男 (平成29年度)
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	根岸 敏彦 (平成25年度) 森田 安彦 (平成26～28年度) 吉野 健 (平成29年度)
社会教育課副課長兼文化財保護係長	森田 安彦 (平成25年度) 吉野 健 (平成26～28年度) 新井 端 (平成29年度)
主査	杉浦 朗子 (平成25・26年度)
主査	松田 哲

主査	小島 洋一（平成26年度～）
主査	星 祥子（平成29年度）
主査	藏持 俊輔（平成27年度～）
主任	藏持 俊輔（平成25・26年度）
主任	腰塚 博隆（平成26年度～）
主任	山下 祐樹（平成26年度～）
主任	金子 正之（平成27・28年度）
主事	腰塚 博隆（平成25年度）
主事	山下 祐樹（平成25年度）
主事	武部 喜充（平成29年度）
主事	島村 範久（平成29年度）
主事	大野美知子（平成29年度）
事務員	大野美知子（平成28年度）
事務員	島村 範久（平成28年度）
事務員	武部 喜充（平成28年度）
発掘調査員	原野 真祐（平成25・26年度）
事務嘱託	原野 真祐（平成27年度）
事務嘱託	山崎 和子（平成28年度～）

II 遺跡の立地と環境

熊谷市は埼玉県北部に位置する。市の南側には荒川、北側には利根川がそれぞれ西から南東方向に向けて流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に櫛挽台地、北・東側に妻沼低地、南側は江南台地が広がる（第1図）。

櫛挽台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは熊谷市北西部の西別府付近にまで延びている。標高は約36～54 mで妻沼低地に向かって緩やかに下っていく。

櫛挽台地の東側には沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は熊谷市の南西に位置する深谷市の菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。また、三ヶ尻地区の荒川に面した櫛挽台地南東端には丘陵地である観音山（標高81 m、第3紀層の残丘）があり、台地上からの比高差は約25 m、沖積地からの比高差は約35 mである。

今回報告する中西遺跡は新規荒川扇状地の縁辺部に立地し、標高は24 m前後である。中西遺跡は、箱田氏館跡と遺跡範囲が重なる形で新たに設定された、縄文時代後期から奈良・平安時代までの複合遺跡である。本遺跡が含まれる上之土地区画整理事業地内は発掘調査が進行し、各時代で成果が挙がり、その概要が明らかになりつつある。

次に本遺跡周辺の歴史的環境を概観する。

本遺跡周辺では縄文時代後期より遺跡が確認される。本遺跡及び諏訪木遺跡北部からは、加曽利B式期以降の遺物がみられ、集落の所在が確認された。山形系統やミミズク等の土偶が出土し、晩期まで継続する様相がみられる。それ以前の時代の遺跡は、台地上や台地縁辺の低地に所在が集中している。本遺跡付近は縄文時代晩期以降、痕跡が途絶えるが、弥生時代前期末から中期前半頃は藤之宮遺跡にて若干の遺物が採取されている。周辺の遺跡では横間渠遺跡、飯塚遺跡、飯塚北遺跡等で遺構を検出してい



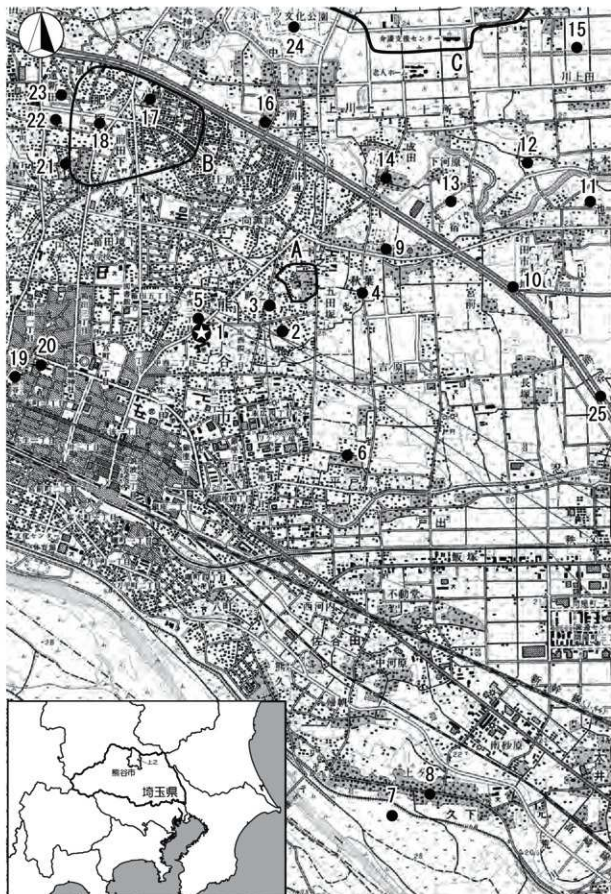
第1図 埼玉県の地形図

るが、再葬墓が顕著であり、台地縁辺部周辺地に所在が限られている。中期中頃になると新荒川扇状地・低地への進出がみられる。前中西遺跡等本遺跡付近でも破片ながら遺物が採取されるほか、池上遺跡からは東日本でも最古段階の環濠集落が検出されている。また、墓域とみられる小敷田遺跡からは最古段階の方形周溝墓がみられ、進出の本格化が窺える。中期後半から後期初頭にかけての時期は、前中西遺跡、諏訪木遺跡、北島遺跡、そして本遺跡で集落が営まれ、墓域が形成されている。前中西遺跡を中心としたエリアは、当該期において東日本でも屈指の遺構が集中する地点といえる様相を呈している。前中西遺跡では、多量の管玉を検出した礎床墓の検出や、粘板岩製の精密な石戈が出土しており、栗林式土器を有する文化圏の影響が強いことが判明しつつある。北島遺跡では、大規模な集落が営まれるとともに、水田跡とその水路や堰の存在が確認され、本格的な水田経営が行われていたことが判明している。後期初頭以降は藤之宮遺跡で土器片が若干採取される程度で、遺構は確認されていない。

古墳時代前期では、前代に引き続き諏訪木遺跡、前中西遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡で集落跡が確認されたほか、本遺跡、諏訪木遺跡、北島遺跡では墓域を検出している。本遺跡では、前方後方形周溝墓が検出された。市内では荒川右岸低地の下田町遺跡に続き2例目となるが、当該期は低地への進出が活発化してきた様相が窺える。中期になると痕跡が希薄になるが、前中西遺跡、藤之宮遺跡、中条遺跡で集落が営まれている。また中条古墳群内の豊塚古墳、女塚1号墳や奈良古墳群内の横塚山古墳など古墳の築造もみられる。後期に入ると、遺跡数は爆発的な増加がみられ、奈良・平安時代まで継続するものが多い。また、古墳群も群集墳形態のものが各地で築造され、上之古墳群もこの時期に該当する。古墳の特徴に注目すれば、利根川に近い古墳は角閃石安山岩が、荒川に近い古墳は砂岩等川原石が埋葬施設に使用される傾向がみられる。

律令体制の始まる奈良・平安時代には、本遺跡周辺は武蔵国幡羅郡、埼玉郡、大里郡のいずれか属していたと想定される。遺跡は古墳時代後期より継続するものが多く、規模も大きくなる。通常の集落と様相を異にするものがあり、本遺跡付近でみれば、諏訪木遺跡の東部では旧河川で水辺の祭祀の痕跡や、四面庇の大型掘立柱建物跡、軸方向の合う掘立柱建物跡群を検出している。池上遺跡では9世紀代の整列した大型掘立柱建物跡が確認されている。北島遺跡では、台形状区画や配列された建物跡がみられ、施軸陶器を数多く検出している。また、多量の墨書土器の出土も特徴として挙げられる。熊谷市街地にあたる宮町遺跡では、無数のビット・土坑とともに四面廂建物や多量の遺物を含む土器廃棄遺構の検出がなされている。このように官衙を想起させる痕跡はあるものの不明な点が多い状況がある。集落のほか、生産地として中条条里遺跡が挙げられ、今も地割の痕跡がみられる。

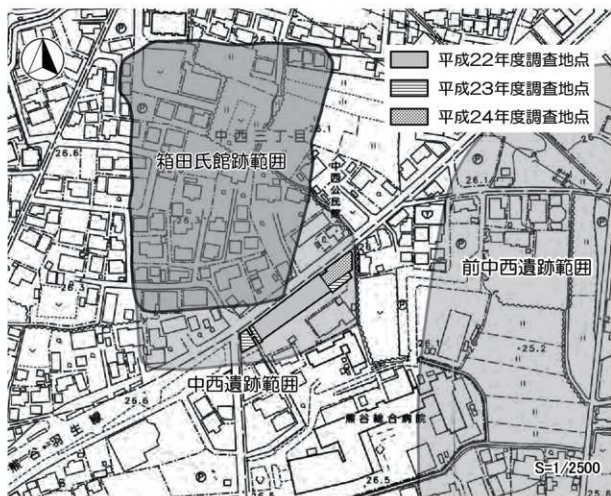
平安時代末から中世にかけて、武士が台頭する時期であり、本遺跡は箱田氏館跡とほぼ重複する。館跡は成田氏一族と推定される箱田三郎の館との伝承がある。現在は不明ながら土塁・水堀の痕跡及び三郎社があったとの伝承のほかは、遺構が確認されていない。成田氏館跡は成田助高から親泰の、忍城に移るまでの館跡とされるほか、久下氏館跡、市田氏館跡、河上氏館跡、熊谷氏館跡等多くの館跡がみられる。また、下田町遺跡は河川交通の要衝に営まれた宿と考えられているほかは、中世から近世期は依然として資料が不足し不明な点が多いのが実状である。



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代		
1	中西遺跡	弥生中・後古墳 奈良・平安	16	河上氏館跡	中世		
2	前中西遺跡	弥生中・後古墳 奈良・平安中・近世	17	八幡山遺跡	古墳		
3	藤之宮遺跡	弥生中 古墳 奈良・平安 中世	18	出口下遺跡	古墳後		
4	源訪木遺跡	縄文後・晩弥生中・後古墳 奈良・平安中・近世	19	熊谷氏館跡	中世		
5	箱田氏館跡	平安末～中世	20	宮町遺跡	奈良・平安 中世		
6	平戸遺跡	弥生中 古墳後 平安中・近世	21	肥塚館跡	中世		
7	久下氏館跡	中世	22	出口上遺跡	奈良・平安中・近世		
8	市田氏館跡	中世	23	肥塚中島遺跡	奈良・平安 近世		
9	成田氏館跡	中世	24	北島遺跡	弥生中・後古墳 奈良・平安中世		
10	池上遺跡	弥生中 古墳 平安	25	小敷田遺跡	弥生中 古墳前・後 奈良・平安		
11	古宮遺跡	縄文 弥生中 古墳前 奈良・平安中・近世	古墳群				
12	上河原遺跡	奈良・平安中・近世			A	上之古墳群	古墳後～末
13	宮の裏遺跡	古墳後			B	肥塚古墳群	古墳後～末
14	成田遺跡	古墳後	C	中条古墳群	古墳中期末～後		
15	中条桑里遺跡	古墳前・中奈良・平安					



第3図 調査地点位置図

III 遺跡の概要

1 調査の方法

今回報告するのは、遺跡範囲南側にあたる1,330㎡についてである。本地点は、区画整理による県道熊谷羽生線拡幅用地であるが、以前は株式会社東京電力所有の電柱置場として使用されており、重量物を安置するための架台が設置されていた。そのため巨大な独立基礎が多く埋没しており、全面的に遺構確認面ざりざりまで攪乱されている状況であった。

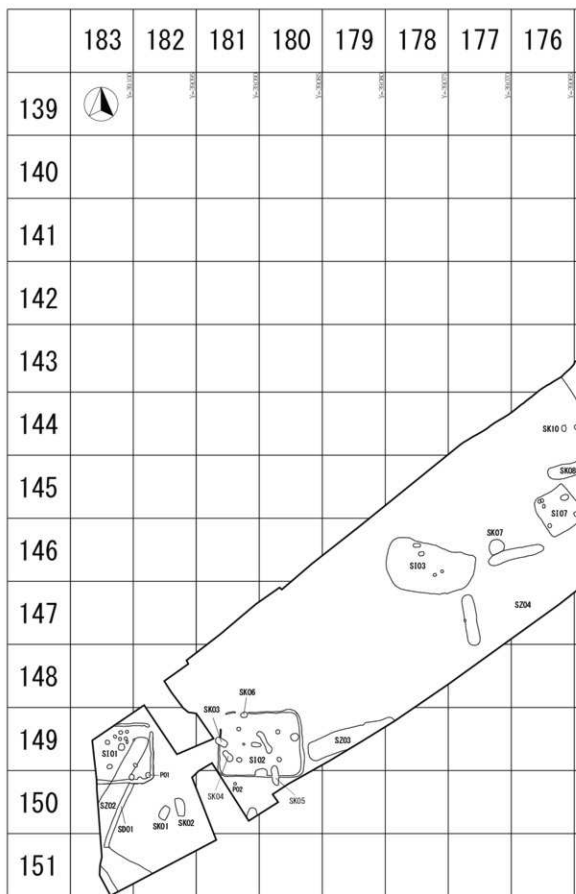
発掘調査は、重機により遺構確認面まで表土剥ぎを行った後、下記グリッドの設定を行った。なお座標は、周辺地における過去の調査事例と整合を容易にする為、日本測地系を用いた基準点測量による。グリッド設定後は、人力により遺構確認のための精査を実施し、検出された各遺構は各々手掘りを行った。遺物は必要に応じて写真撮影・実測後、慎重に取り上げを行った。遺構についても必要に応じて写真撮影した後、実測を行った。そして最後に遺構全体の写真撮影を行う一連の流れを各年度とも実施している。平成22年度は、調査区を二分し調査を行う反転の手法を用いて、南西側、続いて北東側の調査を実施した。調査開始当初は、調査区の半ばが遺跡範囲の隣接地といった状況であったため、遺構・遺物の薄くなるエリアとの認識であり、遺跡範囲の確認もかねて調査の実施といった趣もあったが、表土剥ぎを開始して、大量の遺物が出土し縄文時代の遺物包含層が確認されたことにより状況は一変した。また、前述しているが北東側の調査の際に東日本大震災が発生したため、調査を継続することに危険があり、早急に埋め戻す必要があったため、縄文時代の調査については、トレンチ調査のみの限定的な調査とせざるを得なかった。平成23年度は、南西側、北東側の2地点を同時に調査を実施したが、南西側で埋没した大きな土止めの擁壁が確認され、撤去するには残存している遺構の破壊が免れない状況であったため、撤去せずに調査を行った。また、空撮を熊東京航業研究所に委託して実施した。

本報告で示すグリッドについて、過去刊行された『前中西遺跡Ⅱ』（熊谷市教育委員会2002）及び『前中西遺跡Ⅲ』（熊谷市教育委員会2003）において、上之土地区画整理地内全体を一边5mとするグリッドが設定されており、これと同じ設定を用いた。今回報告する調査地点のグリッドについて、設定グリッドの南西端にあたり、東西が168～183、南北が138～151である。

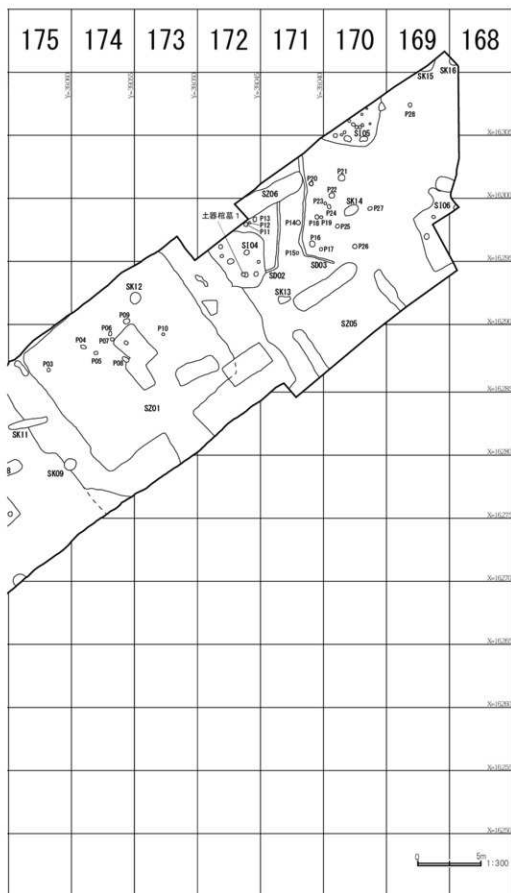
2 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構と遺物は、遺構が堅穴建物跡7軒、周溝墓6基のうち前方後方形周溝墓が1基、溝跡が3条、土坑16基、土器棺墓1基、ピット28基及び遺物包含層である。出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土偶、土製耳飾、土製円盤、土製勾玉、土製土玉等土製品、瑪瑙製勾玉、凝灰岩製管玉、石剣等石製品、打製石斧、磨製石斧、石織、砥石、石皿、スクレイパー、磨石、敲石等石器、ガラス小玉、鋤、鋏等木製品、人骨、獣骨等である。

時代別にみると、縄文時代は後期後半から晩期前半に帰属する遺構・遺物がみられた。遺構は堅穴建物跡4軒、溝跡2条、遺物包含層が該当する。堅穴建物跡は、僅かな痕跡や不明確なものなど、遺存状



第4図 調査区全測図



況は良好とはいえないが、第1号堅穴建物跡と第2号堅穴建物跡は並列の位置関係が目目できるか。第3号堅穴建物跡は不定形な形状ではあるが、良好な遺物出土状況を示す。遺物包含層は、調査区の南西側からゆるやかな弧を描きながら東へ流れる溝状の自然流路上に存在し、流路の覆土中に遺物が多量に含まれる。流路は調査区北東端で確認された沼状の地形の端とみられる深い落ち込みへと継続すると推測される。なお、沼状の地形は区画整理地内を東流する当時の衣川の水源地と考えられている沼で、近年まで存在しており、明治時代の迅速測図にもその存在がみられる。遺物について、土器は加曽利B2式から安行3c・d式までの精製・粗製土器を検出した。総量をみると後期後半が主体であり、晩期以降のものは少なくなる傾向がある。器種は深鉢が大半を占め、鉢、浅鉢、注口土器が一定量みられ、釣手土器、異形台付土器等が僅かながら出土している。遺物包含層は、土器の様相と同じく後期後半から晩期初頭にかけて形成されたものと推測する。土製品は、土器転用の土製円盤、耳飾等のほか土偶を検出している。土偶は51個体が確認された。時期でみると、加曽利B3式から安行3d式段階までのものと考えられ、幅広い時期のものが検出された。石器は、前述の器種が確認されているが、素材は荒川水系で確認されるものが主体を占め、このほか黒曜石、軽石等其他地域のものも含まれる。また、岩種不明ながら赤彩顔料の素材とみられる石材を検出しているほか、石皿等に僅かに顔料が残るものもみられた。石製品として、第3号堅穴建物跡より精緻なつくりの石剣を検出している。

弥生時代は中期後半から末にかけての堅穴建物跡が2軒、堅穴建物跡床面下より土器棺墓を1基を検出した。また、時期は特定できないが、周溝墓のうち第3号及び第4号が主軸方向より弥生時代のものと推定される。分布をみると、集落と墓域が東西に分かれる配置ともみれる。遺物について、土器は池上式が微量混入するほかは、北島式と、前中西式が主体を占め、器種は壺、甕が大半である。また、土製の装飾品として、勾玉、土玉が1点ずつ出土した。

古墳時代は前期の周溝墓を推定も含めて4基検出した。第1号周溝墓は前方後方形を呈するもので、新規荒川扇状地上では初の検出例となる。主体部とみられる土坑3基及び東溝に土器祭祀を伴う溝内土坑1基が確認された。後方部中心にある2基の主体部は、覆土がグライ化し、掘方が明瞭ではなかった。状況からは、既に盗掘等の破壊を受けている可能性がみられるが、骨片が覆土中に多量含まれており、主体部の痕跡として取り扱った。土器祭祀を伴う溝内土坑は、土器が壺2点、S字甕1点、埴1点の計4個体で構成され、底部が残存するものは焼成後穿孔がみられた。土坑は小型であったが、掘削深度は深い。前方部西溝からは、木製品がまとまって出土し、遺存状態は悪いものいづれも鋤・鍬等の掘削用具であった。このほか、出土遺物は土師器壺、器台のほか、遺物包含層上に築造されているため縄文土器が混入している。墳丘について、覆土の観察から、盛土は東から南方向へ崩落したと考えられる。第2号周溝墓は北東溝を欠く「コ」字を呈する。主体部は検出されなかったが、北西溝より溝内土坑及び用途不明の木製品3点を検出した。溝内土坑は長方形を呈し、溝床面を一段掘り込んでいる。覆土を採取し、後日洗浄したところ、人歯及び瑪瑙製勾玉、凝灰岩製管玉、ガラス小玉を検出した。溝内で埋葬された痕跡と考えてよいか。第5・6号周溝墓は四隅切れの形状を呈するが、主軸方向が第1号と同じとみられ、重複しないことから当該期に含めておきたい。

奈良時代は堅穴建物跡1軒の検出であるが掘方形状が崩れ遺存状態は悪い。遺物は土師器のうち、北武蔵型坏や長胴甕、鉢、丸甕、須恵器はかえりの付く蓋を検出し8世紀前半の所産である。

IV 遺構と遺物

1 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第5図）

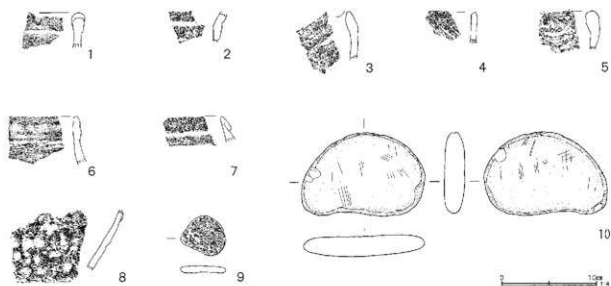
位置 182・183-149・150 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸4.8 m、短軸4.74 m、遺構確認面からの壁高は0.12 m。主軸方向はN-89°-W。

概要 平面形の全容は、東西が長い長方形を呈するとみられ、第2号竪穴建物跡とほぼ平行の位置関係



第5図 第1号竪穴建物跡



第6図 第1号竪穴建物跡出土遺物

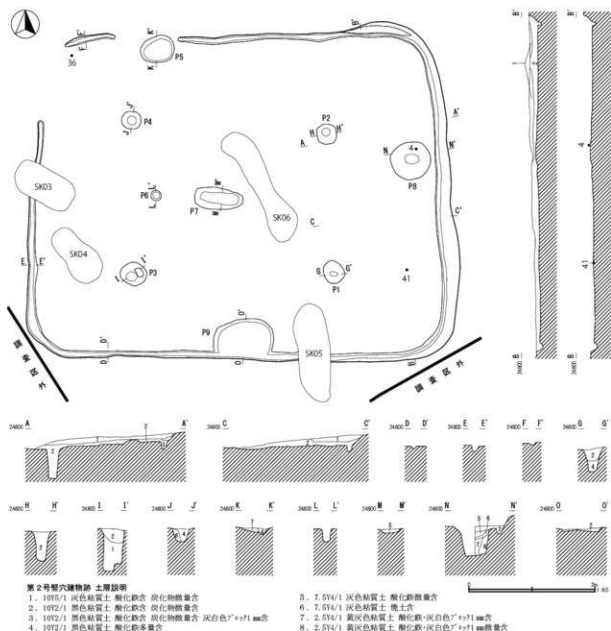
第2表 第1号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AK	外面：にじみ・橙色 内面：にじみ・黄棕色	C	口縁部片	平縁口縁 後期安行式 摩耗顯著
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADKN	外面：棕色 内面：棕色	C	胴部片	後期安行式 摩耗顯著
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADIN	外面：黒褐色 内面：灰黄色	C	口縁部片	波状口縁 粗製土器 摩耗顯著
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADK	外面：灰黄色 内面：にじみ・黄棕色	C	口縁部片	平縁口縁 粗製土器 摩耗顯著
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADCI	外面：にじみ・黄棕色 内面：黒褐色	C	口縁部片	平縁口縁 粗製土器 摩耗顯著
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADDEIX	外面：灰黄色 内面：灰黄色	B	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 折返し口縁
7	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADH	外面：にじみ・黄棕色 内面：にじみ・黄棕色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著 折返し口縁
8	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADKN	外面：にじみ・橙色 内面：棕色	B	胴部片	粗製土器 外面に波状瓦底
9	土製品 円盤				ADN	外面：黄棕色 内面：棕色	B	胴部片	長軸 1.75 cm、短軸 0.7 cm、厚さ 0.7 cm 土器の無文跡 分全転用
10	石器 磨石	備考：砂岩製 重量 344g 最大長 6.75 cm 最大幅 32.9 cm 最大厚 2.1 cm ほぼ完成							

係にある。東壁と南壁の一部は遺存するが、南壁の大部分は重複遺構に削平され、北側は遺物包含層に含まれ壁面の視認は困難であった。西側は調査区外である。覆土はほぼ水平に堆積しており、自然埋没と考えられる。炉跡は検出されていない。壁周溝はほぼ全周するが北東隅を欠く。溝幅は0.15～0.33 m、床面からの深さは0.1 mを測る。ピットは13基を検出し、このうちP 1～P 4は柱穴とみられ、床面からの深さは0.3～0.4 mを測る。このほかP 5のみ0.3 mと深いが、その他は底が浅い。時期については、本遺構は遺物包含層と重複し、明確な判断が困難であったことから、幅をもたせて提示した。位置関係から、第2号竪穴建物跡と同時期の可能性が考えられる。

遺物（第6図、第2表） 本遺構上からは縄文土器深鉢、土製円盤、磨石等が出土した。

1・2は後期安行式深鉢の精製土器とみられ、1は口縁部片で、平縁口縁に小突起が付く。2は胴部片である。3～8は後期後半から晩期の粗製土器である。3は波状口縁、5は口縁が肥厚する平縁口縁の無文土器。4は口縁が直立し、外面に斜位の沈線が施される。6は紐線土器の口縁部片。7は口縁部が内湾・内傾する折返し口縁の無文土器。8は深鉢の胴下半部片で、無文である。9は土器片転用の



第7図 第2号竖穴建物跡

土製円盤である。10は楕円形を呈する磨石である。

重複 第2号周溝墓、第1号溝跡と重複し、本遺構は第2号周溝墓、第1号溝跡より古い。

時期 縄文時代後期後半から縄文時代晩期前半

第2号竖穴建物跡（第7図）

位置 180・181-149・150 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸 6.87 m、短軸 5.16 m、遺構確認面からの壁高は 0.12 m。主軸方向は N-90° - E。

概要 平面形は東西がやや長い長方形を呈する。第1号竖穴建物跡とほぼ平行の位置関係にある。東壁及び南・北壁の東端は遺存するが、その他の壁は確認できなかった。覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。炉跡は検出されていない。壁周溝はほぼ全周するが北西側で途切れ気味となる。



第8图 第2号竖穴建物跡出土遺物

第3表 第2号竖穴建物跡出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1X	外面：黒褐色 内面：L2.5a・褐色	B	口縁部片	鼓状口縁 管谷、高井東式
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	A1	外面：L2.5a・黒褐色 内面：黒色	C	口縁部片	鼓状口縁 管谷、高井東式 摩耗顕著
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	B	外面：L2.5a・黒褐色 内面：L2.5a・褐色	C	口縁部片	鼓状口縁 管谷、高井東式 摩耗顕著
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1N	外面：L2.5a・黒褐色 内面：明黄褐色	B	口縁部片	鼓状口縁 管谷、高井東式
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	EX	外面：L2.5a・褐色 内面：L2.5a・褐色	A	口縁部片	鼓状口縁 管谷、高井東式
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1JN	外面：L2.5a・黒褐色 内面：L2.5a・黄褐色	C	口縁部片	鼓状口縁 管谷、高井東式 摩耗顕著
7	縄文土器 深鉢	-	-	-	A1M	外面：L2.5a・褐色 内面：褐色	B	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式
8	縄文土器 深鉢	(19.5)	(1.7)	-	X	外面：灰黄褐色 内面：灰白色	B	口縁部	平縁口縁 管谷、高井東式
9	縄文土器 深鉢	-	-	-	H1X	外面：L2.5a・緑色 内面：L2.5a・黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式 摩耗顕著
10	縄文土器 深鉢	-	-	-	KX	外面：棕色 内面：L2.5a・緑色	C	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式 摩耗顕著
11	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1N	外面：黒褐色 内面：灰黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式 摩耗顕著
12	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1K	外面：黒褐色 内面：黒褐色	B	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式
13	縄文土器 鉢	-	-	-	HS	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	C	胴部片	管谷、高井東式 摩耗顕著
14	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1JN	外面：明赤褐色 内面：褐色	A	口縁部片	平縁口縁 後期安行式
15	縄文土器 深鉢	-	-	-	IK	外面：L2.5a・棕色 内面：灰褐色	A	口縁部片	平縁口縁 後期安行式
16	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1JN	外面：明赤褐色 内面：L2.5a・黄褐色	A	口縁部片	平縁口縁 後期安行式
17	縄文土器 深鉢	-	-	-	HK	外面：褐色 内面：灰白色	C	胴部片	後期安行式 摩耗顕著
18	縄文土器 深鉢	-	-	-	TK	外面：褐色 内面：黒褐色	C	胴部片	後期安行式 摩耗顕著
19	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1	外面：黒褐色 内面：黒褐色	A	胴部片	後期安行式
20	縄文土器 深鉢	-	-	-	HK	外面：L2.5a・黄褐色 内面：灰黄褐色	B	胴部片	後期安行式
21	縄文土器 深鉢	-	-	-	A1	外面：暗褐色 内面：明赤褐色	C	口縁部片	平縁口縁 後期安行式 摩耗顕著
22	縄文土器 深鉢	-	-	-	AD	外面：L2.5a・黄褐色 内面：棕色	C	口縁部片	後期安行式 摩耗顕著
23	縄文土器 深鉢	-	-	-	AS	外面：L2.5a・黄褐色 内面：棕色	C	口縁部片	後期安行式 摩耗顕著
24	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1N	外面：明赤褐色 内面：L2.5a・棕色	B	口縁部片	平縁口縁 越前土器
25	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1N	外面：L2.5a・褐色 内面：L2.5a・黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 越前土器
26	縄文土器 深鉢	(21.0)	(12.2)	-	H1X	外面：棕色 内面：棕色	B	口～胴部片 80%	平縁口縁 越前土器
27	縄文土器 深鉢	-	-	-	TK	外面：L2.5a・黄褐色 内面：灰黄褐色	A	口縁部片	平縁口縁 惣文土器
28	縄文土器 深鉢	-	-	-	A1M	外面：L2.5a・褐色 内面：黒褐色	C	口縁部片	平縁口縁 惣文土器 摩耗顕著
29	縄文土器 深鉢	-	-	-	BI	外面：灰白色 内面：灰黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 惣文土器
30	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1N	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	C	口縁部片	平縁口縁 惣文土器 摩耗顕著
31	縄文土器 深鉢	-	-	-	A1M	外面：L2.5a・褐色 内面：灰黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 惣文土器
32	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1	外面：棕色 内面：L2.5a・黄褐色	C	胴部片	摩耗顕著
33	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1N	外面：暗灰色 内面：明褐色	C	胴部片	摩耗顕著
34	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1J	外面：L2.5a・棕色 内面：暗灰色	B	胴部片	摩耗顕著
35	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1JK	外面：黒褐色 内面：灰黄褐色	C	胴部片	摩耗顕著
36	縄文土器 底辺片	-	(6.4)	8.05	A1N	外面：L2.5a・棕色 内面：褐色	B	底辺 100%	網代板入り
37	縄文土器 底辺片	-	(4.1)	0.60	AB1N	外面：褐色 内面：L2.5a・黄褐色	B	底辺～胴部片 30%	
38	縄文土器 底辺片	-	(2.2)	(0.1)	AB1JN	外面：灰黄褐色 内面：黒褐色	B	底辺片 80%	

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
39	縄文土器 底部片	-	(2.1)	(6.0)	灰	外面：灰黄緑色 内面：灰黄緑色	C	底部 25%	摩耗顕著
40	縄文土器 内蓋				灰褐色	外面：明赤褐色 内面：にぶい赤褐色	C	胴部 100%	摩耗顕著 長軸4.5cm、短軸4.0cm、厚み0.7cm 土器の 蓋文部分も転用
41	弥生土器 壺	11.2	(12.3)	-	灰土灰	外面：にぶい黄緑色 内面：灰黄緑色	B	口縁部 80%	
42	弥生土器 甕	-	-	-	灰	外面：棕色 内面：棕色	A	胴部片	
43	弥生土器 底部片	-	(3.3)	(9.5)	灰土灰	外面：明赤褐色 内面：灰白色	B	底部 25%	外面赤彩あり 本壺瓶か

溝幅は0.12m、床面からの深さは0.1mを測る。ピットは9基を検出し、このうちP1～P4は柱穴とみられ、床面からの深さは、P1～4は0.36～0.48mを測るが、P4は0.18mと浅い。このほかP8のみ0.48mと深く、その他は底が浅い。時期については、明確な判断が困難であったことから、幅をもたせて提示した。位置関係から、第1号竪穴建物跡と同時期の可能性が考えられる。

遺物（第8図、第3表） 本遺構上からは、縄文土器深鉢、注口土器、土製円盤、弥生土器壺、甕等が出土した。

弥生土器はいずれも流れ込みであり、位置関係から、第3号周溝墓のものと推察される。1～13は曾谷・高井東式の深鉢及び鉢である。1～6は波状口縁の口縁部片であり、口縁に沿って沈線や隆帯により文様帯が施される。2・4は縦長の貼付文が施される。7～12は平縁口縁の口縁部片であり、口縁に沿って沈線により文様が施される。7・8は貼付文が施される。13はソロバン玉形状を呈する鉢。14～20は安行1・2式の深鉢である。14～16は口縁部片で、帯縄文と沈線が施される。15・16は口縁部が肥厚し、16は内傾する。17～20は胴部片である。17は中位の括れ箇所であり、沈線と刺突列が施される。18～20は縄文が施される。21～23は安行3d式の深鉢であり、口縁～胴上部片である。いずれも沈線による三又入組文が施される。24～26は後期後半に伴う組線土器の深鉢であり、口縁～胴上部片である。24は口縁に沈線が、25は口縁に沈線と刻目を巡らし以下に斜位の沈線が施される。26は口縁と胴部中に沈線と刺突列を巡らし、胴部上位に斜位の沈線が施される。27～31は無文土器の深鉢口縁部片。27は外傾、28は内湾、29～31は直立気味の形状である。32～39は後～晩期の縄文土器深鉢で、32～35は胴部片である。36～39は底部片である。40は土製円盤であり、胴部片の無文部分を転用したものである。41～43は弥生土器であり、中期後半以降のものとみられる。41は壺の口縁～頸部片である。口縁部に縄文と刺突が、頸部の窄まる箇所沈線と刺突が巡る。42は甕の胴部片でコノ字重ね文が施される。43は底部片であり、外面が赤彩される。

重複 第3～6号土坑と重複し、本遺構は第3～6号土坑より古い。

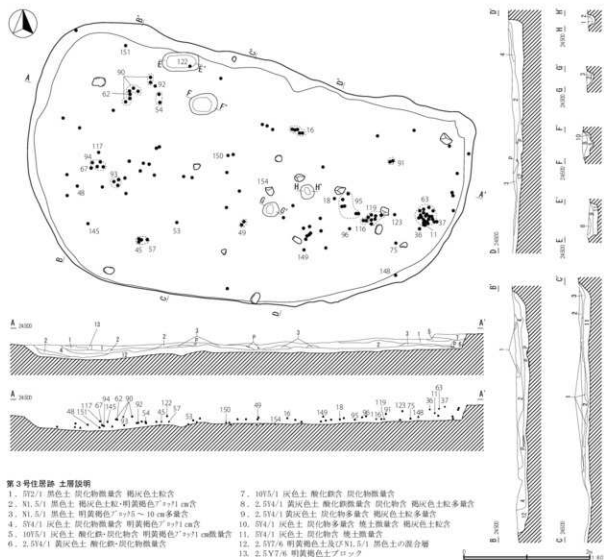
時期 縄文時代後期後半から縄文時代晩期前半

第3号竪穴建物跡（第9図）

位置 177・178-146・147グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸7.02m、短軸4.14m、遺構確認面からの壁高は0.24m。主軸方向はN-77°-W。

概要 平面形は東西が長い不整形な楕円形状を呈する。西側部分は遺物包含層上にあたる。南壁の中ほどから東側にかけて明瞭な壁面が確認できなかった。炉跡は検出されていないが、旧10・11層で焼土粒が確認されている。壁周溝はみられない。ピットは4基確認された。床面からの深さは、いずれも



第9図 第3号竪穴建物跡

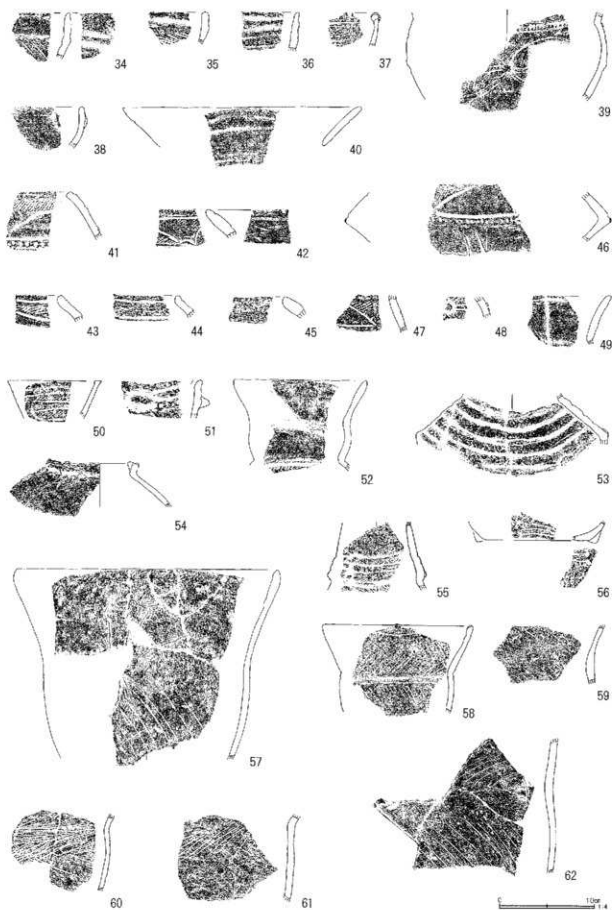
15 cm前後である。P 1・2は楕円形状を呈し、P 1は長軸60 cm、短軸30 cm、P 2は長軸45 cm、短軸35 cmである。P 3・4は直径35 cmの円形状を呈する。壁周溝は確認されなかった。重複する遺構はみられなかった。

遺物(第10～16図、第4表) 縄文土器深鉢、鉢、注口土器、不明土製品、石剣、打製石斧、石皿、台石等が出土した。

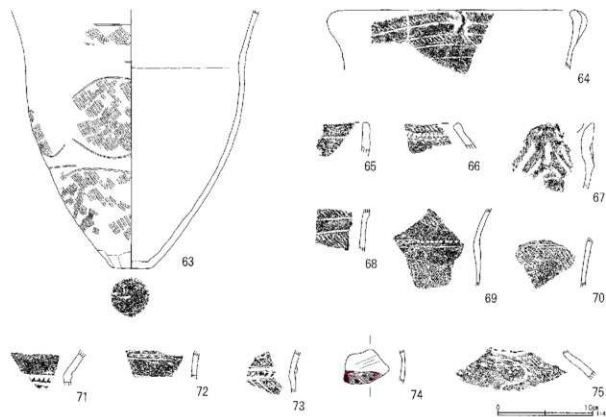
1～5は加曾利B 3式の深鉢である。1・2は口縁部の飾りである。3～4は口縁部片であり、口端に刺突を巡らし、外面に斜位の沈線を施し、内面に1条の窪みを巡らす。6～62は曾谷・高井東式である。6～8、11～16は波状口縁深鉢の口縁部片であり、口縁に沿って沈線や刻目帯により文様帯が構成されるものが多い。6は波底部に3条の沈線が施されるブリッジ状の貼付文が施される。7は波頂部付近の破片で、3条の沈線が施されるブリッジ状の貼付文が施される。8は山形となる波長部片で2つのボタン状貼付文が間隔を開けて縦位に配置されている。9・10は口縁部の飾りである。11は波状中位の破片。12～14は波底部付近の破片。15は無文である。16は低波状のもので、外面は口縁に沿つ



第 10 图 第 3 号竖穴建物出土遗物 1



第 11 图 第 3 号竖穴建物出土遗物 2

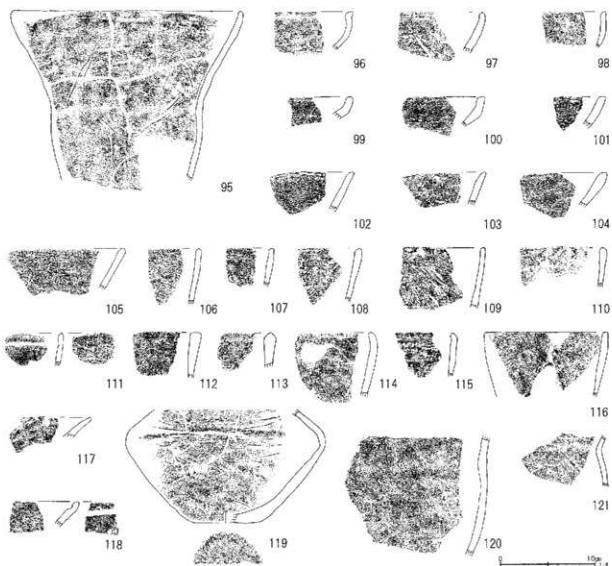


第12図 第3号竪穴建物出土遺物3

て無文部分があり、以下に斜位の沈線が施される。内面は口縁に沿う沈線と波頂部からの垂線が施される。17～31、33～36は平縁口縁深鉢の口縁部破片である。17～26は文様が帯縄文と沈線、貼付文による文様構成が主体となるものである。17～19は口縁部が内湾する形状。17は円形貼付文が上下に2つ配置され、2条の帯縄文が巡る。20～22、26は口縁部が内湾または屈曲して直立する形状。23～25は口縁部が内屈する形状のもの。25は胴部に斜位の沈線が施される。27～36は口縁部の文様が沈線主体のものである。27は口縁部が直立する形状で貼付文が施される。28は口縁部が内屈する形状のもの。29は口縁部が外反する形状で、沈線以下に縄文が施される。30・31・33～36は口縁部が直立する形状のもの。31は沈線間に刺突列が施される。34は内面に2条の窪みが巡る。32・37・38は注口土器の口縁部片と考えた。32は口端が平坦で、沈線間に刺突列が巡り、以下に縄文が施される。口縁部には穿孔が施されている。37は口端が突起状に盛り上がり、頂点に刻みが施される。38は内湾して直立する形状で、貼付文が施される。39は深鉢の胴中～下部の破片。胴部中部の括れに刻目帯が巡り、以下に小形の貼付文を起点として横位で2条の沈線と、その上下に弧線が配置され縄文が施される。40は無文の浅鉢口縁部片。41～49はソロバン玉形状の鉢である。口縁部から屈曲部分までに文様帯が施され、上向きの弧線と沈線や刺突列により区画が形成され、縄文が施されるものが主体である。43は横位の沈線間に縄文が施される。44は2条の沈線が巡る。45は無文である。48は文様の起点となる貼付文が付される。49は無文でソロバン玉形状につく口縁部片。50～54は注口土器である。50～52は口縁部片である。50は口端が平坦であり逆ハの字に開く形状。帯縄文が施される。51は横長の突起が付される。52は2段に括れる形状で、口縁部は無文であり、胴部以下に文様が施される。53は胴上部片であり、胴

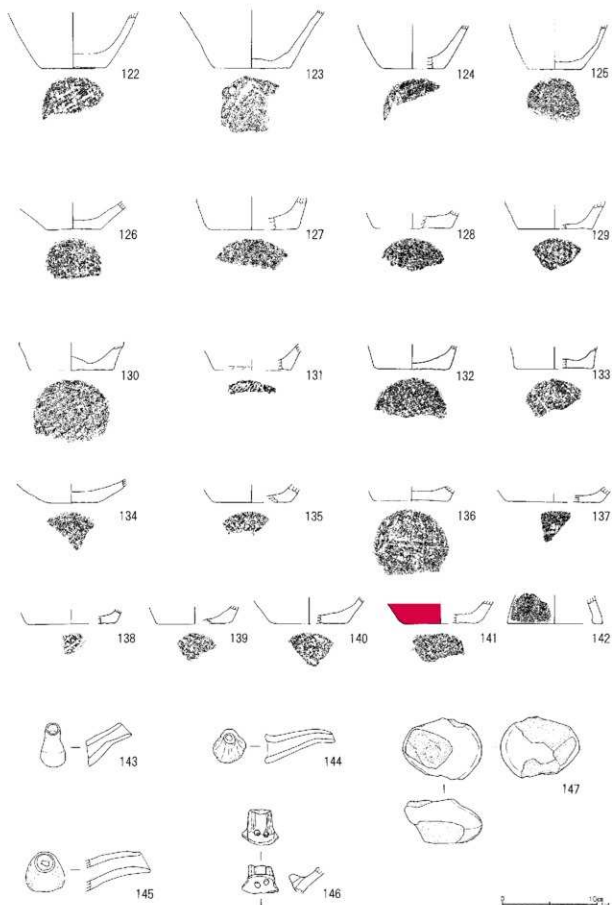


第 13 图 第 3 号竖穴建物出土遗物 4

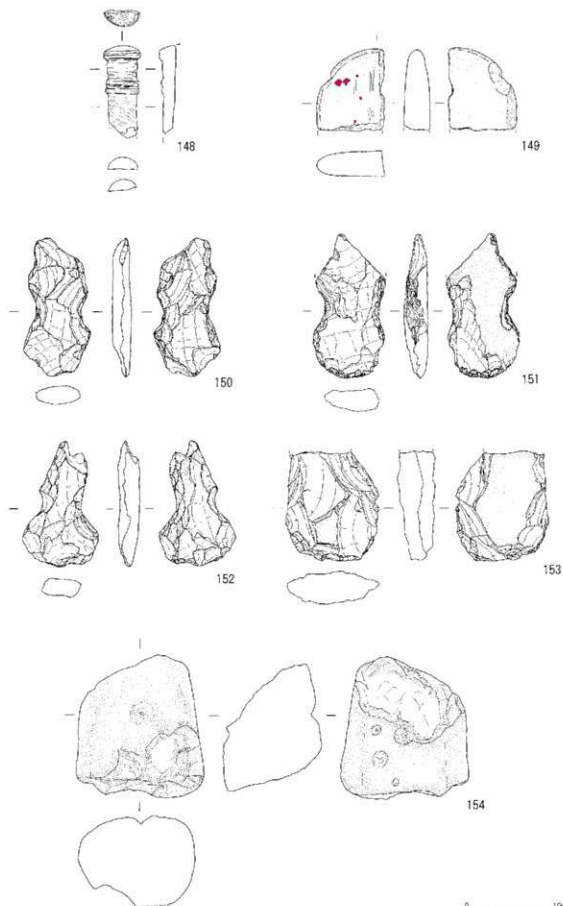


第14図 第3号竪穴建物出土遺物5

中部で屈曲する形状。5条の幅広な沈線が同心円状に巡る。54は口縁～胴上部片で無文である。短頸壺状を呈するが、口縁部内面に突起が施されている。55は長頸壺の頸部状を呈するが器種不明である。瓢型土器か。帯縄文が施されている。56は底部片である。角底とみられ、角隅はやや盛り上がっている。横位の沈線が施されている。57～62は粗製土器の深鉢である。57は口縁部がやや内湾し、胴部中位でゆるやかに括れる形状。胴中～下部に斜位の沈線が施される。58は口縁部がやや内湾し、胴部中位で括れる形状。胴上部に横位の羽状沈線が巡り、括れる箇所には2条の沈線が巡る。胴下部は斜位の沈線が施される。59～62は胴部の上下に斜位の沈線が施されるが、括れる箇所は無文である。60は括れる箇所沈線が巡り、胴下部は横位の羽状沈線が施される。61は胴下部に横位の羽状沈線が施される。63～74は安行1・2式の深鉢と考えられる。63は胴～底部の胴体。沈線区画内に縄文が充填される。64～66は平縁の口縁部片である。64は縦長の貼付文が付され帯縄文が施される。66は内傾する口縁部で刺突列が施される。67は波状口縁の口縁部片で、口縁にそって沈線と隆帯が施される。68～75は胴部片である。68は胴上部片で帯縄文が施される。69～73は胴部中位の括れる箇所であり、沈線と刺



第 15 图 第 3 号竖穴建物出土遗物 6



第 16 图 第 3 号竖穴建物出土遗物 7

第4表 第3号竖穴建物跡出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1N	外面：黒褐色 内面：黒褐色	C	口縁部片	平縁口縁 加蓋付皿式 摩耗顯著
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE2N	外面：L.25%赤褐色 内面：棕色	B	口縁部片	平縁口縁 加蓋付皿式
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1J	外面：黒褐色 内面：灰黄褐色	A	口縁部片	平縁口縁 加蓋付皿式
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1N	外面：黒褐色 内面：灰黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 加蓋付皿式
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE2N	外面：L.25%赤褐色 内面：L.25%黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 加蓋付皿式
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE2K	外面：黒褐色 内面：黒褐色	A	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式
7	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE2N	外面：L.25%褐色 内面：L.25%黄褐色	B	翻り	波状口縁 曾谷・高井東式
8	縄文土器 深鉢	-	-	-	KS	外面：L.25%赤褐色 内面：L.25%黄褐色	C	翻り	波状口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
9	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1	外面：L.25%黄褐色 内面：L.25%黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
10	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE	外面：L.25%黄褐色 内面：L.25%黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
11	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE2N	外面：灰黄褐色 内面：L.25%褐色	B	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式
12	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	B	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式
13	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1	外面：L.25%黄褐色 内面：L.25%黄褐色	C	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
14	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1	外面：L.25%黄褐色 内面：黒褐色	B	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式
15	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE2N	外面：L.25%赤褐色 内面：褐色	B	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式
16	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE2K	外面：L.25%黄褐色 内面：L.25%黄褐色	B	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式
17	縄文土器 深鉢 (27.8)	(7.6)	-	-	ABE1N	外面：L.25%赤褐色 内面：明赤褐色	A	口縁部 25%	平縁口縁 曾谷・高井東式
18	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1N	外面：赤褐色 内面：明褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
19	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE2N	外面：L.25%黄褐色 内面：L.25%黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
20	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1N	外面：灰褐色 内面：灰褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
21	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE	外面：棕色 内面：L.25%褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
22	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE2N	外面：L.25%黄褐色 内面：L.25%黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
23	縄文土器 深鉢 (27.0)	(7.6)	-	-	ABE2N	外面：L.25%黄褐色 内面：L.25%黄褐色	A	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
24	縄文土器 深鉢 (21.2)	(4.2)	-	-	ABE1N	外面：L.25%黄褐色 内面：L.25%黄褐色	B	口縁部 17%	平縁口縁 曾谷・高井東式
25	縄文土器 深鉢 (27.4)	(6.7)	-	-	ABE2K	外面：褐色 内面：黒褐色	C	口縁部 30%	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
26	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE	外面：L.25%褐色 内面：L.25%褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
27	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE2N	外面：灰黄褐色 内面：L.25%赤褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
28	縄文土器 深鉢 (26.0)	(3.1)	-	-	ABE1N	外面：赤褐色 内面：赤褐色	B	口縁部 12%	平縁口縁 曾谷・高井東式
29	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1K	外面：黒褐色 内面：黒褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
30	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE2N	外面：明赤褐色 内面：L.25%褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
31	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1N	外面：L.25%褐色 内面：L.25%褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
32	縄文土器 浅口土器	-	-	-	IN	外面：明赤褐色 内面：灰褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
33	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1K	外面：灰褐色 内面：黒褐色	A	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
34	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1J	外面：黒褐色 内面：灰黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
35	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABE1N	外面：暗灰黄色 内面：黄灰	A	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色调	烧成	残存率	備考
26	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADHN	外面：L2.5%黄棕色 内面：L2.5%褐色	C	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式 摩耗顕著
27	縄文土器 浅口土器	-	-	-	ADHN	外面：L2.5%黄棕色 内面：黄灰色	C	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式 摩耗顕著
28	縄文土器 注口土器	-	-	-	ADHN	外面：L2.5%黄棕色 内面：L2.5%黄棕色	B	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式
29	縄文土器 鉢	-	(8.4)	-	ADHN	外面：明赤褐色 内面：L2.5%褐色	C	胴部 1/3	管谷、高井東式 摩耗顕著
30	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ADK	外面：黒褐色 内面：黒褐色	B	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式
31	縄文土器 鉢	-	-	-	AD	外面：L2.5%褐色 内面：黄褐色	A	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式
32	縄文土器 鉢	-	-	-	AK	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	A	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式
33	縄文土器 鉢	-	-	-	ADDM	外面：黄褐色 内面：反黄褐色	B	L2.5%褐色	平縁口縁 管谷、高井東式
34	縄文土器 鉢	-	-	-	AD	外面：黄褐色 内面：黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式
35	縄文土器 鉢	-	-	-	ADCN	外面：L2.5%黄棕色 内面：反黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式 摩耗顕著
36	縄文土器 鉢	-	(5.3)	-	KN	外面：黒褐色 内面：黒褐色	B	胴部 1/3	管谷、高井東式
37	縄文土器 鉢	-	-	-	AK	外面：反黄褐色 内面：L2.5%黄棕色	B	胴部片	管谷、高井東式
38	縄文土器 鉢	-	-	-	EH	外面：L2.5%褐色 内面：黄褐色	C	胴部片	管谷、高井東式 摩耗顕著
39	縄文土器 鉢	-	-	-	ADH	外面：黄褐色 内面：黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 管谷、高井東式
40	縄文土器 注口土器	(8.9)	(4.0)	-	ADK	外面：L2.5%褐色 内面：L2.5%褐色	C	口縁部 1/3	平縁口縁 管谷、高井東式 摩耗顕著
41	縄文土器 注口土器	-	-	-	ADHN	外面：L2.5%黄棕色 内面：L2.5%黄棕色	C	口縁部片	深口口縁 管谷、高井東式 摩耗顕著
42	縄文土器 注口土器	(14.0)	(9.4)	-	AI	外面：L2.5%黄棕色 内面：反黄褐色	B	口縁部 1/3	平縁口縁 管谷、高井東式
43	縄文土器 注口土器	-	(5.4)	-	AD	外面：暗赤褐色 内面：暗赤褐色	B	胴部 4/5	管谷、高井東式
44	縄文土器 注口土器	(8.2)	(4.4)	-	AD	外面：黄褐色 内面：反黄褐色	A	口縁部 2/3	平縁口縁 管谷、高井東式
45	縄文土器 胴部片	-	-	-	ADHN	外面：L2.5%褐色 内面：黄褐色	B	胴部片	管谷、高井東式
46	縄文土器 底部片	-	-	(11.0)	AD	外面：反黄褐色 内面：反黄褐色	B	底部片 1/3	管谷、高井東式
47	縄文土器 深鉢	(27.3)	(20.0)	-	ADHN	外面：L2.5%黄棕色 内面：L2.5%黄棕色	B	口縁部～胴部 2/3	平縁口縁 管谷、高井東式
48	縄文土器 深鉢	(13.6)	(9.3)	-	ADN	外面：黄褐色 内面：明赤褐色	C	口縁部～胴部片 1/3	平縁口縁 管谷、高井東式 摩耗顕著
49	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADN	外面：黄褐色 内面：黄褐色	B	胴部片 (面割)	管谷、高井東式
50	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADHN	外面：L2.5%黄棕色 内面：黄褐色	B	胴部片	管谷、高井東式
51	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADN	外面：反黄褐色 内面：棕色	A	胴部片	管谷、高井東式
52	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADN	外面：L2.5%褐色 内面：L2.5%黄褐色	A	胴部片	管谷、高井東式
53	縄文土器 深鉢	-	27.3	4.2	ADHN	外面：L2.5%褐色 内面：L2.5%褐色	B	胴～底 6/5	後期安行式
54	縄文土器 深鉢	(24.8)	(6.3)	-	H	外面：棕色 内面：L2.5%黄棕色	B	口縁部 1/3	平縁口縁 後期安行式
55	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADHN	外面：L2.5%黄棕色 内面：L2.5%黄棕色	C	口縁部片	平縁口縁 後期安行式 摩耗顕著
56	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADK	外面：棕色 内面：明赤褐色	A	口縁部片	平縁口縁 後期安行式
57	縄文土器 深鉢	-	-	-	KN	外面：暗褐色 内面：褐色	B	口縁部片	深口口縁 後期安行式
58	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADK	外面：棕色 内面：L2.5%褐色	B	胴部片	後期安行式
59	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADHN	外面：L2.5%褐色 内面：L2.5%褐色	B	胴部片	後期安行式
60	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADKN	外面：反黄褐色 内面：L2.5%褐色	B	胴部片	後期安行式
61	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADN	外面：黄褐色 内面：黄褐色	B	胴部片	後期安行式

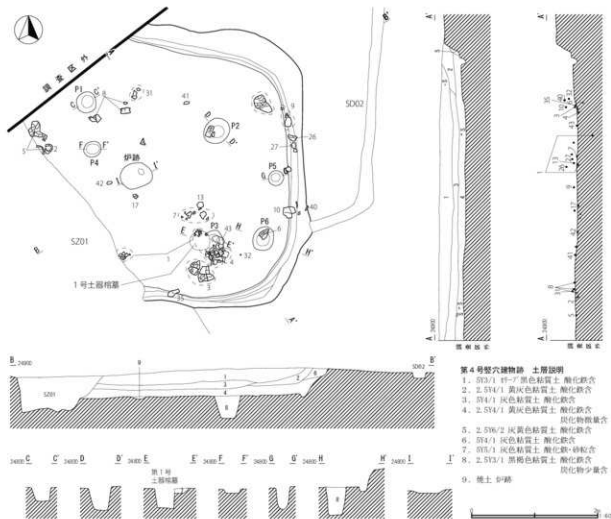
No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色调	烧成	残存率	備考
72	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDHN	外面：明赤褐色 内面：黒褐色	B	頸部片	後期安定式
73	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABKN	外面：黒褐色 内面：L2.5+褐色	B	頸部片	後期安定式
74	縄文土器 頸部片	-	-	-	TK	外面：L2.5+褐色 内面：灰白色	C	頸部片	後期安定式 摩耗顯著 外面亦剥落?
75	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABCDHN	外面：L2.5+黄褐色 内面：黒褐色	C	頸部片	後期安定式 摩耗顯著
76	縄文土器 深鉢	(36.3)	(7.3)	-	AIN	外面：L2.5+黄褐色 内面：灰白色	B	口縁部 20%	平縁口縁 結縁土器
77	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEJK	外面：L2.5+黄褐色 内面：灰黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 結縁土器 摩耗顯著
78	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEIN	外面：L2.5+黄褐色 内面：灰黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 結縁土器
79	縄文土器 深鉢	-	-	-	AI	外面：L2.5+黄褐色 内面：灰黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 結縁土器
80	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEIN	外面：L2.5+褐色 内面：明褐色	A	口縁部片	平縁口縁 結縁土器
81	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEI	外面：L2.5+黄褐色 内面：L2.5+褐色	C	口縁部片	平縁口縁 結縁土器 摩耗顯著
82	縄文土器 深鉢	-	-	-	AIK	外面：黒褐色 内面：黒褐色	A	口縁部片	平縁口縁 結縁土器
83	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEI	外面：明赤褐色 内面：明褐色	B	口縁部片	平縁口縁 結縁土器
84	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	外面：褐色 内面：L2.5+黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 結縁土器 摩耗顯著
85	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDFI	外面：L2.5+黄褐色 内面：L2.5+黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 結縁土器 摩耗顯著
86	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEIJ	外面：黒褐色 内面：灰黄褐色	A	口縁部片	平縁口縁 結縁土器
88	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB	外面：明赤褐色 内面：褐色	C	口縁部片	平縁口縁 結縁土器 摩耗顯著
89	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEJK	外面：褐色 内面：L2.5+黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 結縁土器
90	縄文土器 深鉢	(37.2)	(28.3)	-	ABKN	外面：灰黄褐色 内面：暗褐色	C	口縁部 10%	平縁口縁 結縁土器 摩耗顯著
91	縄文土器 深鉢	(19.6)	(10.4)	-	AIN	外面：L2.5+褐色 内面：黒褐色	B	口縁部 25%	波状口縁 無文土器
92	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	外面：褐色 内面：L2.5+赤褐色	B	口縁部片	波状口縁 無文土器
93	縄文土器 深鉢	(30.4)	(13.9)	-	BEAN	外面：L2.5+黄褐色 内面：灰白色	B	口縁部 20%	平縁口縁 無文土器
94	縄文土器 深鉢	(25.8)	(22.4)	-	ABEJK	外面：暗褐色 内面：L2.5+黄褐色	B	20%	平縁口縁 無文土器
95	縄文土器 深鉢	(24.0)	17.8	-	ABDHN	外面：黒褐色 内面：L2.5+黄褐色	B	口縁部 頸部 25%	平縁口縁 無文土器
96	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEIN	外面：灰黄褐色 内面：黒褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩耗顯著
97	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEIJ	外面：灰黄褐色 内面：L2.5+黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 無文土器
98	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABKN	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩耗顯著
99	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDHN	外面：灰白色 内面：L2.5+黄褐色	A	口縁部片	平縁口縁 無文土器
100	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEJN	外面：L2.5+黄褐色 内面：L2.5+黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩耗顯著
101	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	外面：L2.5+赤褐色 内面：明赤褐色	B	口縁部片	平縁口縁 無文土器
102	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEIJ	外面：灰白色 内面：L2.5+黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 無文土器
103	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEIN	外面：L2.5+褐色 内面：L2.5+黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 無文土器
104	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEJAN	外面：原色 内面：褐色	A	口縁部片	平縁口縁 無文土器
105	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEHN	外面：L2.5+黄褐色 内面：L2.5+黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩耗顯著
106	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDFKN	外面：L2.5+黄褐色 内面：L2.5+黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩耗顯著
107	縄文土器 深鉢	-	-	-	BEIJ	外面：黒褐色 内面：暗褐色	B	口縁部片	平縁口縁 無文土器
108	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEJN	外面：黒褐色 内面：黒褐色	B	口縁部片	平縁口縁 無文土器

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色调	烧成	残存率	備考
109	陶文土器 深鉢	-	-	-	AD7M	外面：黄灰色 内面：L2.5(黄棕色)	A	胴部片	平縁口縁 陶文土器
110	陶文土器 浅鉢	-	-	-	AD7N	外面：棕色 内面：棕色	C	口縁部片	平縁口縁 陶文土器 摩耗顯著
111	陶文土器 浅鉢	-	-	-	AD7X	外面：L2.5(褐色) 内面：黑褐色	B	口縁部片	平縁口縁 陶文土器
112	陶文土器 浅鉢	-	-	-	AD7T	外面：L2.5(黄棕色) 内面：L2.5(黄棕色)	B	口縁部片	平縁口縁 陶文土器
113	陶文土器 浅鉢	-	-	-	AD7N	外面：棕色 内面：灰褐色	C	口縁部片	平縁口縁 陶文土器 摩耗顯著
114	陶文土器 深鉢	-	-	-	AD7HX	外面：黄褐色 内面：L2.5(黄褐色)	B	口縁部片	平縁口縁 陶文土器
115	陶文土器 深鉢	-	-	-	AD7JK	外面：L2.5(赤褐色) 内面：明赤褐色	A	口縁部片	平縁口縁 陶文土器
116	陶文土器 注口土器	(13.0)	(6.8)	-	AD7JKN	外面：L2.5(黄棕色) 内面：黑褐色	C	口縁部20%	平縁口縁 陶文土器 摩耗顯著
117	陶文土器 浅鉢	-	-	-	AD7X	外面：明赤褐色 内面：黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 陶文土器
118	陶文土器 浅鉢	-	-	-	AD7KN	外面：L2.5(黄棕色) 内面：黑色	B	口縁部片	平縁口縁 陶文土器
119	陶文土器 注口土器	-	(12.0)	(7.6)	AD7KN	外面：明赤褐色 内面：黄灰色	B	流～胴 50%	陶文土器
120	陶文土器 浅鉢	-	-	-	AD7N	外面：黑褐色 内面：L2.5(黄棕色)	A	胴部片	陶文土器
121	陶文土器 深鉢	-	-	-	AD7UN	外面：灰褐色 内面：黑褐色	B	胴部片	陶文土器
122	陶文土器 底部片	-	(5.9)	(6.6)	AD7UN	外面：明赤褐色 内面：灰褐色	C	底部55%	摩耗顯著 鋼代痕あり
123	陶文土器 底部片	-	(6.1)	(7.8)	AD7N	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	C	底部50%	摩耗顯著 鋼代痕あり
124	陶文土器 底部片	-	(4.6)	(7.4)	AD7J	外面：灰褐色 内面：L2.5(褐色)	A	底部30%	鋼代痕あり
125	陶文土器 底部片	-	4.7	5.8	AD7UN	外面：黄灰色 内面：黄灰色	C	底部75%	摩耗顯著 鋼代痕あり
126	陶文土器 底部片	-	(2.9)	(6.0)	AD7JKN	外面：灰褐色 内面：黑色	C	底部60%	摩耗顯著 鋼代痕あり
127	陶文土器 底部片	-	(3.3)	(9.2)	AD7KN	外面：L2.5(黄棕色) 内面：灰褐色	C	底部30%	摩耗顯著 鋼代痕あり
128	陶文土器 底部片	-	(1.6)	(7.8)	AD7UN	外面：L2.5(褐色) 内面：L2.5(褐色)	C	底部片 25%	摩耗顯著 鋼代痕あり
129	陶文土器 底部片	-	(3.0)	(7.8)	AD7N	外面：棕色 内面：L2.5(黄棕色)	C	底部20%	摩耗顯著 鋼代痕あり
130	陶文土器 底部片	-	(3.0)	(8.5)	AD7JKN	外面：L2.5(黄棕色) 内面：灰褐色	C	底部60%	摩耗顯著 鋼代痕あり
131	陶文土器 底部片	-	(2.8)	(8.1)	AD7KN	外面：L2.5(赤褐色) 内面：灰褐色	A	底部15%	鋼代痕あり
132	陶文土器 底部片	-	(2.4)	(6.0)	AD7N	外面：灰黄褐色 内面：黄灰色	C	底部50%	摩耗顯著 鋼代痕あり
133	陶文土器 底部片	-	(2.3)	(7.4)	AD7JUN	外面：棕色 内面：黑褐色	B	底部25%	鋼代痕あり
134	陶文土器 底部片	-	(2.0)	(5.0)	AD7JUN	外面：明赤褐色 内面：黑褐色	B	底部25%	鋼代痕あり
135	陶文土器 底部片	-	(1.9)	(9.2)	AD7N	外面：明赤褐色 内面：黑褐色	C	底部片 20%	摩耗顯著 鋼代痕あり
136	陶文土器 底部片	-	(1.55)	(8.0)	AD7UN	外面：赤褐色 内面：L2.5(赤褐色)	C	底部90%	摩耗顯著 鋼代痕あり
137	陶文土器 底部片	-	(1.7)	(10.0)	AD7UN	外面：棕色 内面：L2.5(黄棕色)	B	底部15%	鋼代痕あり
138	陶文土器 底部片	-	(1.5)	(9.3)	AD7M	外面：灰黄褐色 内面：黄灰色	C	底部10%	摩耗顯著 鋼代痕あり
139	陶文土器 底部片	-	(1.85)	(6.0)	AD7K	外面：灰褐色 内面：灰黄褐色	C	底部20%	摩耗顯著 鋼代痕あり
140	陶文土器 底部片	-	(2.8)	(8.2)	AD7J	外面：L2.5(黄棕色) 内面：黄灰色	B	底部25%	
141	陶文土器 底部片	-	(2.3)	(7.8)	AD7UN	外面：L2.5(黄棕色) 内面：L2.5(黄棕色)	B	底部片 20%	外面赤痕あり
142	陶文土器 付付底部	-	(3.0)	(10.0)	AD7UN	外面：L2.5(黄棕色) 内面：L2.5(赤褐色)	C	底部10%	摩耗顯著
143	陶文土器 注口土器	-	-	-	AD7E	外面：L2.5(黄棕色) 内面：灰黄褐色	B	注口部片	
144	陶文土器 注口土器	-	-	-	K	外面：灰褐色 内面：灰褐色	B	注口部完形	

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
145	縄文土器 注口土器	-	-	-	AIX	外面：にじい・黄褐色 内面：灰色	C	注口部90%	摩耗顕著
146	縄文土器 釣手土器	-	-	-	粗麻	外面：にじい・黄褐色 内面：にじい・橙褐色	B	釣手部片	
147	土製品 用途不明	備考：最大長 9.4cm 最大幅 6.7cm 最大厚 4.7cm 楕円形底							
148	石製品 石剣	備考：板状岩製 重量 52g 最大長 9.7cm 最大幅 3.8cm 最大厚 1.3cm 側部 80%							
149	石器 石造	備考：円錐岩製 重量 257g 最大長 18.7cm 最大幅 (7.1)cm 最大厚 (2.7)cm 一部欠損							
150	石器 打製石片	備考：頁岩製 重量 218.27g 最大長 14.6cm 最大幅 7.0cm 最大厚 2.0cm 完整							
151	石器 打製石片	備考：板状岩製 重量 284.44g 最大長 15.2cm 最大幅 7.6cm 最大厚 2.5cm 完整。基部欠損後リダクション							
152	石器 打製石片	備考：頁岩製 重量 205.83g 最大長 13.3cm 最大幅 8.0cm 最大厚 2.3cm 欠損。刃部欠損							
153	石器 打製石片	備考：片岩製 重量 544g 最大長 11.5cm 最大幅 9.6cm 最大厚 1cm 片端欠損							
154	石器 台石	備考：円錐岩製 重量 2400g 最大長 (9.9)cm 最大幅 (13.5)cm 最大厚 (9.5)cm 側端欠							

突列が施文される。74 は外面の縄文箇所には赤彩が施されている。75 は胴上部片とみられるが、摩耗顕著である。安行 3 a・b 式のものか。76～90 は紐線文土器の深鉢であり、後期後半に伴うものとみられる。76～81 は口縁に押圧痕が巡るもので、76・77 は加曽利 B 3 式に伴うものである。79 は紐線以下に斜位の沈線が施される。80・81 は沈線を巡らすのが押圧が弱い。82～84 は刻みを巡らすものである。82 は紐線以下に斜位の沈線を施す。85～90 は無文である。85～87、90 は口縁部がほぼ直立形状。88・89 は口縁部が肥厚するもの。88 は焼成後穿孔がみられる。91～121 は無文土器であり、後期後半に伴うものとみられる。91・92 は波状口縁深鉢の口縁部片である。93～115 は平縁口縁の深鉢である。93 は口縁～胴上部までの部位で、口縁部は内屈する。94・95 は口縁～胴下部までの個体である。胴部中位で括れ、口縁に向かって逆ハの字に開く形状であり、口縁部は直立気味となる。96～98 は口縁が内湾して直立する形状。99・100 は口縁部が屈曲して直立する形状。101～105 は口縁部が外傾して開く形状。106～109 は口縁部がゆるやかに外傾して開く形状。110～113 は口縁が直立する形状で、111 は内面に沈線が巡り、112・113 は口縁部がやや肥厚する。114・115 は口縁が内屈する形状である。116 は注口土器の口縁部片と考えた。117・118 は浅鉢の口縁部片であり、118 は内面に窪みが巡る。119 は無文の胴部片であるが、注口土器と考えた。120・121 は深鉢の胴部片である。122～141 は底部片である。122～140 は不鮮明ながらも網代痕がみられた。141 は外面が赤彩されている。142 は台付底部の脚台部である。143～145 は注口部片。146 は釣手土器の破片である。上面は 2 条の沈線が端部に沿って施される。横長で山形の貼付で装飾され 2 つの穿孔がみられた。147 は楕円形を呈する土製品であるが、遺存状態が悪く、不明とせざるを得ない。148 は石剣の柄部片である。精緻に作られている。端部は円形で扁平な柄頭状を呈する。柄部には籠状の装飾が 2 列みられるが、籠状装飾以下を、刃部とみるか柄部の続きとみるかは不明である。149 は石皿とみられる。150～153 は打製石斧。154 は表・裏面に窪みがあり、台石とした。

時期 縄文時代後期後半から縄文時代晩期前半



第17図 第4号竪穴建物跡

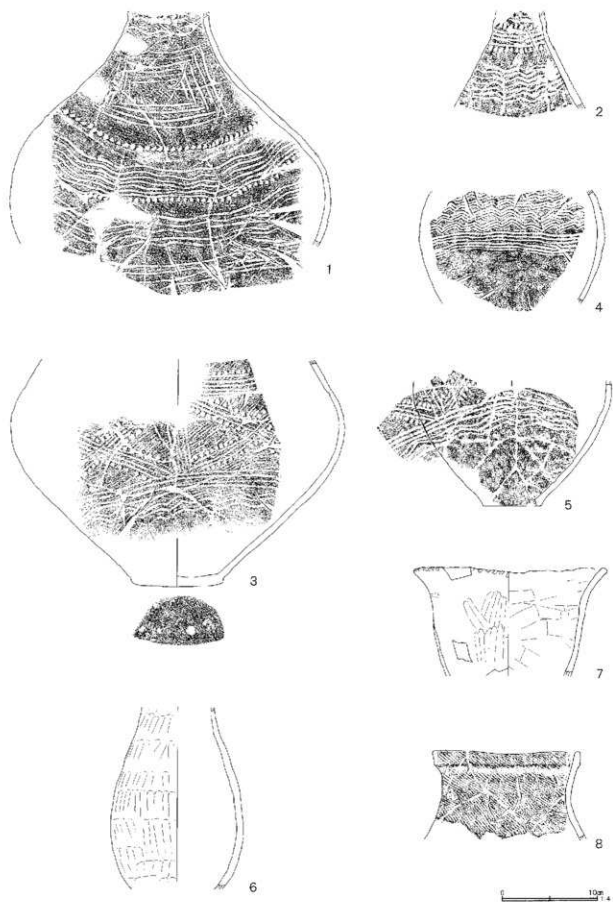
第4号竪穴建物跡（第17図）

位置 171・172-141・142 グリッドに位置する。

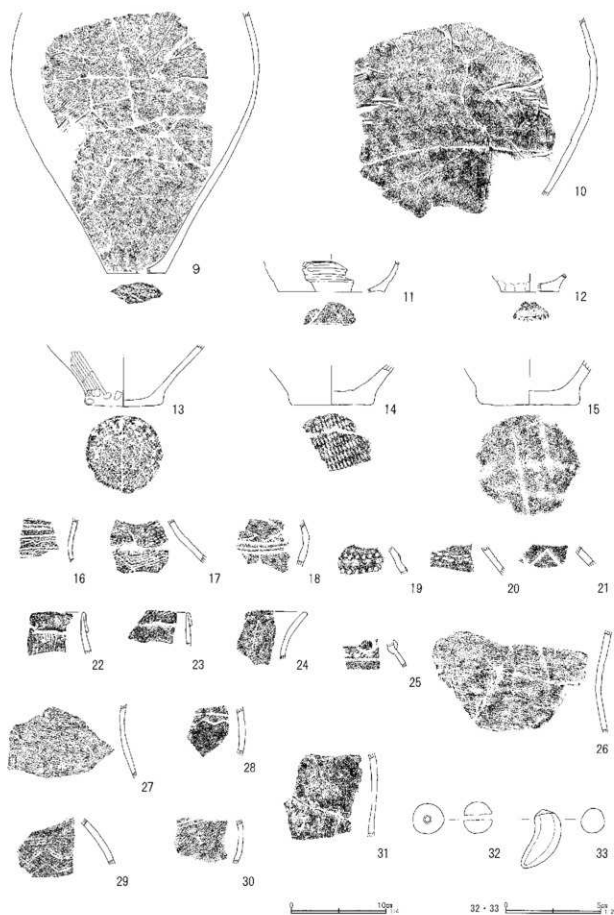
規模 検出範囲で長軸4.44m、短軸4.44m、遺構確認面からの壁高は0.33m。主軸方向はN-10°-E。

概要 平面形は西側が第1号周溝墓に切られ全容は不明であるが、東西が長い長方形を呈するものと考えられる。覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。屋内より土器棺墓が1基検出している。土器棺墓の蓋は破損していたが、復元すると上部が床面より上位ある可能性があるため、土器棺墓との新旧関係は、同時期または土器棺墓が新しいとしかいえない。灰跡は楕円形状に広がる径0.5m程の焼土化した底面が確認できた。壁周溝は検出範囲では全周する。溝幅は0.1mから0.15m、床面からの深さは0.1mを測る。ピットは6基を検出し、形状はいずれも円形を呈する。規模は、P1は長軸60cm、短軸30cm、深さ21cm、P2は長軸42cm、短軸36cm、深さ36cm、P3は長軸36cm、短軸30cm、深さ6cm、P4は長軸27cm、短軸24cm、深さ6cm、P5は長軸24cm、短軸24cm、深さ36cm、P6は長軸36cm、短軸30cm、深さ42cmを測る。

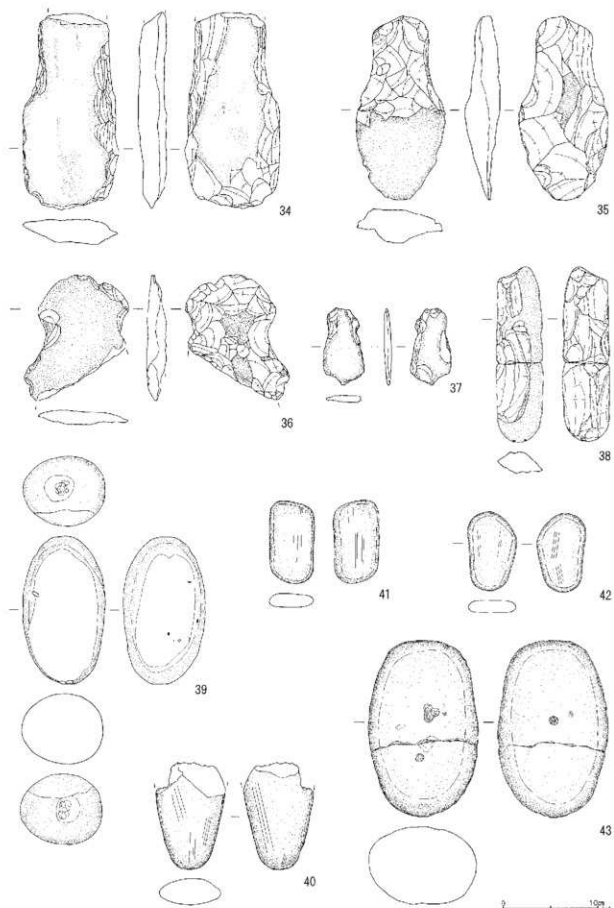
遺物（第18～20図、第5表） 弥生土器壺、甕、土玉、土製勾玉、打製石斧、スクレイパー、敲石、磨石、台石等が出土した。



第 18 图 第 4 号竖穴建物跡出土遺物 1



第19图 第4号竖穴建物跡出土遺物2



第20图 第4号竖穴建物跡出土遺物3

第5表 第4号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 蓋	-	(24.7)	-	ABHK	外面：L250・黄棕色 内面：褐灰色	C	胴～胴部	摩耗顯著
2	弥生土器 蓋	-	(16.1)	-	ABH1N	外面：灰黄色 内面：褐灰色	C	胴部 20%	摩耗顯著
3	弥生土器 蓋	-	(24.15)	9.6)	ABH1JK	外面：L250・黄棕色 内面：褐灰色	C	胴～底 30%	摩耗顯著
4	弥生土器 蓋	-	(12.0)	-	ABH1X	外面：灰黄色 内面：灰黄色	B	胴部 20%	
5	弥生土器 蓋	-	(13.25)	6.2)	ABH1IK	外面：L250・黄棕色 内面：褐灰色	C	胴～底部 30%	摩耗顯著
6	弥生土器 蓋	-	(19.2)	-	ABKDEIN	外面：灰黄色 内面：褐灰色	C	胴部 70%	摩耗顯著
7	弥生土器 甕	(20.3)	(11.5)	-	ABIK	外面：灰黄色 内面：L250・黄棕色	C	口縁～胴上部 50%	摩耗顯著
8	弥生土器 甕	15.5	(9.3)	-	ABH1JK	外面：黄褐色 内面：灰黄色	C	口縁部 75%	摩耗顯著
9	弥生土器 甕	-	(27.5)	(6.2)	ABH1KN	外面：L250・褐色 内面：L250・黄棕色	B	底～胴部 20%	
10	弥生土器 甕	-	-	-	ABIN	外面：黄褐色 内面：L250・黄棕色	B	胴部 20%	
11	弥生土器 底碎片	-	(3.3)	(11.1)	ABIN	外面：灰黄色 内面：黄褐色	B	底碎片 15%	
12	弥生土器 底碎片	-	(1.7)	(6.6)	ABE	外面：L250・黄棕色 内面：L250・黄棕色	C	底碎片 45%	摩耗顯著
13	弥生土器 甕	-	(6.4)	8.3	ABIK	外面：灰黄色 内面：黄褐色	B	底部 100%	本葉取あり
14	弥生土器 底碎片	-	(4.2)	-	ABH1IK	外面：明赤褐色 内面：褐色	C	底部 25%	摩耗顯著 銅代取あり
15	弥生土器 底碎片	-	(4.7)	10.0	IKN	外面：明赤褐色 内面：褐色	C	底碎片 100%	摩耗顯著 棒状取あり
16	弥生土器 蓋	-	-	-	KX	外面：褐灰色 内面：L250・黄棕色	B	胴部片	
17	弥生土器 蓋	-	-	-	EI	外面：L250・黄棕色 内面：L250・黄棕色	C	胴部片	摩耗顯著
18	弥生土器 蓋	-	-	-	ABH1JK	外面：黄褐色 内面：黄褐色	C	胴部片	摩耗顯著
19	弥生土器 蓋	-	-	-	IK	外面：L250・褐色 内面：褐色	C	胴部片	摩耗顯著
20	弥生土器 蓋	-	-	-	ABH1JN	外面：灰黄色 内面：褐灰色	C	胴部片	摩耗顯著
21	弥生土器 甕	-	-	-	ABH	外面：L250・黄棕色 内面：L250・黄棕色	C	胴部	摩耗顯著
22	弥生土器 甕	-	-	-	ABKN	外面：灰黄色 内面：L250・黄棕色	C	口縁部片	摩耗顯著
23	弥生土器 甕	-	-	-	ABKN	外面：L250・黄棕色 内面：黄褐色	B	口縁部片	
24	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1JN	外面：L250・黄棕色 内面：L250・褐色	C	口縁部片	摩耗顯著
25	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1JN	外面：黄褐色 内面：L250・褐色	C	胴部片	摩耗顯著
26	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1JKN	外面：褐色 内面：灰黄色	B	胴部片	
27	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1AM	外面：灰黄色 内面：褐灰色	C	胴部 15%	摩耗顯著
28	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1K	外面：灰黄色 内面：L250・黄棕色	C	胴部片	摩耗顯著
29	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1K	外面：黄褐色 内面：褐色	C	胴部片	摩耗顯著
30	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1JK	外面：黄褐色 内面：黄褐色	C	胴部片	摩耗顯著
31	弥生土器 甕	-	-	-	ABH1JK	外面：黄褐色 内面：L250・黄棕色	C	胴部片	摩耗顯著
32	土製品 土玉	備考：最大長 1.6 cm 最大幅 1.6 cm 口径 0.3 cm 重量 4g 光沢							
33	土製品 土玉	備考：最大長 (3.1) cm 最大幅 2.1 cm 最大厚 1.3 cm 重量 7g 残存率 70%							
34	石部 打製石片	備考：紅褐色岩製 重量 810g 最大長 20.8 cm 最大幅 10.0 cm 最大厚 2.7 cm							
35	石部 打製石片	備考：チャート製 重量 527.5g 最大長 19.5 cm 最大幅 9.4 cm 最大厚 3.5 cm							
36	石部 打製石片	備考：灰岩製 重量 250.5g 最大長 13.8 cm 最大幅 9.95 cm 最大厚 2.05 cm 残存率 50%							
37	石部 スタンプイバー	備考：閃緑岩製 重量 30g 最大長 7.9 cm 最大幅 4.2 cm 最大厚 0.75 cm 小形、光沢							

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
38	石器 明石	備考：片割製 重量287.5g 最大長 18.5 cm 最大幅 4.9 cm 最大厚 2.3 cm							
39	石器 磨石	備考：福沢岩製 重量1321g 最大長 15.5 cm 最大幅 8.6 cm 最大厚 7.75 cm 被熱痕							
40	石器 磨石	備考：緑色石製 重量326.5g 最大長 11.2 cm 最大幅 7.35 cm 最大厚 2.9 cm							
41	石器 磨石	備考：砂岩製 重量93.5g 最大長 8.8 cm 最大幅 4.8 cm 最大厚 1.6 cm							
42	石器 磨石	備考：砂岩製 重量96.6g 最大長 8.4 cm 最大幅 5.2 cm 最大厚 1.3 cm							
43	石器 台石	備考：閃緑岩製 重量200kg 最大長 18.7 cm 最大幅 11.6 cm 最大厚 8.0 cm							

1～6、16～21は弥生土器壺。1は頸～胴中部までの部位であり、なだらかに開く肩部で無花果状の形状を呈する。頸部に振りの大きい波状文、肩部に重四角文、胴上部に円形刺突列の間に振りの大きい波状文、胴中部以下に波状文と直線文が施される。2は頸～肩部までの部位であり、直立気味の頸部で肩部は「ハ」字状に開く。頸部は円形刺突列の間に直線文、肩部に振りの大きい波状文が施される。3は胴～底部までの部位で胴が張る形状。上下に巡る直線文間に菱形文が配置される構成である。菱形文は3～4条の平行沈線と平行する円形刺突列によって表され、区画内はR L単節縄文を地文とし、中心を垂下する5条の平行沈線が施される。下部の直線文以下に振りの大きい波状文が施される。4は胴部が遺存し、小ぶりで胴部はやや張る形状。上位に3本1単位の櫛歯状工具による振りの小さい波状文、中位に直線文が施される。5は胴中部から底部にかけての部位である。文様の構成は3と同じである。6は頸～胴下部までの部位で、肩部は開かず、最大径は胴下部にみられる。無文であり、縦方向のナデにより調整される。16は頸部片で平行沈線間に振りの大きい波状文が施される。17は肩部片で、3個1単位の刺突列と平行沈線が施される。18は胴中部片で、直線文が巡る。19・20は肩部片で、刺突列が巡る。21は肩部片で、上向きの鋸歯状文か。7～10、22～31は甕。7は口縁～胴中部までの個体。口縁部が逆ハの字状に開く形状。口端に刻みを巡らすほかは無文である。8は縄文を地文とする口縁～胴上部までの個体。口縁部以下がゆるやかに窄まって胴部中位以下が開く形状。9・10は胴中～下部にかけての大形の個体で、最大径が胴部中位にある。9は縄文を地文とし、10は無文である。22・23は口縁部片で折り返し口縁。24は無文の口縁部片で外反する形状。25はボタン状貼付文が付される。26～31は胴部片である。11～15は底部の破片。11は沈線により施文される。池上式とみられ流れ込みである。13は木葉痕が、14は網代痕が、15は棒状圧痕がみられる。32・33は土製の裝飾品で、32は玉で中心に穿孔がある。33は勾玉であり先端を欠く。34～43は石器。34～36は打製石斧。37はスクレイパー。38は敲石。39～42は磨石。43は両面に小形の円形窪みがみられ、台石とした。

重複 第1号周溝墓、第1号土器棺墓、第2号溝跡と重複し、本遺構は第1号周溝墓より古く、第2号溝跡より新しい。第1号土器棺墓とは同時期または古い。

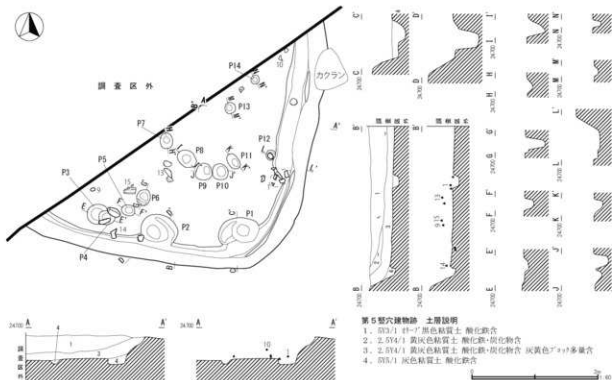
時期 弥生時代中期後半

第5号竪穴建物跡（第21図）

位置 170・171-139・140 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸4.23 m、短軸4.20 m、遺構確認面からの壁高は0.33 m。主軸方向N - 81.5°

- W

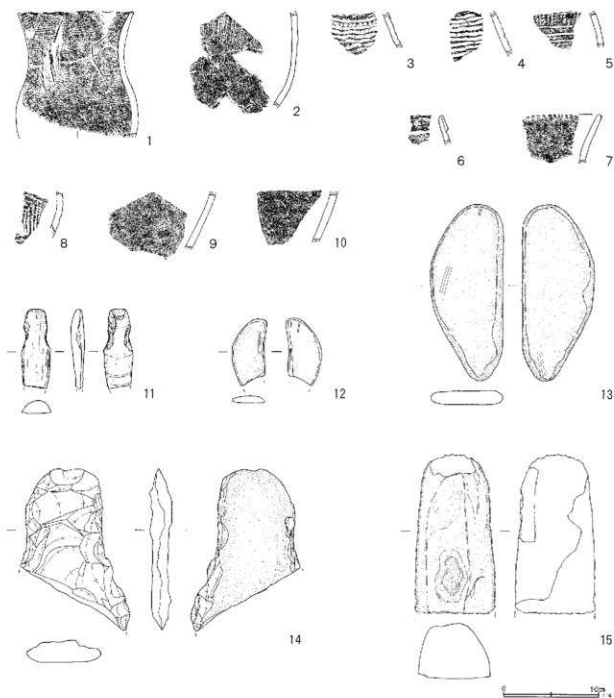


第21図 第5号竪穴建物跡

第6表 第5号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 甕	(12.0)	(13.30)	-	ABHX	外面：黒褐色 内面：灰黄褐色	C	口～胴部 50%	摩耗顕著
2	弥生土器 甕	-	-	-	ABHJ	外面：黒褐色 内面：灰黄褐色	C	胴部片	摩耗顕著 P1より出土
3	弥生土器 甕	-	-	-	ABCJ	外面：明赤褐色 内面：L.55+棕色	B	胴部片	P1より出土
4	弥生土器 甕	-	-	-	-	外面：棕色 内面：L.55+赤褐色	B	胴部片	
5	弥生土器 甕	-	-	-	AEJN	外面：暗赤褐色 内面：L.55+褐色	B	胴部片	P1より出土
6	弥生土器 甕	-	-	-	ABEN	外面：黒褐色 内面：L.55+黄褐色	C	口縁部片	摩耗顕著
7	弥生土器 甕	-	-	-	ABHN	外面：黒褐色 内面：黒褐色	C	口縁部片	摩耗顕著
8	弥生土器 甕	-	-	-	ABTW	外面：灰白色 内面：L.55+黄褐色	C	胴部片	摩耗顕著
9	弥生土器 甕	-	-	-	ABDK	外面：L.55+黄褐色 内面：灰黄色	C	胴部片	摩耗顕著
10	弥生土器 胴部片	-	-	-	ABCJK	外面：棕色 内面：灰白色	C	胴部片	摩耗顕著
11	石製品 銅製製品	備考：緑色石製 重量 49g 最大長 8.3cm 最大幅 2.1cm 最大厚 1.3cm							
12	石器 磨石	備考：砂岩製 重量 25g 最大長 7.1cm 最大幅 3.7cm 最大厚 0.5cm							
13	石器 磨石	備考：片岩製 重量 264.5g 最大長 18.6cm 最大幅 7.6cm 最大厚 1.5cm							
14	石器 打製石片	備考：板岩製 重量 40g 最大長 17.2cm 最大幅 11.4cm 最大厚 2.4cm							
15	石器 台石	砂岩製 重量 1450g 最大長 (16.7)cm 最大幅 (8.4)cm 最大厚 (2.2)cm							

概要 東南側が検出されたが、西北側半分が調査区外であり、平面形状の全容は不明だが、隅丸方形を呈するものと思われる。覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。炉跡は検出されなかった。壁周溝は、検出範囲では全周する。溝幅は0.1～0.3m、床面からの深さは0.1mを測る。ピットは12基を検出し、平面形状は楕円形・円形を呈する。規模は、P1は長軸66cm、短軸42cm、深さ21cm、P2は長軸60cm、短軸48cm、深さ36cm、P3は長軸33cm、短軸30cm、深さ3cm、P4は長軸



第22図 第5号竪穴建物跡出土遺物

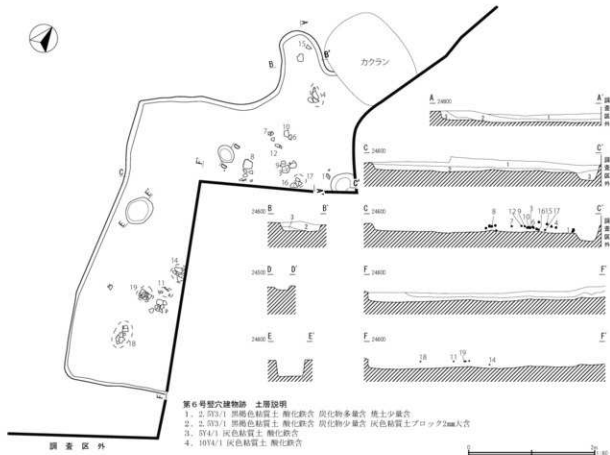
24 cm、短軸 24 cm、深さ 9 cm、P 5 は長軸 21 cm、短軸 18 cm、深さ 12 cm、P 6 は長軸 24 cm、短軸 21 cm、深さ 30 cm、P 7 は長軸 24 cm、短軸 18 cm、深さ 9 cm、P 8 は長軸 33 cm、短軸 24 cm、深さ 30 cm、P 9 は長軸 24 cm、短軸 24 cm、深さ 12 cm、P 10 は長軸 27 cm、短軸 24 cm、深さ 24 cm、P 11 は長軸 27 cm、短軸 18 cm、深さ 12 cm、P 12 は長軸 15 cm、短軸 12 cm、深さ 9 cm、P 13 は長軸 18 cm、短軸 18 cm、深さ 6 cm、P 14 は長軸 15 cm、短軸 12 cm、深さ 12 cm を測る。

遺物（第22図、第6表） 弥生土器甕、壺、剣型製品、磨石、打製石斧、台石等が出土した。

1・2、6～8は弥生土器甕。1は口縁～胴中部片である。口縁部が逆への字状に開く形状で、縄文

を地文としている。2は胴中～下部の破片で縦位のハケメ調整がみられる。6・7は口縁部片。6は内傾する折返し口縁のもの。7は外傾して開く形状で、口端に刻みが巡る。8は胴部片で重四角文が施される。3～5、9・10は蓋。3・4は頸部片である。文様は、振りの小さい波状文が巡るが、3は沈線に挟まれた円形刺突列が巡る。5は胴上部片で、縄文と沈線が施される。9・10は胴下部の破片である。11は石製品で剣型の柄へ刃部の破片である。流れ込みであり、縄文時代後・晩期のものか。12～15は石器。12・13は磨石。14は打製石斧。15は表面に窪みがみられ、半裁された裏面は平滑で座りが良い。

時期 弥生時代中期後半



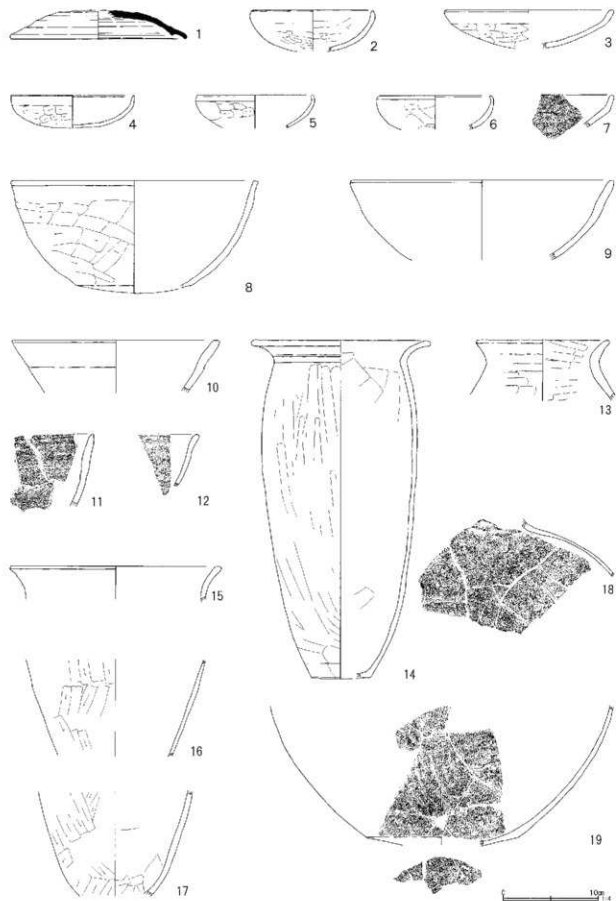
第23図 第6号竪穴建物跡

第6号竪穴建物跡（第23図）

位置 168・169・140・141・142 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸5.16 m、短軸3.66 m、確認面からの壁高は0.12 m。主軸方向N-30°-W

概要 平面形は方形を呈するが、掘り込みが浅く、全体的に崩れており遺存状態が悪い。中央から東南側が調査区外である。北西側にカマドを有するが、掘方のみ確認され、煙道部は幅0.75 m、奥行0.8 mを測る。袖部等の構築物はみられなかった。壁周溝は確認されなかった。ピットは3基検出し、平面形状はいずれも円形を呈する。規模は、P1は長軸42 cm、短軸42 cm、深さ24 cm、P2は長軸30 cm、短軸24 cm、深さ6 cm、P3は長軸48 cm、短軸37 cm、深さ24 cmを測る。立地をみると、南側は沼地の際とみられる落ち込みにあたり、本遺構は沼地が埋没した後につくられている。



第 24 图 第 6 号竖穴建物跡出土遺物

第7表 第6号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 蓋	(18.4)	3.9	-	AS	外面：灰色 内面：灰色	B	80%	表野原 集積
2	土師器 坏	(12.8)	(4.3)	-	ABIK	外面：黒褐色 内面：棕色	B	20%	北武蔵型坏
3	土師器 坏	(17.9)	(4.0)	-	ABEIJ	外面：棕色 内面：黒褐色	B	25%	北武蔵型坏
4	土師器 坏	(13.0)	(3.4)	-	ABEN	外面：棕色 内面：棕色	B	60%	北武蔵型坏
5	土師器 坏	(12.1)	(3.5)	-	ABE	外面：にぶい赤褐色 内面：明赤褐色	B	20%	北武蔵型坏
6	土師器 坏	(11.6)	(3.5)	-	ABETK	外面：にぶい棕色 内面：にぶい棕色	B	20%	北武蔵型坏
7	土師器 坏	-	-	-	-	外面：にぶい棕色 内面：黒褐色	C	口縁部片	摩耗顯著 北武蔵型坏
8	土師器 鉢	(25.2)	(11.9)	-	ABEIN	外面：棕色 内面：にぶい棕色	B	25%	体部外面傾位のナズ
9	土師器 鉢	(27.4)	(8.4)	-	ABEIN	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	C	口縁部 10%	摩耗顯著
10	土師器 鉢	(21.8)	(5.6)	-	ABEJKN	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	B	口縁部 15%	
11	土師器 鉢	-	-	-	ABK	外面：にぶい赤褐色 内面：灰褐色	B	口縁部片	
12	土師器 鉢	-	-	-	-	外面：明赤褐色 内面：にぶい赤褐色	B	口縁部片	
13	土師器 甕	(13.6)	(6.4)	-	ABIK	外面：黒褐色 内面：棕色	B	口縁部 20%	長胴甕
14	土師器 甕	(18.0)	(5.7)	-	ABEIN	外面：にぶい棕色 内面：棕色	B	70%	長胴甕
15	土師器 甕	(21.9)	(3.5)	-	ABEJ	外面：にぶい棕色 内面：にぶい棕色	B	口縁部 12%	長胴甕
16	土師器 甕	-	-	-	ABEAO	外面：褐色 内面：赤褐色	C	胴部 20%	摩耗顯著 長胴甕
17	土師器 甕	-	(11.1)	-	ABEIKN	外面：黒褐色 内面：灰褐色	B	胴部 25%	長胴甕
18	土師器 甕	-	-	-	ABEN	外面：にぶい黄棕色 内面：棕色	B	胴～胴部片	欠壊
19	土師器 甕	-	(14.9)	(16.2)	ABN	外面：灰褐色 内面：にぶい棕色	B	胴下部～底辺 20%	欠壊

遺物（第24図、第7表） 須恵器蓋、土師器坏、鉢、甕、丸甕等が出土した。

1は須恵器蓋で返りをもつ。2～7は土師器で北武蔵型坏。丸底から丸底風を呈する形状のもので、6は口端直下、そのほかは口縁部付近までヘラケズリ調整が及ぶ。口縁部は直立または内湾する。8～12は土師器鉢。13～19は甕である。13は器壁が厚く、頸部はすぼまり、最大径は胴部にある。甕としたが、蓋形状の可能性がある。14～17は長胴甕で、14・15は口縁部が「く」字状になる。16・17は胴下部の破片。18・19は球胴形状を呈する丸甕である。

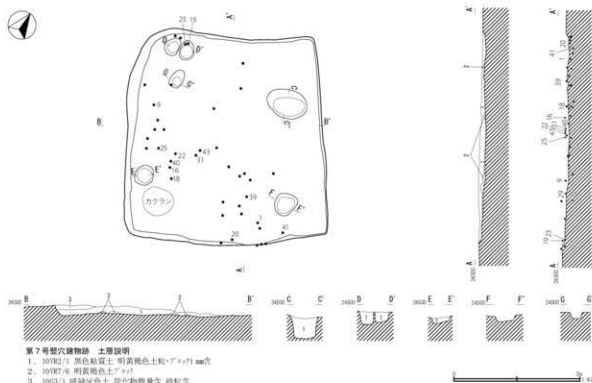
時期 8世紀前半

第7号竪穴建物跡（第25図）

位置 175・176-145・146 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸3.36m短軸3.24m、遺構確認面からの壁高は0.9m。主軸方向はN-33°-W。

概要 平面形は方形を呈し、遺物包含層上に所在する。覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。壁周溝は確認されなかった。ピットは6基検出した。規模は、P1は長軸66cm、短軸45cm、深さ36cm、P2は長軸30cm、短軸24cm、深さ16cm、P3は長軸30cm、短軸24cm、深さ18cm、P4は長軸30cm、短軸21cm、深さ18cm、P5は長軸30cm、短軸30cm、深さ6cm、P6は長軸36cm、短軸36cm、深さ18cmを測る。本遺構は、遺物包含層上に構築されている状況があり、出土遺物は後期の縄文土器で占められているが、弥生土器の混入もあることから、いずれの遺物も本遺構に伴うものか



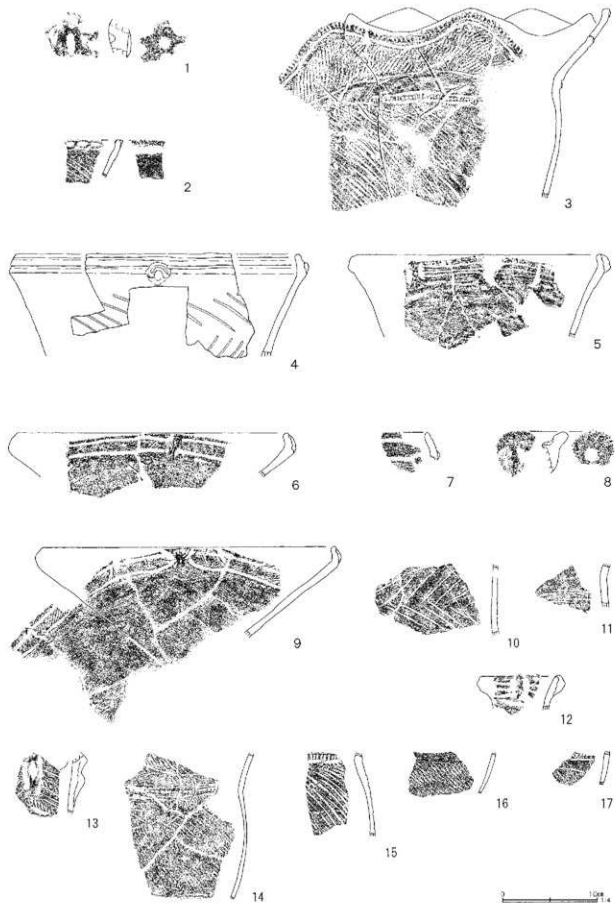
第25図 第7号竪穴建物跡

は遺憾ながら不明であり、弥生時代以降の掘削の可能性が高く、時期不明の遺構と判断した。

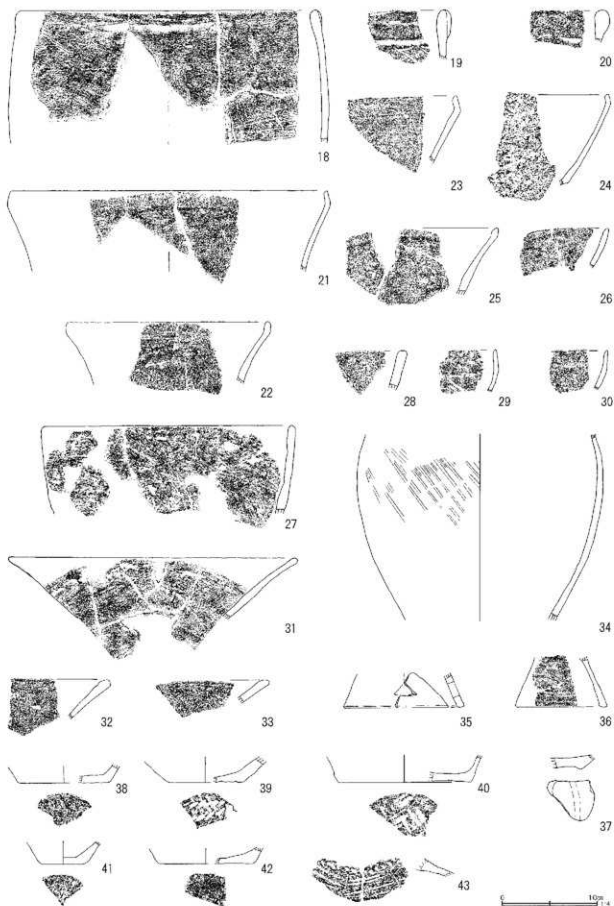
遺物（第26・27図、第8表） 縄文土器深鉢、浅鉢、注口土器、弥生土器壺等が出土した。

1～42は縄文土器である。1・2は加曾利B3式の深鉢で、1は波状口縁の波頂部飾りである。2は平縁の口縁部片で、外面は窪みを巡らし、以下に斜位の沈線を施す。内面は1条の窪みが巡る。3～12は曾谷・高井東式である。3は波状口縁深鉢の口縁～胴中部片であり、口縁に沿って刻目を巡らせ、沈線間に縄文を施す。胴上部の括れに刻目を巡らし、以下に斜位の沈線が施される。4・5は平縁口縁深鉢であり、口縁部は幅が狭く、内屈する。口縁部は横位の沈線と貼付文による文様構成。胴部は斜位の沈線を施すが、4は横位の羽状に施文される。6・7・9は浅鉢であり、口縁部は横位の沈線と貼付文により文様が構成される。8は口縁部の飾りである。10・11は深鉢の胴部片で、10は横位の羽状に、11は横位の沈線が施される。12は注口土器の口縁部であり、横位の沈線と縦長の貼付文により施文される。13～17は安行1式の深鉢である。13は波状口縁深鉢の口縁部片。14～17は深鉢の胴部片で、縄文と沈線により施文される。14・15は中位の括れには刻目帯が巡る。18～20は紐縄文土器であるが、後期後半に伴うものとみられる。19は紐線以下に斜位の沈線が施文される。20は口縁部が肥厚する。21～34は無文土器であり、後期後半に伴うものとみられる。21～30・34は深鉢である。21～24は口縁部が内屈、25・26は口縁部が外傾、27・28は口縁部が直立気味、29・30は口縁部がやや内湾する。34は胴部片で斜位のナデ調整が施される。31～33は浅鉢の口縁部片である。35・36は脚付底部の脚台部片で、35は三角形の透かし孔がみられる。37～42は底部片で、37は角底、39・40は網代痕がみられる。43は弥生土器壺の肩部片で、刺突列以下に直線文が巡る。

時期 時期不明



第 26 图 第 7 号竖穴建物跡出土遺物 1



第 27 图 第 7 号竖穴建物跡出土遺物 2

第8表 第7号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AHKN	外面：靑灰色 内面：L2.5i+緑色	B	口縁部片	深鉢口縁 加曾利B式 口縁加飾り
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	AHKN	外面：反黄褐色 内面：黒褐色	B	口縁部片	平縁口縁 加曾利B式
3	縄文土器 深鉢	(27.3)	(20.1)	-	JK	外面：黒褐色 内面：黒褐色	A	口縁～胴部25%	深鉢口縁 曾谷・高井東式
4	縄文土器 深鉢	(29.6)	(19.8)	-	AH7W	外面：L2.5i+緑色 内面：L2.5i+緑色		口縁部20%	平縁口縁 曾谷・高井東式
5	縄文土器 深鉢	(25.6)	(8.75)	-	AK	外面：暗赤褐色 内面：赤褐色	B	口縁部20%	平縁口縁 曾谷・高井東式
6	縄文土器 浅鉢	(28.4)	(4.7)	-	AH7K	外面：L2.5i+黄褐色 内面：黄灰色	C	口縁部20%	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顕著
7	縄文土器 浅鉢	-	-	-	AJK	外面：靑灰色 内面：靑灰色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顕著
8	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEMW	外面：反黄褐色 内面：黄灰色	C	口縁加飾り	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顕著
9	縄文土器 浅鉢	(21.0)	(9.6)	-	AHE1JN	外面：L2.5i+黄褐色 内面：L2.5i+黄褐色	C	口縁部30%	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顕著
10	縄文土器 深鉢	-	-	-	JK	外面：L2.5i+赤褐色 内面：L2.5i+緑色	B	胴部片	曾谷・高井東式
11	縄文土器 深鉢	-	-	-	AH5N	外面：L2.5i+黄褐色 内面：L2.5i+黄褐色	C	胴部片	曾谷・高井東式 摩耗顕著
12	縄文土器 注口土器	(7.6)	(3.5)	-	KN	外面：反黄褐色 内面：L2.5i+黄褐色	C	口縁部15%	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顕著
13	縄文土器 深鉢	-	-	-	AH1	外面：反黄褐色 内面：L2.5i+緑色	C	口縁部片	深鉢口縁 後期定式式 摩耗顕著
14	縄文土器 深鉢	-	-	-	AH6K	外面：明褐色 内面：褐色	C	胴部片	後期定式式 摩耗顕著
15	縄文土器 深鉢	-	-	-	AH1	外面：靑灰色 内面：反黄褐色	A	胴部片	後期定式式
16	縄文土器 深鉢	-	-	-	AH5N	外面：褐色 内面：L2.5i+黄褐色	B	胴部片	後期定式式
17	縄文土器 深鉢	-	-	-	AH261N	外面：褐色 内面：褐色	C	胴部片	後期定式式 摩耗顕著
18	縄文土器 深鉢	(31.4)	(14.1)	-	AH261N	外面：L2.5i+緑色 内面：L2.5i+黄褐色	B	口縁部30%	平縁口縁 結城土器
19	縄文土器 深鉢	-	-	-	AH5N	外面：靑灰色 内面：黄灰色	B	口縁部片	平縁口縁 結城土器
20	縄文土器 深鉢	-	-	-	AH5N	外面：褐色 内面：褐色	C	口縁部片	平縁口縁 結城土器 摩耗顕著
21	縄文土器 深鉢	(33.2)	(8.55)	-	AJK	外面：L2.5i+緑色 内面：褐色	C	口縁部20%	平縁口縁 無文土器 摩耗顕著
22	縄文土器 深鉢	(21.0)	(7.6)	-	AH7W	外面：明赤褐色 内面：反黄褐色	C	口縁部20%	平縁口縁 無文土器 摩耗顕著
23	縄文土器 深鉢	-	-	-	AH5N	外面：褐色 内面：褐色	B	口縁部片	平縁口縁 無文土器
24	縄文土器 鉢	-	-	-	AH5N	外面：暗灰黄色 内面：L2.5i+褐色	C	10%	平縁口縁 無文土器 摩耗顕著
25	縄文土器 深鉢	-	-	-	EJK	外面：明赤褐色 内面：赤褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩耗顕著
26	縄文土器 深鉢	-	-	-	DKN	外面：黒褐色 内面：黒褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩耗顕著
27	縄文土器 深鉢	(26.2)	(9.3)	-	JK	外面：黒褐色 内面：黒褐色	C	口縁～胴部20%	平縁口縁 無文土器 摩耗顕著
28	縄文土器 深鉢	-	-	-	AH5N	外面：L2.5i+黄褐色 内面：L2.5i+黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩耗顕著
29	縄文土器 深鉢	-	-	-	AK	外面：L2.5i+赤褐色 内面：褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩耗顕著
30	縄文土器 深鉢	-	-	-	AK	外面：明赤褐色 内面：反赤色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩耗顕著
31	縄文土器 浅鉢	(30.6)	(6.5)	-	AH261N	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	B	口縁部40%	平縁口縁 無文土器
32	縄文土器 鉢	-	-	-	AH	外面：黒褐色 内面：L2.5i+黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩耗顕著
33	縄文土器 鉢	-	-	-	AHE1N	外面：L2.5i+黄褐色 内面：反黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩耗顕著
34	縄文土器 深鉢	-	(18.8)	-	AH5N	外面：褐色 内面：褐色	C	胴部40%	無文土器 摩耗顕著
35	縄文土器 有付飯器	-	(3.6)	(12.3)	JK	外面：褐色 内面：褐色	B	底部30%	胴部に三角の透かし孔
36	縄文土器 御台器	(9.8)	(5.3)	-	JK	外面：黒褐色 内面：褐色	C	口縁部15%	摩耗顕著
37	縄文土器 底部片	-	(1.5)	-	AH5N	外面：褐色 内面：黄灰色	C	底部片	摩耗顕著 角底
38	縄文土器 底部片	-	(1.8)	(9.6)	AH6K	外面：L2.5i+緑色 内面：反黄褐色	C	底部25%	摩耗顕著

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
39	縄文土器 底部分	-	(2.7)	(0.0)	ABBTK	外面：灰黄褐色 内面：粉灰色	B	底器 20%	銅代焼あり
40	縄文土器 底部分	-	(2.9)	(14.0)	ABIN	外面：にじみ赤褐色 内面：粉灰色	C	底器 20%	摩耗顕著 銅代焼あり
41	縄文土器 底部分	-	-	-	ABKN	外面：灰黄色 内面：灰黄色	C	底器 30%	摩耗顕著
42	縄文土器 底部分	-	(16.5)	(10.0)	ABKSN	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	C	底器 20%	摩耗顕著
43	弥生土器 底	-	-	-	ABCY	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	C	底部分	摩耗顕著

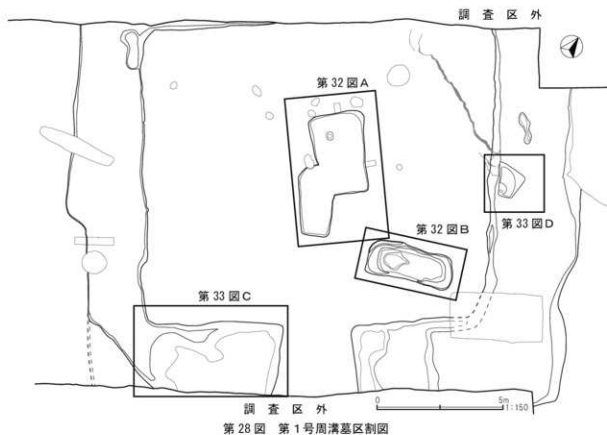
2 周溝墓

第1号周溝墓(第28～33図)

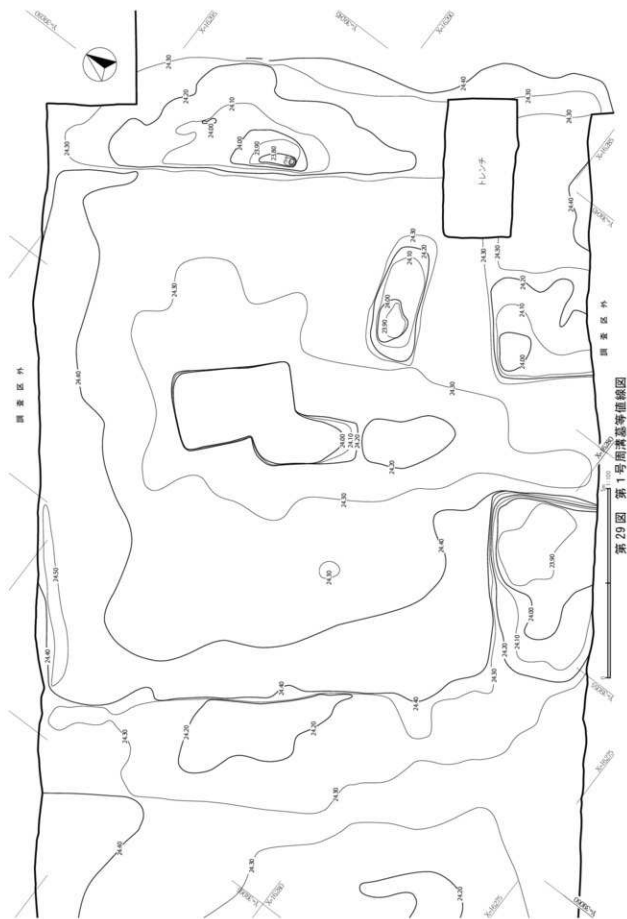
位置 171～176-141～145 グリッドに位置する。

規模 全体の規模について、長軸は検出範囲で15.19 m、短軸は20.48 mを測る。主軸方向は、N - 37.5° - Wを示す。後方は縦幅12 m、横幅13.67 mを測る。前方部の幅は検出範囲で3.49 m、括れ部分の幅は2.78 m、後方部までの距離は2.77 mを測る。東溝は幅3.69 m、確認面からの深さは概ね0.45 mを測る。西溝は幅3.07 m、確認面からの深さは概ね0.24 mを測る。東・西溝ともに前方部付近が深くなり、前方部付近の確認面からの深さは東溝0.71 m、西溝0.81 mを測る。

概要 第1号周溝墓は前方後方形を呈する形状であるが、ここでは周溝墓として取り扱うこととした。検出範囲は、前方部の一部、後方部、周溝のうち東・西側ほぼ全体と北側の一部であり、前方部の先である南側は調査区外である。前方部は後方部のほぼ中心に位置し、台形状を呈するが、前方部の前方は調査区外となるため、全体は明らかではない。後方部は横幅が僅かに長い、正方形に近い形状である。



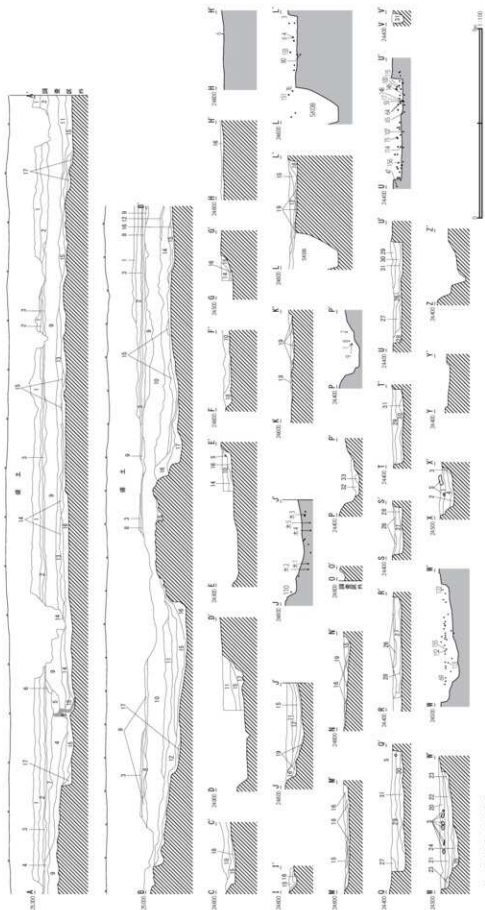
第28図 第1号周溝墓区劃図



第29図 第1号用溝基等値線図



第30図 第1号黒川氾濫基平面図



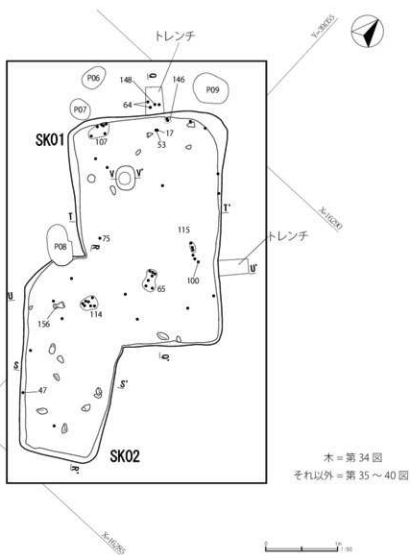
第1号隧基断面图

1. 104/1 灰色土 粘土層 白色砂石多量含
 2. 104/1 灰色粘質土
 3. 103/1 黄褐色粘質土 粘土層多量含 砂石土
 4. 103/1 黄褐色粘質土 粘土層多量含 1~2mm砂少量含
 5. 103K/1 黄褐色粘質土 粘土層含
 6. 103/2 黄褐色粘質土 粘土層多量含
 7. 103/2 黄褐色粘質土 粘土層多量含
 8. 103/1 砂 灰色粘質土 粘土層含
 9. 103/1 砂 灰色粘質土 粘土層含
 10. 103/1 黄褐色粘質土 粘土層含
 11. 103/1 黄褐色粘質土 粘土層含
 12. 104/1 灰色粘質土 粘土層含
 13. 103/1 灰色粘質土 粘土層多量含 灰色砂 砂石多量含
 14. 103/1 灰色粘質土 粘土層多量含 灰色砂 砂石多量含
 15. 103/1 灰色粘質土 粘土層多量含 灰色砂 砂石多量含
 16. 103/2 灰色粘質土 粘土層含 灰色土砂層含
 17. 103/2 灰色粘質土 粘土層含 灰色土砂層
 18. 103/1 灰色粘質土 粘土層多量含 灰色砂 砂石多量含
 19. 103/1 灰色粘質土 粘土層多量含 灰色砂 砂石多量含
 20. 103K/2 黄褐色粘質土 粘土層含
 21. 104/1 灰色粘質土 粘土層多量含 灰色砂 砂石多量含
 22. 103K/1 砂 灰色粘質土 粘土層含

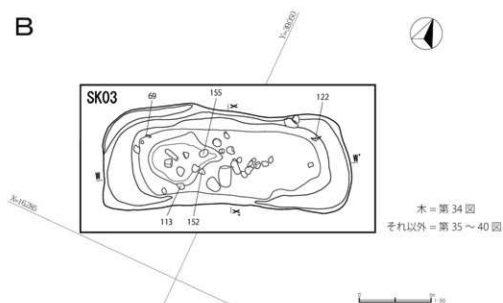
23. 103K/1 砂 灰色粘質土 粘土層含 砂石多量含
 24. 103/1 黄褐色粘質土 粘土層多量含 砂石土
 25. 103/2 黄褐色粘質土 粘土層多量含 砂石土
 26. 103K/2 黄褐色粘質土 粘土層多量含 砂石土
 27. 103/1 灰色粘質土 粘土層多量含 砂石土
 28. 103/1 砂 灰色粘質土 粘土層含
 29. 103/1 砂 灰色粘質土 粘土層含
 30. 103/1 灰色粘質土 粘土層多量含 砂石土
 31. 103/2 黄褐色粘質土 粘土層多量含 砂石土
 32. 103/1 黄褐色粘質土 粘土層多量含 砂石土
 33. 103/1 黄褐色粘質土 粘土層多量含 砂石土

第31号隧基断面图

A

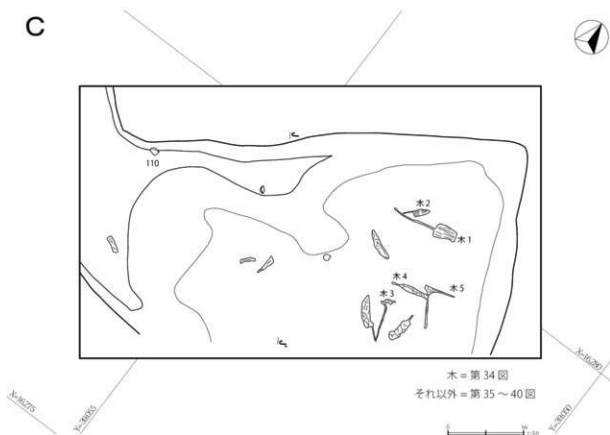


B

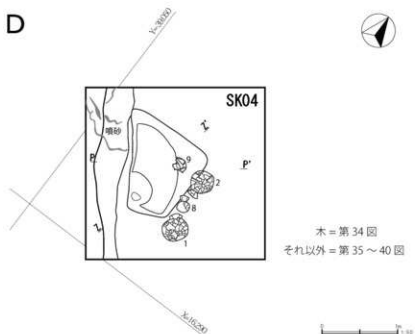


第32図 第1号周溝墓詳細図A・B

C



D



第 33 図 第 1 号周溝墓詳細図 C・D



第 34 图 第 1 号周墓出土木製品

第9表 第1号周溝墓出土木製品観察表

No.	種類	最大長	最大幅	厚さ	残存率	備考
1	鋤	(90.2)	(13.3)	-	80%	風化顯著 一本造の二股鋤
2	鋤	(33.9)	(7.5)	-	鋤先部	風化顯著 二股鋤小サ
3	鋤?	(48.7)	(16.2)	-	20%	風化顯著 鋤基部、柄の一部が遺存
4	鍬?	(52.8)	(5.1)	-	鍬先部	風化顯著
5	鍬	(54.1)	(38.9)	-	60%	風化顯著 一本造 鍬先部(39.2cm) 鍬底(49.6cm)

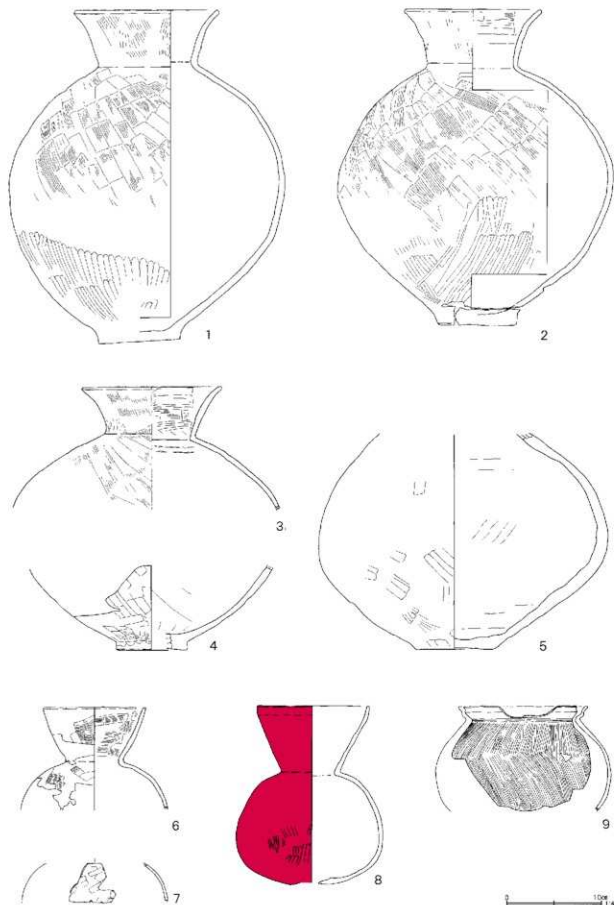
中央部に土坑2基、南東部に土坑1基がみられる。SK1とSK2とはともに長方形形状を呈するが、重複関係にありSK1が古く、SK2が新しい。それぞれの規模は、SK1は長軸3.21m、短軸2.22m、確認面からの深さは0.3mを測り、主軸方向はN-46°-Wを示す。SK2は長軸2.82m、短軸1.39m、確認面からの深さは0.27mを測り、主軸方向はN-36°-Wを示す。SK1・2ともに覆土は、部分的にグライ化が進行しており見極めが困難であった。また、獣骨とみられる骨の小破片が全体的に含まれていた。このほか出土遺物は流れ込みと考えられる縄文土器や弥生土器が大半であった。周溝墓に伴う施設か疑義が生じる状況ではあるが、位置関係と、盗掘されている可能性も否定できないため、本項目で記載することとした。SK3は長軸3.45m、短軸1.42m、確認面からの深さは0.35mを測るが、やや西寄りに深さ0.15m程の埋め戻された窪みがある。主軸方向はN-66°-Eを示す。長方形形状を呈し、床面は平坦に作られている。出土遺物は流れ込みの縄文土器のほかは、拳大の礫が多数含まれていた。

周溝は北側及び南側が部分的な検出であるため、後方部の圍繞は確實とみられるが、前方部の前方は不明である。検出状況から推量するならば、前方には周溝が巡らない可能性が考えられる。周溝東側では、後方部寄りに溝内土坑が1基確認されている。SK4は台形状を呈し、長軸1.19m、短軸1.18m、確認面からの深さは0.48mの平坦面とビット状の掘り込みが0.72mを測る。主軸方向はN-2°-Wを示す。出土遺物について、転落した第35図9を除き、掘方に沿う配置で検出された。土師器壺2点、埴1点、S字甕1点で構成され、壺は焼成後穿孔、埴は赤彩され、焼成後穿孔が施されており、溝内土坑に係る祭祀行為の痕跡とみられる。

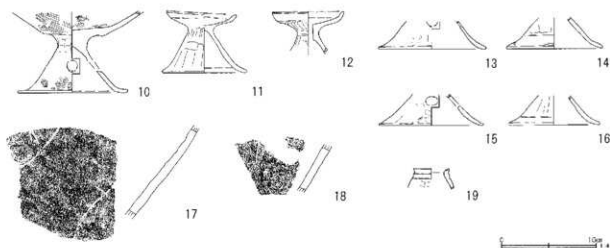
周溝西側の南西部は、確認面からの検出状況では斜行する掘方であったが、調査区壁面の観察から、ほぼ直線状の掘方と確認できたため、推定線を点線で図示した。周溝は前方部脇が東西側ともに深くなっている。また、前方部西側の周溝からは木製品が集中して出土しており、いずれも土掘り用具と考えられる。木製品は流木も含めて同周溝内では他にみられなかったため、意図的な廃棄であったと判断される。残念ながら、風化による劣化が著しいため、遺存状況は不良である。

遺物(第34～40図、第9・10表) 土師器壺、甕、器台、木製鋤、鉞、縄文土器深鉢、鉢、浅鉢、注口土器、ミニチュア土器、弥生土器壺、甕、石製紡錘車、石錐、石鏃、石棒、磨石、砥石、打製石斧、石錐等が出土した。

第34図は周溝東南部より出土した木製品を掲載した。木製品はいずれも風化が著しく進行していた。断面形は極めて薄くなっており、辛うじて外形が維持された状態であった。そこで、取り上げ可能な個体のみ周辺の土ごと取り上げ、保存処理を施すこととした。そのため、実測図の内容も限定的である。1は一本造の二股鋤である。柄の先端はT字状を呈している。2は鋤の先端部の破片である。二股鋤の



第 35 图 第 1 号周溝墓出土物 1

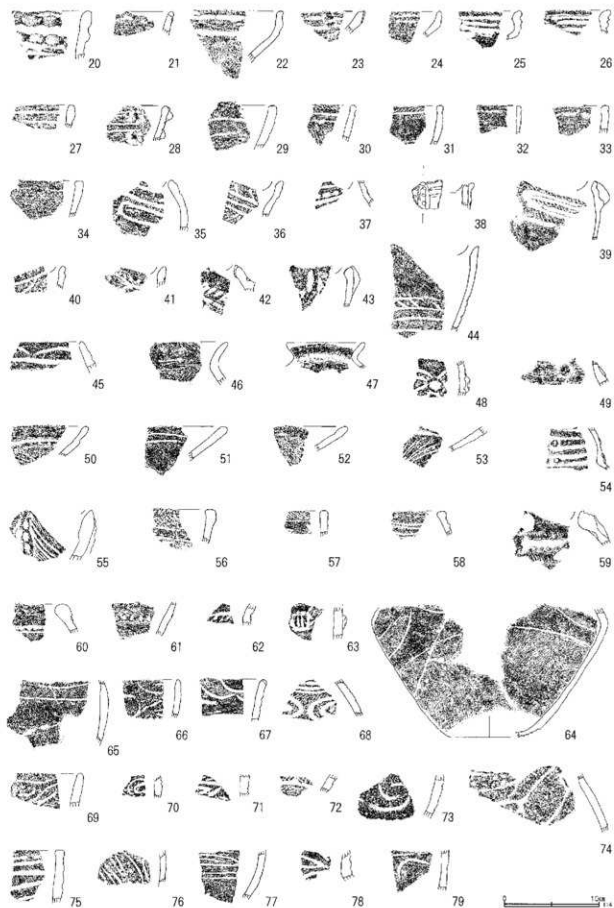


第36図 第1号周溝墓出土遺物2

可能性があるが、劣化のため断定はできない。3は鋤とみられ、鋤先の基部と柄部の破片と思われる。4は鋤先の破片とみられる。5は鋤である。鋤先と柄の連結箇所には、節がみられることから、樹木の枝分かれ箇所を使用した一木造とみられる。

第35・36図は土師器類を掲載した。1～5、17・18は壺であり、大形の個体である。1・2はほぼ完形を呈し、最大径は胴部の中位に求められる。口縁部は外反して開く単口縁である。内面は横位、外面は縦・斜位にハケメ調整される。胴部は球形を呈するが、2はやや扁平気味である。胴部上半は斜位のハケメ調整、下半は縦・斜位のミガキが施される。底部は焼成後の打ち欠きがみられ、2は打ち欠かれた破片が周辺で検出された。3は口縁～胴部上半までの個体。口縁部は外反して開く単口縁である。内面は横位、外面は縦・斜位にハケメ調整され、胴部の外面は斜位のハケメ調整が施される。4は胴部下半～底部までの個体。外面は斜位のハケメ調整が僅かにみられる。底部は焼成後の打ち欠きがみられる。5は胴～底部までの個体であるが、損耗が顕著である。外傾はやや扁平球形を呈し、最大径は中位に求められる。17・18は胴部下半の破片である。6～8は増または小型丸底壺である。6は口縁～胴部上半までの個体。口縁部は僅かに外反して開く形状を呈し、内面は横位、外面は縦位にハケメ調整される。胴部外面は斜・横位にハケメ調整される。7は胴上半部の破片であり、斜位のハケメ調整がみられる。8は完形の個体であり、赤彩が施され、焼成後穿孔が底部にみられる。口縁部は外傾して立ち上がり、ゆるく内湾して直立する。胴部は下膨れした球形を呈し、最大径は胴部下半に求められる。9は甕であり、口縁～胴部中位までの破片である。いわゆるS字甕の形状を呈する。薄く精緻な造りで、細密な斜沈線が横位の羽状に施される。10～16、19は器台である。10は高杯の可能性もある。脚部に円形の穿孔が3つ施されている。外面はハケメにより調整される。11は全形が分かる個体。12は上部と脚部を貫く穿孔が内面に施される。13・15は脚台部に穿孔が施される。14・16は脚台部の破片。19は接合部の破片と考えた。

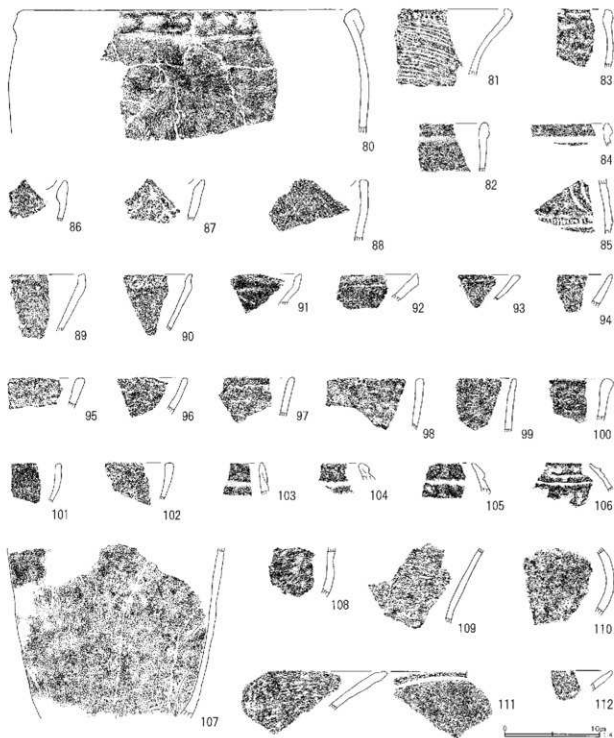
第37～40図で示した20～147、149～157は流れ込みの破片であり、本遺構に伴わない。148は判断がつかない。20・21は平縁口縁深鉢の口縁部片で、加曾利B3式の破片。20は太目の圧痕が施される隆帯が2条みられる。21は口端に圧痕が巡る。22～54は曾谷・高井東式。22～34は平縁口縁深鉢



第37图 第1号周溝墓出土遺物3

の口縁部片。22～29は横位の沈線を主体とする文様が施される。22～26は口縁部が直立する形状なので、23は縦長の貼付文が施される。27～29は口縁部が外傾する形状で、28は瘤状の貼付文が上下に配置される。30・31は口唇に縄文を施し、沈線を巡らす。32・33は口縁部に1条の沈線が巡る。34は沈線以下に斜位の沈線が施される。35～44は波状口縁深鉢の口縁部片であり、口縁に沿って沈線を主体とする文様帯を施す。35は波底部付近の破片で、沈線による楕円区画がみられる。36は口縁部に斜位の短沈線が施される。37は沈線間に刺突が施される。38は波底部の破片で縦長で刺突が施される貼付文が貼付される。39は波底部付近の破片で、刻目が施される隆帯により楕円区画が施文される。40は口縁に沿う沈線と弧状沈線が施される。41は刺突、42は刻目が施文される。43は波底部の破片で、縦長の貼付文が施される。44は波底部から水平に巡る4状の沈線と上段の沈線間に斜位の短沈線が施される。45～49はソロバン玉形を呈する鉢とみられる。45は内傾する口縁部で沈線と弧線による施文。46・47は外反して開く無文の口縁部であるが、47は口径が小さく注口土器の可能性もある。48・49は円形の貼付文がみられる胴部片である。48は窪みのある貼付文を起点に文様がX字状に展開する。50～53は鉢・浅鉢の器形を呈するもの。50～52は口縁部片で、50・51は沈線が巡り、52は無文である。53は胴部片で斜位の沈線が施される。54は注口土器の頸部片である。口縁部に向かって窄まり、胴は屈曲して広がる形状を呈している。頸部は4条の沈線が巡り、上下に窪みのある円形貼付文が配置される。55～65は安行式1・2式の範疇に入るものと思われる。55は波状口縁深鉢の口縁部片で、波頂部の破片である。波頂部以下に、縦長で窪みが施される貼付文が付される。56～60は平縁口縁深鉢の口縁部片である。56・57は口縁部は帯縄文が施され、直立気味の形状である。58～60は口縁部が内湾する形状で、文様は刻目や刺突を巡らす。61～65は胴部片である。61は刻目帯が巡る。62は括れ箇所の破片。63は豚鼻状突起が付される破片。64は胴部中位から底部までの個体。弧線・横線による区画内に縄文が施文される。注口土器と考えた。66～79は晩期安行式と思われる。66～73は弧線や三叉文、入組文を主体とする文様とみられる。66・67・69は口縁部片で、67は口端に突起がつく。68・70～73は胴部片である。75～79は沈線を主体とする文様が施される。75は口縁部片で、横位に連続する入組文か。76は斜位の沈線。71・72は横位に連続する入組文か。79は逆U字状の弧線が施される。80～85は紐線文土器である。80は口縁部が内湾し、太い丘痕が口縁部を巡る。加曾利B3式に伴うものか。81は口縁部が外反して開き口唇部が直立する形状。口縁部は刻目が巡り、以下に斜位の沈線が施される。82・83は無文であり、82は口縁部が直立して立ち上がる形状で、83はゆるやかに内湾して口縁部が直立する形状である。84は内傾する口縁部片。85は胴上半部片で2重の弧線以下に沈線と刻目が施される。安行2式に伴うものか。86～112は粗製の無文土器である。86～88は波状口縁深鉢の口縁部片である。89～102は平縁口縁深鉢の口縁部片である。89～91は外傾して開き、屈曲して直立する口縁部である。92～97は外傾して口縁部が開く形状のもの。98～100は口縁部が直立する形状のもの。101・102は内湾して口縁部が直立する形状のもの。103～106は口縁部が内傾し、外面に折返口縁となるものである。107～110は胴部片である。111・112は浅鉢・鉢の口縁部片である。111は内面に1条の窪みが巡る。

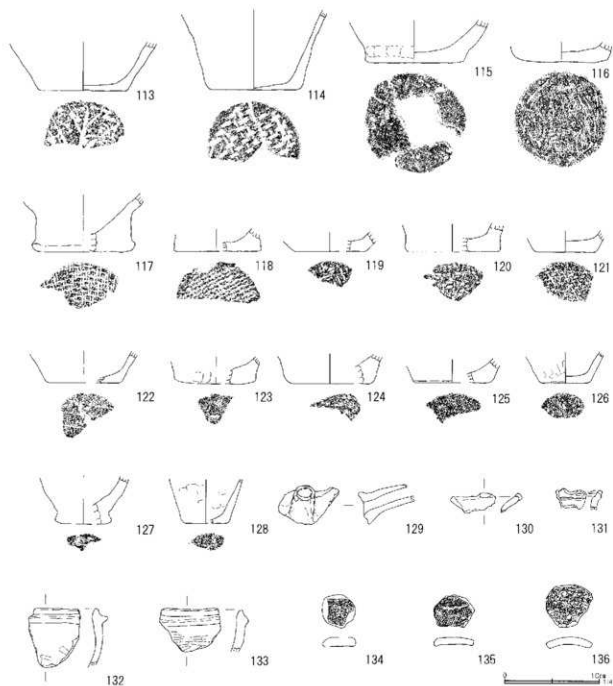
113～128は底部片である。113・122は木葉痕がみられる。114・117～121は網代痕がみられる。117・127は底部が厚く足高な形状である。129は注口土器の注口部片である。130は口縁部片で、口端



第38図 第1号周溝墓出土物4

に突起がつく形状を呈する。口径が小さいとみられるため、注口土器と考えた。131は波状口縁深鉢を模したミニチュア土器と考えた。132・133は無文の口縁部片で、口縁部に鈎が巡る。外面は横位のミガキガ精緻に施される。134～136は土製円盤であり、縄文土器深鉢の胴部片を転用したものである。134・136は無文であるが、135は沈線下に縄文が充填されており、後期安行式のものか。

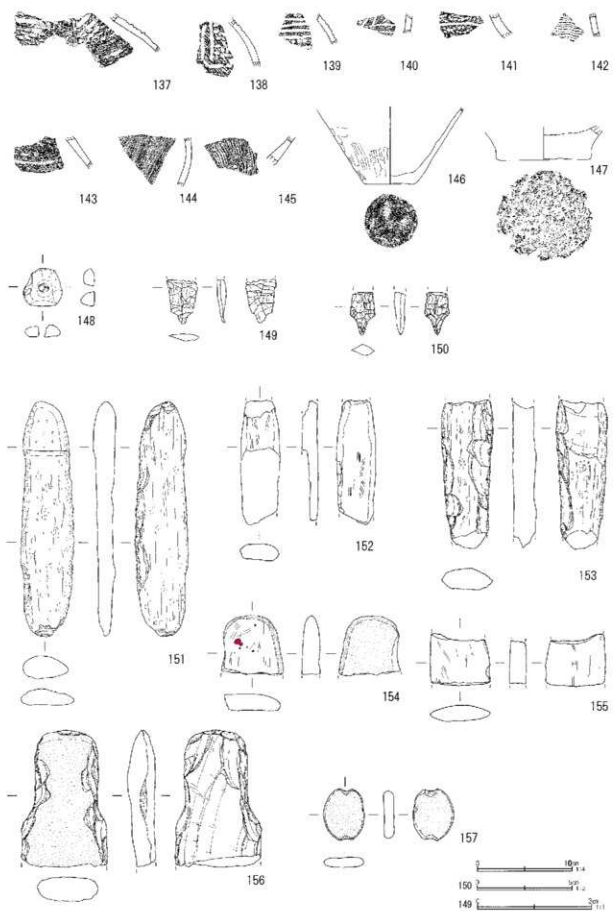
137～147は弥生土器である。137～143は壺で、頸～肩部にかけての破片。137は沈線以下に刺突



第 39 図 第 1 号周溝墓出土物 5

列が巡る。138 は縄文を地文として沈線と刺突が施される。139 は直線文以下に刺突が巡る。140 は鋸歯文または重三角文とみられる。141 は刺突と沈線が施される。142 は振りの小さい波状文。143 は沈線が巡る。144・145 は甕で胴部中～下位にかけての破片。櫛歯状工具による沈線が施される。146 は胴部下半～底部までの個体で壺と考えた。斜・横位のハケ調整後に縦位のミガキが施される。147 は底部片である。

148 は中央に穿孔が施される凝灰岩製の製品であり、紡錘車と考えた。風化が著しい。149 はチャート製の石錐。150 はチャート製の石織で基部の破片である。151・153 は石棒。151 は縦に破損してい



第40图 第1号周溝墓出土物6

第10表 第1号周溝墓出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 甕	14.95	35.3	8.7	S	外面：棕色 内面：棕色	C	90%	摩耗顯著 単口縁 焼成後穿孔
2	土師器 甕	14.6	33.5	8.4	S	外面：棕色 内面：棕色	C	90%	摩耗顯著 単口縁 焼成後穿孔
3	土師器 甕	14.8	(12.9)	-	CHN	外面：棕色 内面：L・S赤褐色	B	口～胴 30%	単口縁
4	土師器 甕	-	(8.8)	(7.0)	SHJN	外面：棕色 内面：灰褐色	B	底辺 25%	単口縁 焼成後穿孔
5	土師器 甕	-	(22.9)	8.3	SHSN	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	C	60%	摩耗顯著 単口縁
6	土師器 埴	(10.7)	(6.8)	-	SH	外面：L・S赤・黄褐色 内面：L・S赤・黄褐色	B	30%	
7	土師器 埴	-	(4.2)	-	SHI	外面：L・S赤・黄褐色 内面：L・S赤・黄褐色	C	胴部 10%	摩耗顯著
8	土師器 埴	11.8	16.7	-	SHCN	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	C	ほぼ完形	摩耗顯著 外面赤筋あり 焼成後穿孔
9	土師器 甕	(13.0)	(11.0)	-	SHCHJN	外面：灰褐色 内面：灰褐色	B	口～胴部片	S字状口縁
10	土師器 器台	-	10.5	11.6	SH	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	C	60%	摩耗顯著 胴部に3單位の内形穿孔
11	土師器 器台	7.4	6.3	(6.0)	SHSN	外面：L・S赤・黄褐色 内面：L・S赤・黄褐色	B	25%	
12	土師器 器台	7.6	(4.3)	-	SH	外面：灰黄褐色 内面：L・S赤褐色	B	口～接合部 90%	胴部から單位の焼成前穿孔
13	土師器 器台	-	(2.9)	(11.4)	SHCH	外面：L・S赤褐色 内面：L・S赤褐色	B	胴部 10%	胴部に焼成前穿孔
14	土師器 器台	-	(2.8)	(10.2)	SH	外面：L・S赤褐色 内面：L・S赤褐色	B	胴部 50%	
15	土師器 器台	-	(3.3)	(11.0)	SHKK	外面：明褐色 内面：棕色	B	胴部 20%	胴部に焼成前穿孔
16	土師器 器台	-	(3.1)	(9.0)	SHSN	外面：L・S赤褐色 内面：L・S赤褐色	B	胴部 20%	
17	土師器 甕	-	-	-	SHJN	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	B	胴部片	
18	土師器 甕	-	-	-	SH	外面：灰黄褐色 内面：棕色	B	胴部片	
19	土師器 器台	-	(2.3)	-	SHK	外面：棕色 内面：棕色	B	胴部 15%	
20	縄文土器 深鉢	-	-	-	SHK	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 加曾利 B3 式
21	縄文土器 深鉢	-	-	-	SH	外面：L・S赤褐色 内面：L・S赤褐色	B	口縁部片	平縁口縁 加曾利 B3 式
22	縄文土器 深鉢	-	-	-	SHSN	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
23	縄文土器 深鉢	-	-	-	SH	外面：L・S赤褐色 内面：L・S赤褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
24	縄文土器 深鉢	-	-	-	SH	外面：灰褐色 内面：藍色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
25	縄文土器 深鉢	-	-	-	SHSN	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
26	縄文土器 深鉢	-	-	-	SHCN	外面：L・S赤・黄褐色 内面：L・S赤褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
27	縄文土器 深鉢	-	-	-	SH	外面：L・S赤・黄褐色 内面：灰黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
28	縄文土器 深鉢	-	-	-	S	外面：L・S赤・黄褐色 内面：灰褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
29	縄文土器 深鉢	-	-	-	SH	外面：灰黄褐色 内面：灰褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
30	縄文土器 深鉢	-	-	-	SH	外面：藍色 内面：灰褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
31	縄文土器 深鉢	-	-	-	SHJO	外面：灰黄褐色 内面：L・S赤・黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
32	縄文土器 深鉢	-	-	-	SHSN	外面：L・S赤・黄褐色 内面：L・S赤・黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
33	縄文土器 深鉢	-	-	-	SH	外面：灰褐色 内面：灰褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
34	縄文土器 深鉢	-	-	-	SHJ	外面：黄褐色 内面：灰黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
35	縄文土器 深鉢	-	-	-	SHCN	外面：明赤褐色 内面：L・S赤褐色	C	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
36	縄文土器 深鉢	-	-	-	SHI	外面：明黄褐色 内面：L・S赤・黄褐色	C	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
37	縄文土器 深鉢	-	-	-	SH	外面：L・S赤・黄褐色 内面：明黄褐色	B	胴部片	波状口縁 曾谷・高井東式
38	縄文土器 深鉢	-	-	-	SH	外面：L・S赤・黄褐色 内面：明黄褐色	C	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色调	烧成	残存率	備考
29	縄文土器 浅鉢	-	-	-	■	外面：黒褐色 内面：L2.5c・黄褐色	A	口縁部片	狭状口縁 管谷、高弁束式
30	縄文土器 浅鉢	-	-	-	ATK	外面：褐色 内面：灰黄褐色	C	口縁部片	狭状口縁 管谷、高弁束式 摩耗顯著
31	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSN	外面：棕色 内面：棕色	C	口縁部片	狭状口縁 管谷、高弁束式 摩耗顯著
32	縄文土器 浅鉢	-	-	-	AI	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	B	口縁部片	狭状口縁 管谷、高弁束式
33	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSN	外面：黒褐色 内面：黒褐色	B	口縁部片	狭状口縁 管谷、高弁束式
34	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSN	外面：褐色 内面：褐色	B	口縁部片	狭状口縁 管谷、高弁束式
35	縄文土器 鉢	-	-	-	MSJ	外面：黒褐色 内面：褐色	B	口縁部片	平縁口縁 管谷、高弁束式
36	縄文土器 鉢	-	-	-	AJKN	外面：灰黄褐色 内面：黒褐色	A	口縁部片	平縁口縁 管谷、高弁束式
37	縄文土器 鉢	(7, 4)	(2, 7)	-	AIX	外面：寸半～一寸黑色 内面：寸半～一寸黑色	B	口縁部 30%	平縁口縁 管谷、高弁束式
38	縄文土器 鉢	-	-	-	MSN	外面：褐色 内面：褐色	A	胴部片	管谷、高弁束式
39	縄文土器 鉢	-	-	-	MSJCN	外面：L2.5c・黄褐色 内面：黒褐色	C	胴部片	管谷、高弁束式 摩耗顯著
40	縄文土器 鉢	-	-	-	MSK	外面：灰黄褐色 内面：褐色	C	口縁部片	平縁口縁 管谷、高弁束式 摩耗顯著
41	縄文土器 鉢	-	-	-	ATK	外面：褐色 内面：褐色	B	口縁部片	平縁口縁 管谷、高弁束式
42	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSN	外面：L2.5c・黄褐色 内面：L2.5c・黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 管谷、高弁束式
43	縄文土器 鉢	-	-	-	MSN	外面：L2.5c・赤褐色 内面：L2.5c・棕色	B	口縁部片	管谷、高弁束式
44	縄文土器 注口土器	-	-	-	MSN	外面：棕色 内面：棕色	C	胴部片	管谷、高弁束式 摩耗顯著
45	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSI	外面：明黄褐色 内面：黄褐色	B	口縁部片	狭状口縁 後期安行式
46	縄文土器 浅鉢	-	-	-	AK	外面：黒褐色 内面：灰褐色	C	口縁部片	平縁口縁 後期安行式 摩耗顯著
47	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSJCN	外面：L2.5c・褐色 内面：L2.5c・棕色	B	口縁部片	平縁口縁 後期安行式
48	縄文土器 浅鉢	-	-	-	AI	外面：棕色 内面：L2.5c・褐色	A	口縁部片	平縁口縁 後期安行式
49	縄文土器 注口土器	-	-	-	AIW	外面：棕色 内面：棕色	C	口縁部片	狭状口縁 後期安行式 摩耗顯著
50	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSJK	外面：棕色 内面：棕色	B	口縁部片	平縁口縁 後期安行式
51	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSN	外面：L2.5c・黄褐色 内面：L2.5c・黄褐色	B	胴部片	後期安行式
52	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSJCN	外面：明褐色 内面：L2.5c・棕色	A	胴部片	後期安行式
53	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSN	外面：L2.5c・黄褐色 内面：L2.5c・棕色	A	胴部片	後期安行式 煎鼻状胎付あり
54	縄文土器 浅鉢	-	(13, 6)	(9, 4)	MSKN	外面：明赤褐色 内面：L2.5c・褐色	B	胴部 50%	後期安行式
55	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSI	外面：明黄褐色 内面：褐色	C	胴部片	後期安行式 摩耗顯著
56	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSI	外面：L2.5c・黄褐色 内面：L2.5c・黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 後期安行式 摩耗顯著
57	縄文土器 浅鉢	-	-	-	AI	外面：灰黄褐色 内面：黒褐色	A	胴部片	平縁口縁 後期安行式
58	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSJCN	外面：暗灰黄色 内面：浅黄色	B	胴部片	後期安行式
59	縄文土器 浅鉢	-	-	-	IS	外面：L2.5c・黄褐色 内面：L2.5c・黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 後期安行式
60	縄文土器 浅鉢	-	-	-	KN	外面：L2.5c・黄褐色 内面：棕色	B	胴部片	後期安行式
61	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSJN	外面：棕色 内面：棕色	B	口縁部片	後期安行式
62	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSN	外面：褐色 内面：明褐色	B	胴部片	後期安行式
63	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSKN	外面：棕色 内面：棕色	C	胴部片	後期安行式 摩耗顯著
64	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MSN	外面：灰黄色 内面：灰黄色	C	胴部片	後期安行式 摩耗顯著

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色调	烧成	残存率	備考
75	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	外面：明赤褐色 内面：L2.5a+赤褐色	C	口縁部片	平縁口縁 弥生堂行式 摩耗顯著
76	縄文土器 深鉢	-	-	-	IK	外面：灰白色 内面：灰白色	C	胴部片	弥生堂行式 摩耗顯著
77	縄文土器 深鉢	-	-	-	AIAN	外面：黒褐色 内面：黒褐色	B	胴部片	弥生堂行式
78	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIKN	外面：灰褐色 内面：焼反紫色	A	胴部片	弥生堂行式
79	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGIN	外面：灰褐色 内面：L2.5a+緑色	C	胴部片	弥生堂行式 摩耗顯著
80	縄文土器 深鉢	(3.5, 6)	(13, 1)	-	ABEIN	外面：灰黄褐色 内面：L2.5a+黄緑色	C	口縁部2/3	平縁口縁 結縁土器 摩耗顯著
81	縄文土器 深鉢	-	-	-	AI	外面：灰黄褐色 内面：灰褐色	B	口縁部片	平縁口縁 結縁土器
82	縄文土器 深鉢	-	-	-	AIAN	外面：明赤褐色 内面：L2.5a+赤褐色	C	口縁部片	平縁口縁 結縁土器 摩耗顯著
83	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEJN	外面：棕色 内面：L2.5a+黄緑色	C	口縁部片	平縁口縁 結縁土器 摩耗顯著
84	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEI	外面：棕色 内面：棕色	B	口縁部片	平縁口縁 結縁土器
85	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	外面：棕色 内面：L2.5a+黄緑色	C	胴部片	結縁土器 摩耗顯著
86	縄文土器 深鉢	-	-	-	IK	外面：黒褐色 内面：黒褐色	C	口縁部片	波状口縁 縄文土器 摩耗顯著
87	縄文土器 深鉢	-	-	-	AI	外面：L2.5a+黄褐色 内面：L2.5a+黄緑色	C	口縁部片	波状口縁 縄文土器 摩耗顯著
88	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	外面：灰黄褐色 内面：L2.5a+黄緑色	C	口縁部片	波状口縁 縄文土器 摩耗顯著
89	縄文土器 深鉢	-	-	-	AIN	外面：棕色 内面：L2.5a+緑色	B	口縁部片	平縁口縁 縄文土器
90	縄文土器 深鉢	-	-	-	AI	外面：L2.5a+黄褐色 内面：棕色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著
91	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	外面：灰褐色 内面：褐色	B	口縁部片	平縁口縁 縄文土器
92	縄文土器 深鉢	-	-	-	AIK	外面：L2.5a+褐色 内面：棕色	B	口縁部片	平縁口縁 縄文土器
93	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIM	外面：黒褐色 内面：明赤褐色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著
94	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	外面：L2.5a+黄褐色 内面：L2.5a+黄緑色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著
95	縄文土器 深鉢	-	-	-	KA	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著
96	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	外面：L2.5a+黄褐色 内面：L2.5a+黄緑色	B	口縁部片	平縁口縁 縄文土器
97	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEIN	外面：黒褐色 内面：黒褐色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著
98	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIM	外面：L2.5a+棕色 内面：L2.5a+棕色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著
99	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEIK	外面：L2.5a+褐色 内面：L2.5a+棕色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著
100	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	外面：L2.5a+黄褐色 内面：L2.5a+黄緑色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著
101	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADIN	外面：L2.5a+棕色 内面：L2.5a+黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著
102	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	外面：棕色 内面：明赤褐色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著
103	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEIN	外面：浅黄褐色 内面：L2.5a+黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著
104	縄文土器 深鉢	-	-	-	AI	外面：L2.5a+黄褐色 内面：L2.5a+黄緑色	B	口縁部片	平縁口縁 縄文土器
105	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABOJK	外面：黒褐色 内面：暗褐色	B	口縁部片	平縁口縁 縄文土器
106	縄文土器 深鉢片	-	-	-	N	外面：赤褐色 内面：赤褐色	A	口縁部片	平縁口縁 縄文土器
107	縄文土器 胴部片	-	(18, 6)	-	AIK	外面：明黄褐色 内面：L2.5a+黄褐色	B	胴部 50%	縄文土器
108	縄文土器 深鉢	-	-	-	KA	外面：L2.5a+赤褐色 内面：L2.5a+棕色	B	胴部片	縄文土器
109	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEIN	外面：L2.5a+黄褐色 内面：灰白色	C	胴部片	縄文土器 摩耗顯著
110	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEIN	外面：L2.5a+黄褐色 内面：L2.5a+棕色	C	胴部片	縄文土器 摩耗顯著

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
111	縄文土器 浅鉢	-	-	-	MS	外面：黒褐色 内面：こげい・黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著
112	縄文土器 鉢	-	-	-	ABE1	外面：こげい・黄褐色 内面：黒褐色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顯著
113	縄文土器 底部片	-	(4.9)	(0.2)	TEN	外面：緑灰黄色 内面：こげい・黄色	B	底部 50%	木炭痕あり
114	縄文土器 底部片	-	(8.4)	(0.0)	ABHKN	外面：明赤褐色 内面：褐色	B	底部 50%	網代痕あり
115	縄文土器 底部片	-	(4.3)	(10.3)	ADKN	外面：赤褐色 内面：こげい・褐色	C	底部 60%	摩耗顯著
116	縄文土器 底部片	-	(2.1)	10.0	AIN	外面：褐色 内面：褐色	C	底部 100%	摩耗顯著
117	縄文土器 底部片	-	(6.1)		ABMN	外面：灰褐色 内面：こげい・褐色	B	底部 20%	網代痕あり
118	縄文土器 底部片	-	(2.4)	(0.2)	AIN	外面：灰黄褐色 内面：こげい・褐色	B	底部 40%	網代痕あり
119	縄文土器 底部片	-	-	-	IKN	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	C	底部 40%	摩耗顯著 網代痕あり
120	縄文土器 底部片	-	(2.9)	(9.9)	ABUN	外面：灰黄褐色 内面：黒褐色	B	20%	網代痕あり
121	縄文土器 底部片	-	(2.3)	(6.4)	ADKN	外面：こげい・黄褐色 内面：こげい・黄褐色	B	底部 50%	網代痕あり
122	縄文土器 底部片	-	(3.6)	(0.0)	ABHKN	外面：こげい・黄褐色 内面：灰黄色	C	底部 30%	摩耗顯著 木炭痕あり
123	縄文土器 底部片	-	(2.8)	(0.4)	ADKN	外面：褐色 内面：こげい・黄褐色	B	底部 20%	
124	縄文土器 底部片	-	(3.1)	(0.0)	AIN	外面：褐色 内面：褐色	A	底部 20%	
125	縄文土器 底部片	-	(2.5)	(0.3)	AIK	外面：こげい・黄褐色 内面：こげい・黄褐色	C	底部 25%	摩耗顯著
126	縄文土器 底部片	-	(3.3)	0.2	BEHKN	外面：こげい・褐色 内面：灰褐色	B	底部 45%	
127	縄文土器 底部片	-	(5.2)	(5.9)	ABKN	外面：こげい・褐色 内面：こげい・褐色	C	底部 20%	摩耗顯著
128	縄文土器 底部片	-	(4.7)	(5.0)	AIK	外面：こげい・黄褐色 内面：黒褐色	C	底部 30%	摩耗顯著
129	縄文土器 注口土器				A	外面：褐色 内面：褐色	C	注口部 90%	摩耗顯著
130	縄文土器 注口土器	0.2	(2.1)	-	AIN	外面：黄褐色 内面：黒褐色	B	口縁部 20%	平縁口縁
131	縄文土器 ケニツユア	(4.4)	(2.2)	-	AS	外面：こげい・褐色 内面：こげい・黄褐色	A	口縁部 20%	底状口縁深鉢を模したものの
132	縄文土器 深鉢	-	(6.1)	-	AB1	外面：こげい・黄褐色 内面：こげい・黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 口縁部に突帯出る 外面とがやがめされる
133	縄文土器 深鉢	-	(4.4)	-	AB	外面：こげい・黄褐色 内面：灰白色	B	口縁部片	平縁口縁 口縁部に突帯出る 外面とがやがめされる
134	土製品 円筒				HI	外面：こげい・褐色 内面：こげい・褐色	C	口縁部片	摩耗顯著 長軸 3.5 cm 短軸 0.95 cm 土器の無文部分を転用
135	土製品 円筒				IKN	外面：こげい・黄褐色 内面：黒褐色	B	胴部片	長軸 4.25 cm 短軸 3.4 cm 厚み 0.75 cm 縄文が編文された胴部片を転用
136	土製品 円筒				AK	外面：褐色 内面：こげい・褐色	C	胴部片	摩耗顯著 長軸 4.9 cm 短軸 1.5 cm 厚み 0.8 cm 土器の無文部分を転用
137	弥生土器 甕	-	-	-	ABTN	外面：こげい・褐色 内面：こげい・黄褐色	B	胴上部片	造上式
138	弥生土器 甕	-	-	-	ABE1	外面：灰褐色 内面：灰黄褐色	B	胴部片	
139	弥生土器 甕	-	-	-	AIK	外面：褐色 内面：灰黄褐色	C	胴部片	摩耗顯著
140	弥生土器 甕	-	-	-	AB1	外面：灰褐色 内面：灰白色	B	胴部片	
141	弥生土器 甕	-	-	-	ABUN	外面：こげい・黄褐色 内面：灰黄色	B	胴部片	
142	弥生土器 甕	-	-	-	AB1	外面：こげい・黄褐色 内面：灰黄褐色	B	胴部片	
143	弥生土器 甕	-	-	-	ABKREIN	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	A	胴部片	
144	弥生土器 甕	-	-	-	AK	外面：黒褐色 内面：こげい・黄褐色	B	胴部片	
145	弥生土器 甕	-	-	-	AIK	外面：褐色 内面：こげい・褐色	B	胴部片	
146	弥生土器 甕	-	(8.25)	(5.5)	ABTN	外面：こげい・黄色 内面：こげい・黄褐色	A	底部 100%	

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
147	養生器 底部分	-	(3.3)	(10.0)	紅褐色	外面：(C)・黄褐色 内面：(C)・橙色	C	底割 100%	摩耗顕著
148	石製品 結縛車	備考：凝灰岩製 最大長 3.95 cm 最大幅 3.95 cm 孔径 0.65 cm 摩耗顕著							
149	石器 石鏃	備考：チャート製 重量 0.2g 最大長 1.15 cm 最大幅 0.8 cm 最大厚 0.25 cm 11度凹形							
150	石器 石鏃	備考：チャート製 重量 1g 最大長 2.3 cm 最大幅 1.3 cm 最大厚 0.5 cm 基部破片 有茎							
151	石器 石棒	備考：片岩製 重量 437g 最大長 24.7 cm 最大幅 5.6 cm 最大厚 2.4 cm 基部だが、縦に破損							
152	石器 磨石	備考：緑泥石片岩製 重量 132g 最大長 (13.2) cm 最大幅 (4.0) cm 最大厚 (1.7) cm 扁平							
153	石器 石棒	備考：片岩製 重量 345g 最大長 (15.7) cm 最大幅 (5.4) cm 最大厚 (2.5) cm 両端欠損、基部							
154	石器 砥石	備考：閃緑岩製 重量 117g 最大長 6.25 cm 最大幅 6.5 cm 最大厚 1.9 cm 赤彩あり							
155	石器 砥石	備考：軽石製 重量 70g 最大長 (5.6) cm 最大幅 (6.35) cm 最大厚 (1.07) cm 上下端欠損							
156	石器 打製石斧	備考：片岩製 重量 479g 最大長 (14.5) cm 最大幅 (9.0) cm 最大厚 (2.9) cm 下端欠損							
157	石器 石鏃	備考：安山岩製 重量 44g 最大長 5.5 cm 最大幅 4.2 cm 最大厚 1.15 cm 凹形							

る。153は基部の破片で粗雑なつくりである。152は磨石であり、緑泥片岩製である。154・155は砥石。154は下半を欠く。赤彩が僅かに残る。155は上下端を欠く。表裏面は断面形が弧状を呈する。軽石製品である。156は打製石斧の基部である。157は安山岩製の石鏃であり、上下端に挟りがみられる。

重複 第4号竪穴建物跡、第9号土坑、第11号土坑、第12号土坑と重複し、本遺構は第11号土坑より新しく、第4号竪穴建物跡、第9号土坑、第12号土坑より古い。

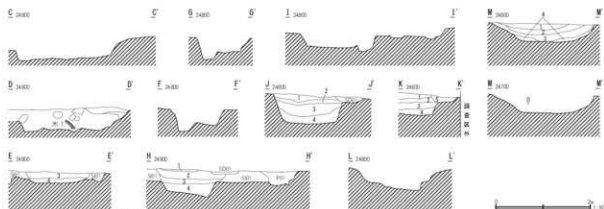
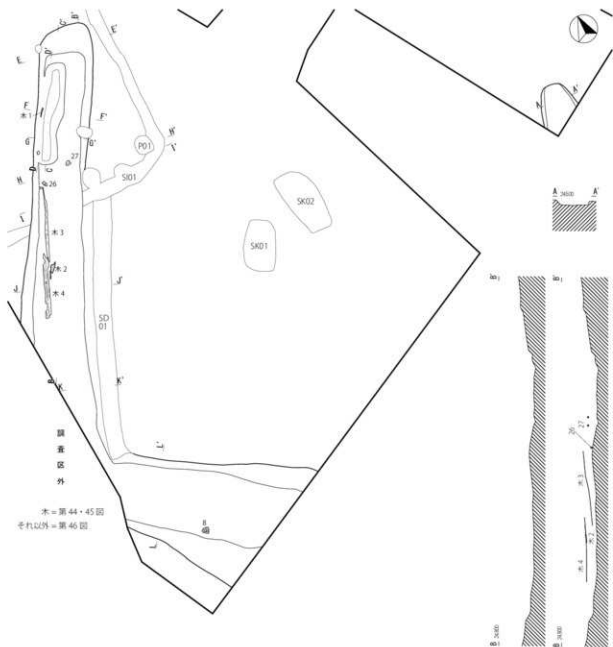
時期 4世紀前半か

第2号周溝墓(第41・42図)

位置 181～183-149～151グリッドに位置する。

規模 全体の規模は長軸12.72 m、短軸12.32 mを測り、主軸方向はN-26°-Eを示す。方台部は長軸9.68 m、短軸9.12 m。北西溝は検出範囲で長軸9.52 m、短軸1.84 m、遺構確認面からの深さは0.64 m。南東溝は検出範囲で長軸1.84 m、短軸1.20 m、遺構確認面からの深さは0.12 m。南西溝は検出範囲で長軸4.88 m、短軸1.72～3.20 m、遺構確認面からの深さは0.40 m。北西溝より溝内土坑が確認され、長軸2.2 m、短軸0.6 m、北西溝床面からの深さは0.2 mを測る。

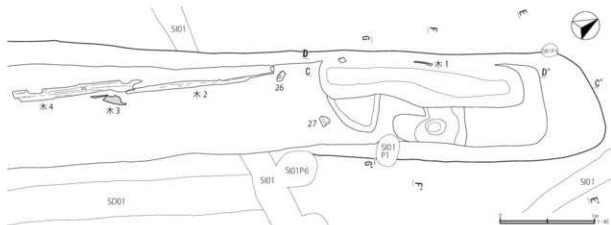
概要 第2号周溝墓は方形周溝墓であり、北西溝、南西溝、南東溝を検出した。南西溝の東側、南東溝の大半が調査区外である。本遺構は北側が遺物包含層状に立地しており、北西溝は、北側が第1号竪穴建物と、東側が第1号溝跡と重複している。方台部の盛土は確認されなかった。主体部について、方台部上では確認されなかったが、北西溝の北側で溝内土坑が検出され、人歯及び副葬品とみられる玉類が出土したことから墓塚と判断される。本遺構の平面形は北東側の溝を欠く「コ」字状を呈する。溝の覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。溝内土坑は一括埋没であり人為的なものと推察される。溝の短軸断面は逆台形状を呈し、長軸断面は中程に最深部があり、底面は若干の高低があるものの平坦に広がり、端部付近で緩やかに立ち上がる形状を呈する。南西溝からは、木製品が集中して出土している状況がみられた。遺物は、包含層上に立地していることから縄文土器・石器の混入が顕著である。溝内土坑は第42図に拡大図を提示した。溝内土坑は北東-南西方向に長軸をもつ細長い長方形状を呈し、南西溝の西壁に沿って軸方向に合わせた掘方である。土坑外東側に微細な凹凸がみられ、拡



第2号周溝墓 土層説明

1. 50/K3/1 棕色粘質土 酸化鉄含
2. 5V4/1 灰色粘質土 酸化鉄含 炭化物微量含
3. 7. 5V4/1 灰色粘質土 酸化鉄含 炭化物微量含 浅黄色 γ +73 mm含
4. 5S3/1 H-7' 黑色粘質土 酸化鉄含 浅黄色 γ +72 mm含
5. K3/1 灰色粘質土 酸化鉄含

第41图 第2号周溝墓平面圖



第42図 第2号周溝墓溝内土坑詳細図

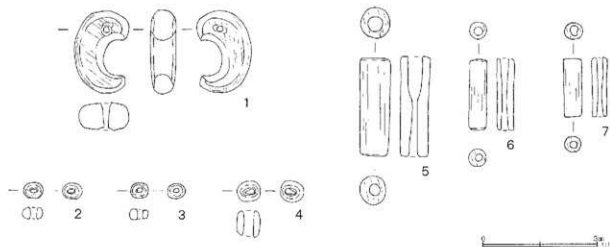
大図にのみ図示している。

遺物（第43～46図、第11～13表） 縄文土器深鉢、注口土器、敲石、石皿、勾玉、管玉、ガラス玉、ガラス小玉、木製品、人歯が出土した。

第43図1～7は溝内土坑から出土した。副葬品である。1は瑪瑙製の勾玉である。均整な作りで、精緻に研磨されており、視認される擦痕は僅かに残るのみである。穿孔は双方向から行われている。2・3はガラス小玉で水色を呈しほぼ同じサイズである。4は群青色を呈するガラス玉で、2・3よりサイズは大きい。2～4とも、透過して視認される気泡は、ほぼ球形を呈しており、鋳型による製作と考えられる。5～7は管玉で、5・6は凝灰岩製、7は蛇紋岩製である。いずれも双方向からの穿孔である。5が大きく、6・7は小さいがほぼ同じサイズである。また、詳細は附編で示すが、人歯が3点出土しており、外殻にあたるエナメル質のみが遺存している。

第44図1・2、第45図3・4は木製品である。自然科学的分析は附編で示した。いずれも北西溝からの出土であり、1は溝内土坑の西壁面に張り付いた形で検出した。1は小札状を呈する。風化が著しく加工痕の有無は不明である。木棺の一部の可能性はあるものの疑問が残る。2～3は溝内土坑の直近南側で出土した。2は炭化しており、薄皮一枚残った状態で土ごと取り上げ保存した。半分に割れた鋤先部とみられる。3は棒状を呈する。風化が著しく不確定だが、上部は加工され丸くなっている可能性がある。下部は先細りの形状を呈している。断面形は円形であったと推定される。元来の形状は不明であるが、長柄部材と推定しておく。4は板状を呈する。風化が著しく加工痕の有無は不明だが、板状に加工された製品または部材と推定する。表面中央に節がみられた。

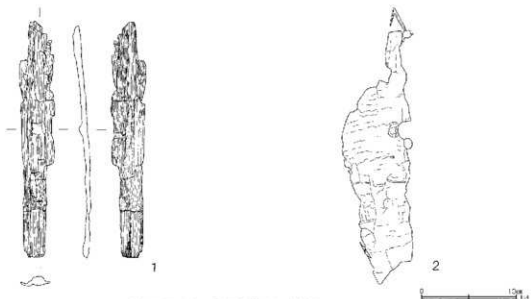
第46図1～29は縄文土器、30・31石器であり、全て流れ込みの遺物である。1・2は曾谷・高井東式であり、1は深鉢の口縁部片、2は注口土器の口縁部片とみられる。3～7は後期安行式であり、3・4は口縁部片、4～7は胴部片である。8～13は安行3d式の深鉢である。14は注口土器の口縁部とみられるが、菱形区画が配置されており、安行3c・3d式と思われる。15・16は細線文土器で深鉢である。安行2式に伴うものか。17～20は無文土器の深鉢であり、19・20は折り返し口縁である。21は注口土器の口縁部片で曾谷式と思われる。22は深鉢の口縁部片である。工字文が施されるが、平行沈線が多重化しており、大洞A1式と考えられる。23は脚付底部片。24～29は底部片。30は敲石。



第 43 図 第 2 号周溝墓出土玉類

第 11 表 第 2 号周溝墓出土玉類観察表

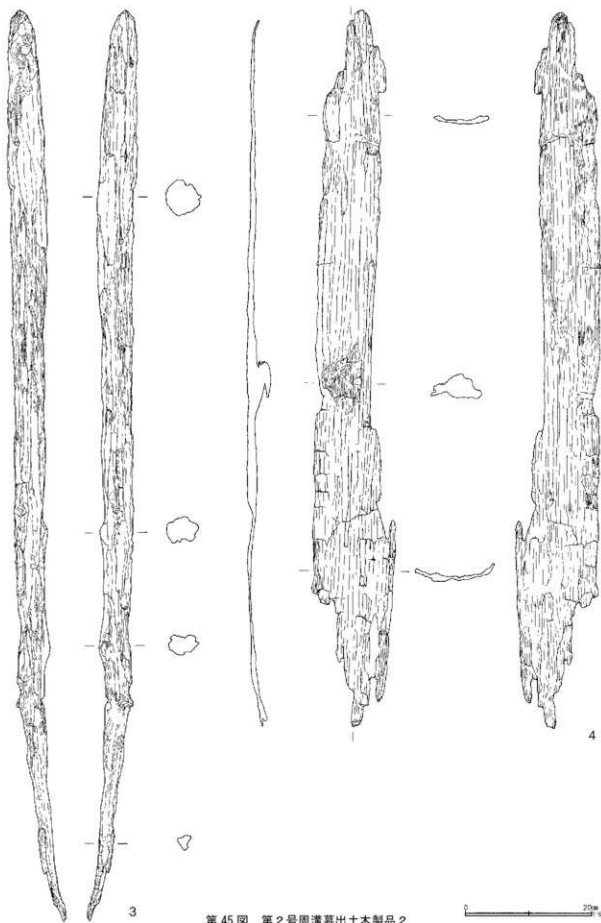
No.	種類	材質	最大長	最大幅	厚さ	重量	残存率	備考
1	勾玉	瑪瑙	2.2	1.5	0.7	2.7g	100%	孔径 0.4~0.2 cm 淡黄色
2	小玉	ガラス	0.5	0.4	0.3	0.1g	100%	孔径 0.1 cm 木色
3	小玉	ガラス	0.4	0.5	0.3	0.1g	100%	孔径 0.1 cm 木色
4	小玉	ガラス	0.5	0.6	0.7	0.4g	100%	孔径 0.2~0.1 cm 碧青色
5	管玉	緑色凝灰岩	2.5	0.8	0.8	2.2g	100%	孔径 0.4~0.1 cm 上下両面より穿孔 明緑灰色
6	管玉	緑色凝灰岩	1.9	0.5	0.5	0.5g	100%	孔径 0.2~0.1 cm 上下両面より穿孔 明緑灰色
7	管玉	紅紋岩	1.5	0.5	0.4	0.6g	100%	孔径 0.2~0.1 cm 上下両面より穿孔



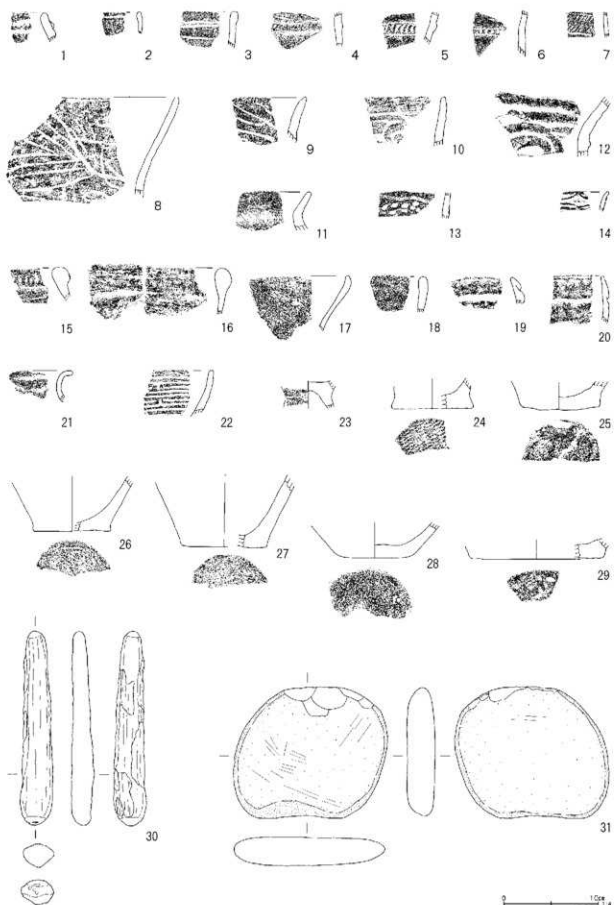
第 44 図 第 2 号周溝墓出土木製品 1

第 12 表 第 2 号周溝墓出土木製品観察表

No.	種類	最大長	最大幅	厚さ	残存率	備考
1	小孔状	(24.7)	(3.7)	(1.0)	-	風化顯著
2	棒状	(28.9)	(7.2)	-	破欠部 50%	風化顯著 軸先小欠 全体伏化
3	棒状	114.8	5.9	5.8	90%	風化顯著 断面円形の棒状物 端部は半球状と先端りに加工
4	板状	(114.9)	(13.1)	(1.0)	破欠部	風化顯著 板状のもの 中心に部とみられる厚さ (3.8) cm の軸あり



第 45 图 第 2 号周满墓出土木制品 2



第46图 第2号周溝墓出土遺物

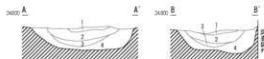
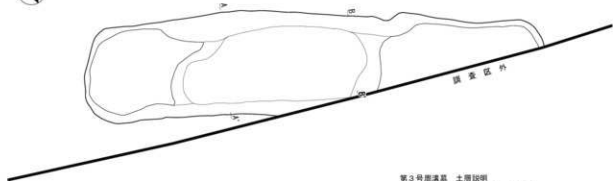
第13表 第2号周溝墓出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器 深鉢 注口土器	-	-	-	AIV	外面：棕色 内面：棕色	C	口縁部片	平縁口縁 管谷・高井東式 摩耗顕著
2	縄文土器 注口土器	-	-	-	ABK	外面：L:赤・黄棕色 内面：L:赤・黄棕色	C	口縁部片	平縁口縁 管谷・高井東式 摩耗顕著
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABI	外面：棕色 内面：L:赤・棕色	A	口縁部片	平縁口縁 後期安行式
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABK	外面：黒褐色 内面：黒褐色	B	頸部片	後期安行式
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABX	外面：褐色 内面：L:赤・黄棕色	B	頸部片	後期安行式
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABN	外面：灰黄棕色 内面：灰黄棕色	B	頸部片	後期安行式
7	縄文土器 注口土器	-	-	-	ABK	外面：灰黄色 内面：灰黄色	C	頸部片	後期安行式 摩耗顕著
8	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABK	外面：灰黄棕色 内面：灰黄棕色	C	口縁部片	平縁口縁 後期安行式 摩耗顕著
9	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABN	外面：L:赤・褐色 内面：L:赤・黄棕色	B	口縁部片	平縁口縁 後期安行式
10	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABI	外面：L:赤・赤褐色 内面：L:赤・褐色	C	口縁部片	平縁口縁 後期安行式 摩耗顕著
11	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH	外面：L:赤・棕色 内面：L:赤・黄棕色	B	口縁部片	平縁口縁 後期安行式
12	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	外面：棕色 内面：L:赤・棕色	C	頸部片	後期安行式 摩耗顕著
13	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABK	外面：灰黄色 内面：灰黄色	C	頸部片	後期安行式 摩耗顕著
14	縄文土器 注口土器	-	-	-	ABK	外面：棕色 内面：L:赤・黄棕色	C	口縁部片	平縁口縁 後期安行式 摩耗顕著
15	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABK	外面：棕色 内面：棕色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顕著
16	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABN	外面：灰黄棕色 内面：灰黄色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顕著
17	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABN	外面：褐色 内面：L:赤・褐色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顕著
18	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABN	外面：L:赤・黄棕色 内面：L:赤・黄棕色	C	口縁部片	平縁口縁 縄文土器 摩耗顕著
19	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABN	外面：灰黄棕色 内面：灰黄色	B	口縁部片	平縁口縁 縄文土器
20	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIN	外面：灰黄色 内面：灰黄色	B	口縁部片	平縁口縁 縄文土器
21	縄文土器 注口土器	-	(3.3)	-	ABK	外面：黒褐色 内面：灰黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 管谷・高井東式 摩耗顕著
22	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIK	外面：灰黄棕色 内面：L:赤・黄棕色	A	口縁部片	平縁口縁 大割 A1 式
23	縄文土器 付底部	-	(2.9)	-	ABN	外面：L:赤・黄棕色 内面：黒褐色	B	底部片	
24	縄文土器 底部片	-	(3.2)	-	ABIN	外面：L:赤・黄棕色 内面：L:赤・褐色	C	底部 25%	摩耗顕著 網代版あり
25	縄文土器 底部片	-	(2.8)	(8.3)	ABN	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	C	底部 50%	摩耗顕著
26	縄文土器 底部片	-	(3.8)	(8.2)	ABCIN	外面：棕色 内面：棕色	B	底部 40%	
27	縄文土器 底部片	-	(7.0)	(9.1)	ABCIN	外面：棕色 内面：明赤褐色	B	底部 30%	
28	縄文土器 底部片	-	(3.8)	(8.0)	ABIN	外面：L:赤・赤褐色 内面：L:赤・黄棕色	C	底部 50%	摩耗顕著
29	縄文土器 底部片	-	(2.1)	(14.1)	ABIK	外面：L:赤・褐色 内面：灰黄棕色	C	底部 15%	摩耗顕著
30	石器 印石	備考：片割製 重量 201g 最大長 20.4cm 最大幅 3.0cm 最大厚 2.5cm 完形							
31	石器 石皿	備考：円縁割製 重量 1137g 最大長 16.3cm 最大幅 13.8cm 最大厚 3.0cm 完形							

31 は石皿。

重複 第1号堅穴建物、第1号溝跡と重複し、本遺構は第1号溝跡より古く、第1号堅穴建物より新しい。

時期 古墳時代前期

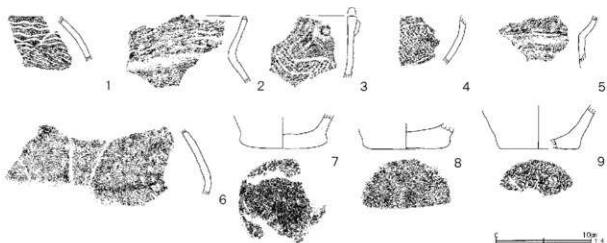


第3号周溝墓 土层說明

1. 5Y3/1 4F-7 黑色粘質土 碳化跡含
2. 7.5B6/2 4G1F-7 灰色粘質土 碳化跡多量含
3. 10Y5/1 灰色粘質土 碳化跡含
4. 10Y2/1 黑色粘質土 碳化跡含
5. 7.5B6/2 4G1F-7 灰色粘質土 碳化跡含
6. 10Y2/1 黑色粘質土 碳化跡多量含 灰白色F₂₅多量含
7. 10Y4/1 灰色粘質土 碳化跡含 炭化物較多量含



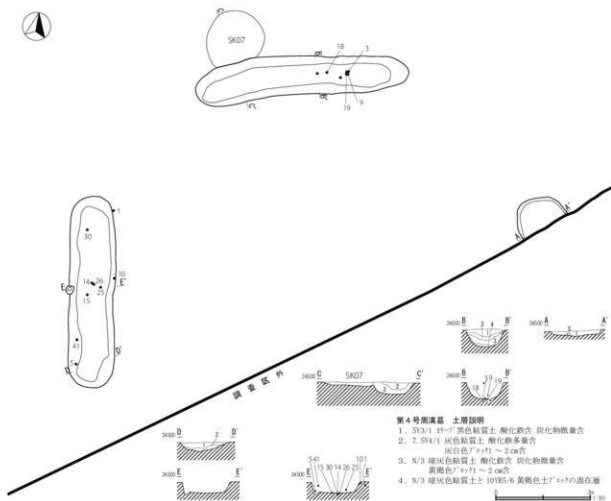
第47图 第3号周溝墓



第48图 第3号周溝墓出土遺物

第14表 第3号周溝墓出土遺物觀察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色调	烧成	残存率	備考
1	弥生土器 壶	-	-	-	AHDLJN	外面: 1C.5G+黄棕色 内面: 粉灰色	C	胴上部片	平縁口縁 摩耗顯著
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	AHGN	外面: 粉灰色 内面: 灰黄色	C	口縁部片	平縁口縁 管形・高片束式 摩耗顯著
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	AHKN	外面: 1C.5G+棕色 内面: 1C.5G+棕色	C	口縁部片	後期交行式 摩耗顯著
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	AHFN	外面: 1C.5G+棕色 内面: 1C.5G+赤褐色	C	胴上部片	後期交行式 摩耗顯著
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	AHDLJN	外面: 黑褐色 内面: 1C.5G+黄褐色	C	胴中部片	縄文土器 摩耗顯著
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	AHFN	外面: 灰褐色 内面: 黑褐色	C	胴上部片	縄文土器 摩耗顯著
7	縄文土器 底部片	-	13.43	0.23	AHN	外面: 1C.5G+棕色 内面: 1C.5G+棕色	C	底部 90%	摩耗顯著
8	縄文土器 底部片	-	12.77	0.23	AHKN	外面: 1C.5G+赤褐色 1C.5G+赤褐色 内面: 1C.5G+赤褐色	C	底部 50%	摩耗顯著
9	縄文土器 底部片	-	14.43	0.43	AHKN	外面: 1C.5G+黄棕色 内面: 1C.5G+黄棕色	C	底部 45%	摩耗顯著



第49図 第4号周溝墓

第3号周溝墓（第47図）

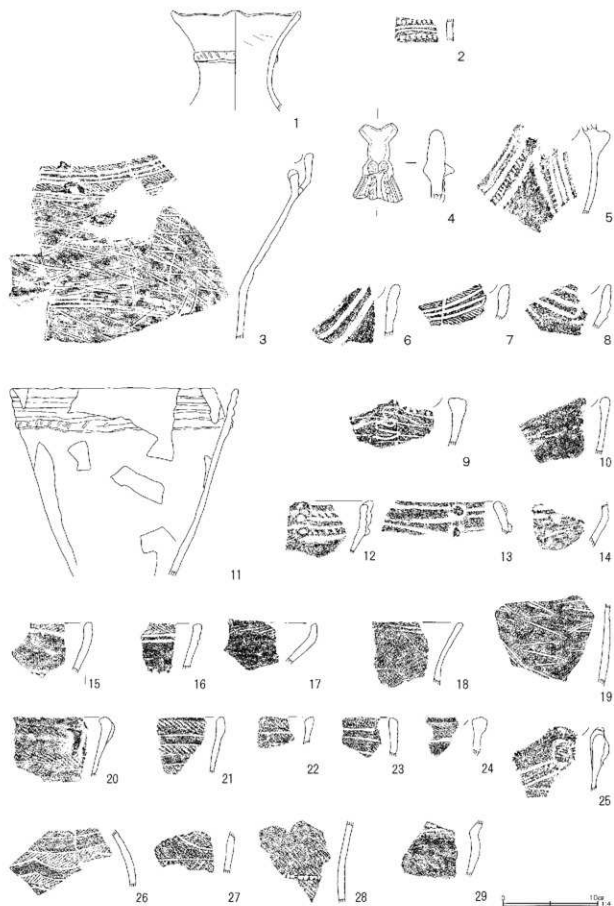
位置 178～180-149 グリッドに位置する。

規模 主軸方向はN - 71.5° - Wを示す。北溝は長軸8.34 m、短軸2.16 m、遺構確認面からの深さは0.36 m。

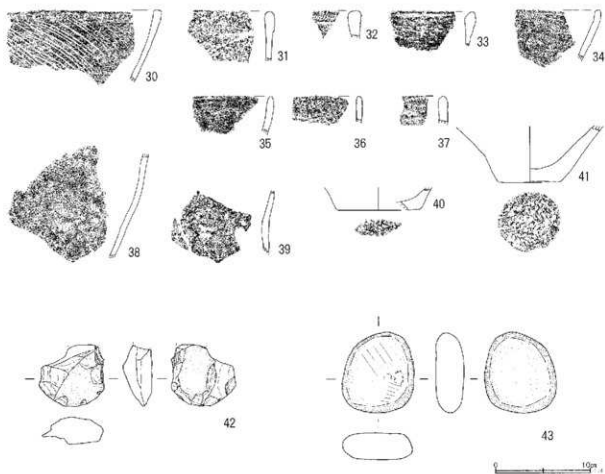
概要 第3号周溝墓は北溝を検出し、東溝、西溝、南溝、北溝東南側の一部は調査区外である。北溝のみの検出ではあるが、周辺の遺構検出状況、溝の形状、覆土等から勘案すると方形周溝墓であると推察される。方台部及び主体部は配置的には調査区外であり、本調査では検出されなかった。平面形は四隅が切れる形状を呈すると推察される。溝の覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。溝の短軸断面は逆台形状を呈し、長軸断面は中程に最深部があり、底面は平坦に広がり、緩やかに立ち上がる形状を呈する。

遺物（第48図、第14表） 弥生土器壺、縄文土器深鉢等が出土した。

1は弥生土器壺の胴上部片である。北島式とみられ、波状文の下に縄文が施される。2～6は縄文土器深鉢である。2は粗製土器で曾谷・高井東式とみられる口縁部片で、口端に刻目入りの小突起が付される。3は後期安行式であり、平縁口縁に幅広の逆台形状突起がつき、その上に欠損しているが小形の突起がつく。外面には円形貼付文が付される。4は後期安行式の胴下部片である。5・6は無文土器で、



第50图 第4号周溝墓出土物1



第51図 第4号周溝墓出土遺物2

胴部片である。7～9は底部片である。1は遺構に伴うが、そのほかは流れ込みの遺物である。

時期 弥生時代中期後半

第4号周溝墓（第49図）

位置 175～177-146・147グリッドに位置する。

規模 全体の規模は検出範囲で長軸11.72m、短軸8.76mを測り、主軸方向はN-10°-Wを示す。方台部は検出範囲で長軸8.72m、短軸7.36m。東溝は検出範囲で長軸1.60m、短軸1.60m、遺構確認面からの深さは0.12m。西溝は長軸5.44m、短軸1.40m、遺構確認面からの深さは0.20m。北溝は長軸5.20m、短軸1.40m、遺構確認面からの深さは0.32m。

概要 第4号周溝墓は、方形周溝墓であり、北溝、西溝と東溝北側の一部を検出した。南溝、東溝の大半は調査区外である。また、北溝は第7号土坑と重複する。方台部の盛土及び主体部は確認されなかった。平面形は隅が切れる形状を呈する。覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。溝の短軸断面は概ね逆台形状を呈し、長軸断面は中程に最深部があり、底面は緩やかな丸底から平坦を呈し、端部付近で緩やかに立ち上がる形状を呈する。

遺物（第50-51図、第15表） 弥生土器壺、縄文土器深鉢、鉢、打製石斧、磨石等が出土した。

1・2は弥生土器壺である。1は口縁～頸部の破片。口端に4単位の緩やかな突起が付され、頸部に

斜位の刻目が入る隆帯が巡り、地文は無文である。2は頸部片で円形刺突列間に2条の沈線が巡る。3～12、14～39は縄文土器深鉢、13は縄文土器でソロバン玉形を呈する鉢である。3～9、11～19は曾谷・高井東式である。3～9は波状口縁、20～29は安行2式とみられる。10・30～39は粗製土器で、30～33は紐線文土器、10・34～39は無文土器である。40・41は底部片である。42は打製石斧の刃部の破片。43は楕円形の磨石である。1・2は遺構に伴うが、そのほかは流れ込みの遺物である。

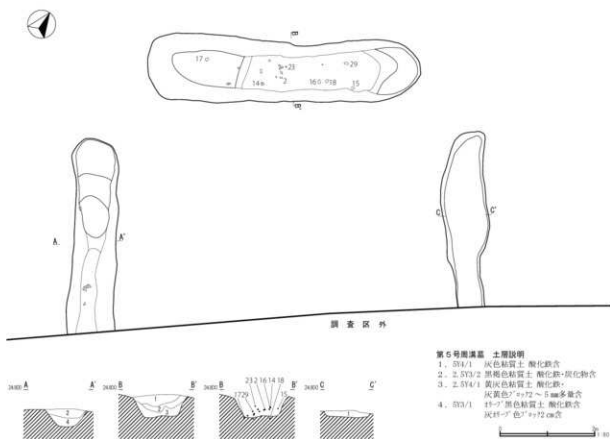
重複 第7号土坑と重複し、本遺構は第7号土坑より新しい。

時期 弥生時代中期後半

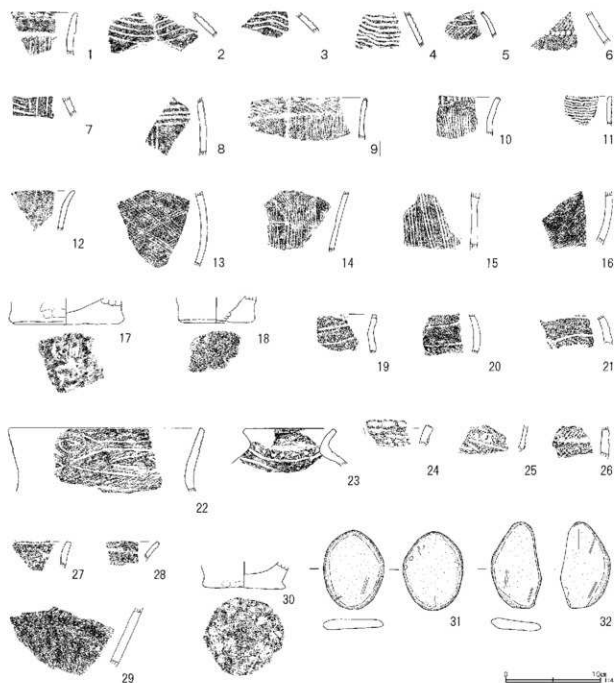
第15表 第4号周溝墓出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 盃	(13.0)	(10.5)	-	AEI	外面：褐色 内面：褐色	C	口縁部 80%	摩耗顯著
2	弥生土器 盃	-	-	-	AEK	外面：明黄褐色 内面：暗黄褐色	C	胴部片	摩耗顯著
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEIIN	外面：灰黄褐色 内面：L・S・黄褐色	A	口縁～胴部 20%	波状口縁 曾谷・高井東式
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEIIBIN	外面：L・S・黄褐色 内面：L・S・黄褐色	B	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEI	外面：褐色 内面：褐色	A	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEI	外面：L・S・黄褐色 内面：L・S・黄褐色	C	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
7	縄文土器 深鉢	-	-	-	BEV	外面：灰黄色 内面：灰黄色	B	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式
8	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEI	外面：褐色 内面：L・S・褐色	B	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式
9	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEI	外面：褐色 内面：明赤褐色	A	口縁部片	波状口縁 曾谷・高井東式
10	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEIIN	外面：L・S・褐色 内面：L・S・黄褐色	B	口縁部片	波状口縁 粗製土器
11	縄文土器 深鉢	(21.0)	(19.9)	-	AEK	外面：暗褐色 内面：黒褐色	C	口縁～胴部 40%	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
12	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEIN	外面：褐色 内面：褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
13	縄文土器 鉢	-	-	-	BEV	外面：L・S・褐色 内面：黒褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
14	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEI	外面：褐色 内面：L・S・黄褐色	B	胴上部片	曾谷・高井東式
15	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEIN	外面：L・S・黄褐色 内面：灰黄色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
16	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEI	外面：L・S・褐色 内面：褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
17	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEIIN	外面：明赤褐色 内面：L・S・褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式 摩耗顯著
18	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEI	外面：黒褐色 内面：黒色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井東式
19	縄文土器 深鉢	-	-	-	K	外面：L・S・黄褐色 内面：灰白色	B	胴部片	曾谷・高井東式
20	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEI	外面：灰黄褐色 内面：褐色	A	口縁部片	曾谷口縁 後期安行式
21	縄文土器 深鉢	-	-	-	B	外面：暗褐色 内面：暗褐色	A	口縁部片	平縁口縁 後期安行式
22	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEI	外面：L・S・褐色 内面：L・S・黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 後期安行式 摩耗顯著
23	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEI	外面：L・S・褐色 内面：L・S・褐色	B	口縁部片	平縁口縁 後期安行式
24	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEI	外面：黒褐色 内面：暗褐色	A	口縁部片	波状口縁 後期安行式
25	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEI	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	C	口縁部片	波状口縁 後期安行式 摩耗顯著
26	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEI	外面：黒褐色 内面：黒褐色	B	胴上部片	後期安行式
27	縄文土器 深鉢	-	-	-	BEV	外面：L・S・黄褐色 内面：L・S・黄褐色	C	胴中部片	後期安行式 摩耗顯著
28	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEK	外面：灰黄褐色 内面：L・S・黄褐色	C	胴中部片	後期安行式 摩耗顯著

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
29	縄文土器 苳鉢	-	-	-	ABBH	外面：L255・黄棕色 内面：黄灰色	B	胴部片	後遺安行式
30	縄文土器 苳鉢				ABBIN	外面：灰黄棕色 内面：L255・赤褐色	C	口縁部片	平縁口縁 紐縁文土器 摩耗顯著
31	縄文土器 苳鉢	-	-	-	BBN	外面：L255・黄棕色 内面：L255・黄棕色	C	口縁部片	平縁口縁 紐縁文土器 摩耗顯著
32	縄文土器 苳鉢	-	-	-	ABET	外面：灰黄棕色 内面：L255・黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 紐縁文土器
33	縄文土器 苳鉢	-	-	-	A1N	外面：赤褐色 内面：明赤褐色	B	口縁部片	平縁口縁 紐縁文土器
34	縄文土器 苳鉢	-	-	-	ABE1JN	外面：L255・緑色 内面：L255・橙黄色	C	口縁部片	平縁口縁 机製土器 摩耗顯著
35	縄文土器 苳鉢	-	-	-	H	外面：L255・緑色 内面：L255・橙黄色	B	口縁部片	平縁口縁 机製土器
36	縄文土器 苳鉢	-	-	-	ABBEIN	外面：L255・緑色 内面：L255・緑色	C	口縁部片	平縁口縁 机製土器 摩耗顯著
37	縄文土器 苳鉢	-	-	-	ABET	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	C	口縁部片	平縁口縁 机製土器 摩耗顯著
38	縄文土器 苳鉢	-	-	-	ABBIN	外面：黄褐色 内面：黄灰色	C	胴部片	机製土器 摩耗顯著
39	縄文土器 苳鉢	-	-	-	ABIN(参)	外面：L255・黄棕色 内面：黄褐色	C	胴部片	机製土器 摩耗顯著
40	縄文土器 底部分	-	(2.4)	(9.6)	ABHD	外面：灰褐色 内面：灰褐色	B	底面 20%	
41	縄文土器 底部分	-	(3.95)	(6.8)	BB	外面：暗褐色 内面：明赤褐色	B	底面 100%	
42	石器 ステンペラー	備考：両刃製 重量 133g 最大長 6.57 cm 最大幅 16.81 cm 最大厚 2.83 cm 片端欠損							
43	石器 磨石	備考：四縁岩製 重量 213g 最大長 8.5 cm 最大幅 7.5 cm 最大厚 3.0 cm 完形							



第52図 第5号周溝墓



第53図 第5号周溝墓出土遺物

第5号周溝墓（第52図）

位置 169～171-142・143グリッドに位置する。

規模 全体の規模は検出範囲で長軸10.00 m、短軸7.18 mを測り、主軸方向はN-34°-Wを示す。方台部は検出範囲で長軸6.88 m、短軸5.36 m。東溝は検出範囲で長軸4.52 m、短軸1.52 m、遺構確認面からの深さは0.08 m。西溝は検出範囲で長軸4.64 m、短軸1.60 m、遺構確認面からの深さは0.32 m。北溝は長軸6.80 m、短軸1.82 m、遺構確認面からの深さは0.48 m。

概要 第5号周溝墓は、方形周溝墓であり、東溝北側と西溝北側の大半、北溝を検出した。東溝南側と西溝南側の一部と南溝は調査区外である。方台部の盛土及び主体部は確認されなかった。平面形は隅が

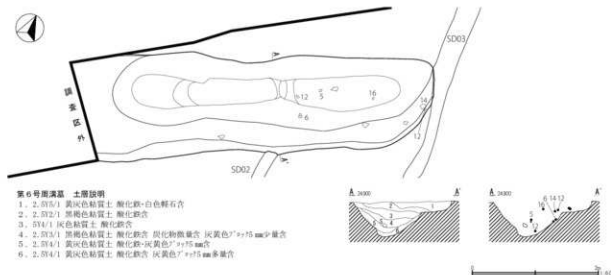
第16表 第5号周溝墓出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 蓋	-	-	-	AB01X	外面：黒褐色 内面：赤褐色	B	口縁部片	
2	弥生土器 蓋	-	-	-	J0	外面：緑灰黄色 内面：赤褐色	C	胴部片	摩耗顯著
3	弥生土器 蓋	-	-	-	H	外面：1:2.5(黄棕色) 内面：1:2.5(黄棕色)	B	胴部片	
4	弥生土器 蓋	-	-	-	K	外面：黒褐色 内面：黒灰色	B	口縁部片	
5	弥生土器 蓋	-	-	-	H	外面：1:2.5(黄棕色) 内面：赤褐色	C	胴部片	摩耗顯著
6	弥生土器 蓋	-	-	-	AB0	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	C	胴部片	摩耗顯著
7	弥生土器 蓋	-	-	-	ABE	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	B	胴部片	
8	弥生土器 蓋	-	-	-	ABEG1	外面：1:2.5(黄棕色) 内面：1:2.5(黄棕色)	B	胴部片	
9	弥生土器 甕	-	-	-	AB0T	外面：灰黄褐色 内面：1:2.5(黄棕色)	C	口縁部片	摩耗顯著
10	弥生土器 甕	-	-	-	AB0T	外面：赤褐色 内面：赤褐色	B	口縁部片	
11	弥生土器 甕	-	-	-	ABEG	外面：1:2.5(黄棕色) 内面：灰黄褐色	B	口縁部片	
12	弥生土器 甕	-	-	-	JK	外面：赤褐色 内面：赤褐色	B	口縁部片	
13	弥生土器 甕	-	-	-	AN	外面：赤色 内面：赤褐色	B	胴部片	
14	弥生土器 甕	-	-	-	TK	外面：赤色 内面：1:2.5(黄棕色)	B	胴部片	
15	弥生土器 甕	-	-	-	AB0TJK	外面：褐色 内面：赤色	B	胴部片	
16	弥生土器 甕	-	-	-	TK	外面：赤色 内面：赤色	C	胴部片	摩耗顯著
17	弥生土器 甕部	-	(2.7)	(11.0)	AN	外面：赤色 内面：1:2.5(黄棕色)	B	底部 20%	
18	弥生土器 甕部	-	(2.7)	(7.0)	ABGN	外面：赤色 内面：灰白色	C	底部片 20%	摩耗顯著
19	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABX	外面：1:2.5(褐色) 内面：褐色	C	口縁部片	平縁口縁 晚期安行式 摩耗顯著
20	縄文土器 深鉢	-	-	-	J0	外面：1:2.5(黄棕色) 内面：褐色	C	胴部片	晚期安行式 摩耗顯著
21	縄文土器 深鉢	-	-	-	KN	外面：褐色 内面：灰黄褐色	A	胴部片	晚期安行式
22	縄文土器 深鉢	20.00	6.75	-	JKN	外面：赤褐色 内面：1:2.5(黄棕色)	C	口縁部片	平縁口縁 晚期安行式 摩耗顯著
23	縄文土器 深鉢	19.2)	(3.9)	-	ABN	外面：1:2.5(黄棕色)	A	口縁部片 20%	平縁口縁 晚期安行式
24	縄文土器 深鉢	-	-	-	JK	外面：1:2.5(褐色) 内面：灰黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 晚期安行式
25	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABK	外面：赤褐色 内面：赤褐色	C	胴部片	晚期安行式 摩耗顯著
26	縄文土器 深鉢	-	-	-	ATN	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	C	胴部片	晚期安行式 摩耗顯著
27	縄文土器 深鉢	-	-	-	H	外面：褐色 内面：1:2.5(褐色)	C	口縁部片	平縁口縁 摩耗顯著
28	縄文土器 注口土器	-	-	-	ABW	外面：褐色 内面：褐色	C	口縁部片	平縁口縁 摩耗顯著
29	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB0TJN	外面：1:2.5(褐色) 内面：1:2.5(黄棕色)	C	胴部片	摩耗顯著
30	縄文土器 底部片	-	(2.2)	8.8	AB0TN	外面：1:2.5(黄棕色) 内面：褐色	C	底部 100%	摩耗顯著
31	石器 磨石	備考：砂岩製 重量89g 最大長 8.35cm 最大幅 6.2cm 最大厚 1.2cm 扁平							
32	石器 磨石	備考：板状岩製 重量95.5g 最大長 9.2cm 最大幅 5.3cm 最大厚 1.4cm							

切れる形状を呈する。覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。溝の短軸断面は逆台形形状を呈し、長軸断面は中程に最深部がみられ、底面は概ね平坦であり、端部付近で緩やかに立ち上がる形状を呈する。東溝は掘方が浅くなっている。重複はみられなかった。

遺物(第53図、第16表) 弥生土器蓋、甕、縄文土器深鉢、鉢、注口土器、磨石等が出土した。

1～8は弥生土器蓋。1は折り返し口縁の口縁部片。2～7は肩部片であり、2は直線文、3・4は



第54図 第6号周溝墓

波状文である。5は沈線下に縄文、6は円形刺突文下に縄文が施される。7は重四角文、8は胴中部片で、重四角文が施文される。9～16は弥生土器甕。9～12は口縁部片であり、9は口端に楕円の窪みを巡らし、口縁部は櫛歯状工具による施文され、斜位の沈線が巡り、以下は縦位の沈線。10は口端に刻目を巡らし、口縁部は櫛歯状工具による縦位の沈線。11は櫛歯状工具によるゆるやかな波状文。12は無文である。13～16は胴部片で、13は斜格子文、14・15は横位の羽状文が施される。16は縄文を地文としている。17・18は弥生土器底部片である。19～27、29は縄文土器深鉢、28は縄文土器注口土器、30は縄文土器底部片である。19～21、25は安行3 a式とみられ、沈線と縄文による文様が施される。22～24、26は安行3 c式とみられ、斜沈線、刺突により施文される。22は口縁部片であるが、斜位の単沈線を地文とする菱形区画が施され、区画内に円文が施文される。31・32は磨石である。

時期 弥生時代中期後半

第6号周溝墓（第54図）

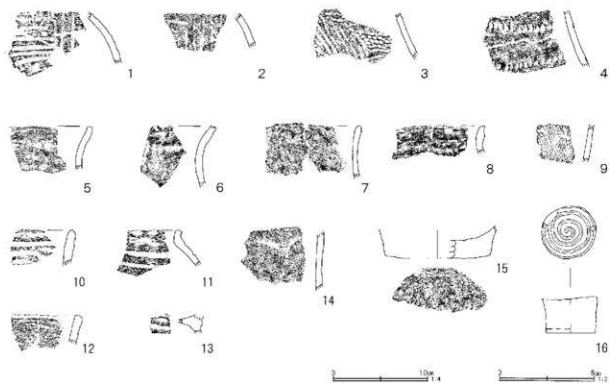
位置 171・172-140・141 グリッドに位置する。

規模 主軸方向はN-62°-Wを示す。南溝は検出範囲で長軸6.24 m、短軸2.40 m、遺構確認面からの深さは0.54 m。

概要 第6号周溝墓は南溝の大半を検出し、東溝、西溝、南溝西側の一部、北溝は調査区外である。また、第2・3号溝跡と重複する。南溝のみの検出ではあるが、周辺の遺構検出状況、溝の形状、覆土等から勘案すると方形周溝墓であると推察される。方台部及び主体部は配置的には調査区外であり、本調査では検出されなかった。平面形は四隅が切れる形状を呈すると推察される。溝の覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。溝の短軸断面は逆台形状を呈し、長軸断面は中程に最深部があり、底面は平坦に広がり、緩やかに立ち上がる形状を呈し、西端は薄い掘込が広がる。

遺物（第55図、第17表） 弥生土器壺、甕、縄文土器深鉢、土製耳飾等が出土した。

1～4は弥生土器壺で、いずれも胴部の破片である。1・2は重四角文が施される。3は三角文が施文される。4は刻目が2条巡る。5～9は甕で、5～8は口縁部片、9は胴部片である。5は内湾して



第55図 第6号周溝墓出土遺物

第17表 第6号周溝墓出土遺物観察表

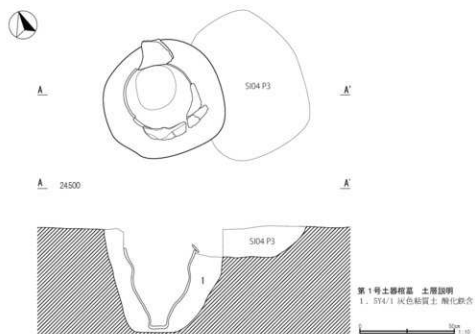
No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 甕	-	-	-	AN	外面：棕色 内面：棕色	C	胴部片	摩耗顕著
2	弥生土器 甕	-	-	-	TKN	外面：暗赤褐色 内面：棕色	B	胴部片	
3	弥生土器 甕	-	-	-	AE	外面：灰黄色 内面：灰黄色	C	胴部片	摩耗顕著
4	弥生土器 甕	-	-	-	BDHMN	外面：灰黄色 内面：灰白色	C	胴部片	摩耗顕著
5	弥生土器 甕	-	-	-	AN	外面：黄褐色 内面：L・D・黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁
6	弥生土器 甕	-	-	-	KN	外面：L・D・棕色 内面：棕色	B	口縁部片	平縁口縁
7	弥生土器 甕	-	-	-	KCFJ	外面：黄褐色 内面：黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 摩耗顕著
8	弥生土器 甕	-	-	-	ADJN	外面：L・D・棕色 内面：L・D・棕色	B	口縁部片	平縁口縁
9	弥生土器 甕	-	-	-	AE	外面：L・D・黄褐色 内面：黄褐色	C	胴部片	摩耗顕著
10	縄文土器 深鉢	-	-	-	AKN	外面：灰白色 内面：灰白色	C	口縁部片	平縁口縁 摩耗顕著
11	縄文土器 深鉢	-	-	-	AKN	外面：L・D・黄褐色 内面：淡黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 吹形空行式 摩耗顕著
12	縄文土器 浅鉢	-	-	-	BN	外面：棕色 内面：棕色	A	口縁部片	平縁口縁
13	縄文土器 台付底片	-	-	-	AE	外面：暗赤褐色 内面：暗赤褐色	C	底部片	摩耗顕著
14	縄文土器 深鉢	-	-	-	BN	外面：灰白色 内面：灰黄色	C	胴部片	摩耗顕著
15	縄文土器 底部片	-	Cl.03	(11.1)	AKN	外面：明褐色 内面：L・D・黄褐色	C	底部 40%	摩耗顕著
16	土製品 刻線	備考：最大径2.9cm 厚さ1.9cm 吹形 明赤褐色を呈し、地成は普通 中実で表面に渦巻状の文様が施される							

口縁部が直立する形状。6は口縁部が外反して開く。口端に窪みを巡らす。7は口縁部が僅かに開く形状。8は粗雑な折り返し口縁。9は斜位の沈線が施される。10～12・14は縄文土器深鉢であるが、流れ込みである。10～12は口縁部片。10・11は太目の沈線で施文される。11は口縁部が内湾する形状のもので、口端に押圧が巡る。安行3d式か。12は外傾する形状で口端に沈線が巡る。13は台付底部の接合部片

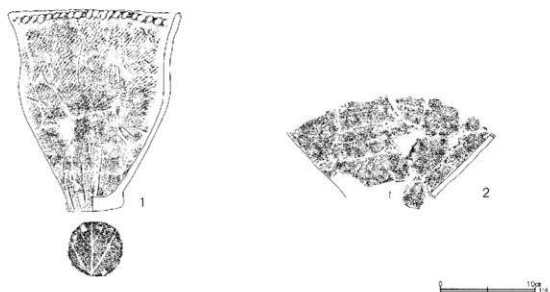
である。14は弧線が施される。15は底部片である。16は土製耳飾であり、断面形状は逆台形を呈するが上底と下底にあまり差がない。表面は沈線により渦巻状の文様が施され、沈線間は微隆起線が形成されている。

重複 第2・3号溝跡と重複し、本遺構は第2・3号溝跡より新しい。

時期 弥生時代中期後半



第56図 第1号土器棺墓



第57図 第1号土器棺墓出土遺物

第18表 第1号土器棺墓出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器 甕	18.0	21.3	6.0	AD1	外面：灰黄棕色 内面：紅褐色	B	80%	土器棺墓 棺身
2	弥生土器 甕	-	(7.0)	-	AD1XN	外面：黄灰色 内面：赤褐色	C	65%	摩耗顯著 土器棺墓 棺蓋

3 土器棺墓

第1号土器棺墓(第56図)

位置 172-142 グリッドに位置する。

規模 長軸 0.32 m、短軸 0.31 mを測る。第4号竪穴建物跡床面からの深さは0.27 m。

概要 平面形は円形である。第4号竪穴建物跡内でP3と重複して検出し、棺身は床面より下位で確認された。棺身は正位に設置されている。棺蓋は棺身口縁部の周囲で検出された。壺の下半部片を逆さにしていたと考えられる。棺内部に遺物は確認されなかった。

遺物(第57図、第18表) 弥生土器壺、甕が出土した。

1は弥生土器甕で、棺身として使用されていた。口端に刻みを巡らし、口縁部から胴中部までR.L.単節縄文を施している。2は壺であり、棺蓋として使用されていた。底部を欠く胴下部片であるが、無文であり、縦・斜位のナデにより調整されている。

重複 第4号竪穴建物跡と同時期、P4より新しい。

時期 弥生時代中期後半以降

4 溝跡

第1号溝跡(第58図)

位置 183-150・151 グリッドに位置する。

規模 検出長 5.58 m、幅 0.6 mを測る。確認面からの深さは0.09 m。断面は船底形状。主軸方向はN-24°-E。

概要 北東から南西方向へ流れる溝跡である。第1号竪穴建物跡と第2号周溝墓と重複する。確認面での掘方は浅く、北側は第1号竪穴建物跡上で途切れ、南側は第2号周溝墓南西溝上で途切れる。覆土は単層であるが、自然埋没と考えられる。遺物は検出されなかった。

重複 第1号竪穴建物跡と第2号周溝墓と重複し、本遺構は第1号竪穴建物跡及び第2号周溝墓より新しい。

時期 古墳時代前期以降

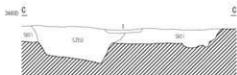
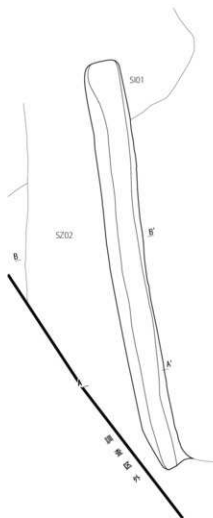
第2号溝跡(第58図)

位置 171-141・142 グリッドに位置する。

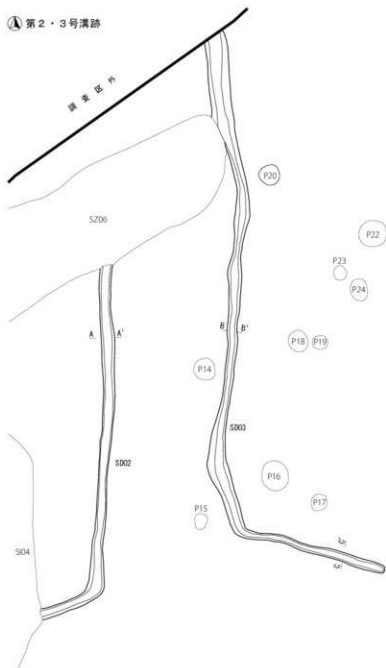
規模 検出長 61.2 m、幅 0.18 mを測る。確認面からの深さ 0.12 m。断面は丸底形状。主軸方向はN-3°-EからN-67°-Eに変化する。

概要 南北方向から屈曲して西南方向へ流れる溝跡である。第4号竪穴建物跡と第6号周溝墓と重複する。確認面での掘方は幅狭かつ底浅であり、北側は第6号周溝墓南西溝に切れ、西側は第4号竪穴建物跡に切られる。覆土は単層であるが、自然埋没と考えられる。本遺構は溝形状を示しているが、溝跡の特徴、第1・2号竪穴建物跡の検出状況、弥生時代である第4号竪穴建物跡に縄文時代晩期の遺物が

第 1 号溝跡



第 2・3 号溝跡



第 1 号溝跡 土層説明

1. 2. 014/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含

第 2 号溝跡 土層説明

1. 2. 014/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含 灰黄色 γ 7.75 mm 少量含

第 3 号溝跡 土層説明

1. 2. 014/1 黄灰色粘質土 酸化鉄-灰黄色 γ 7.75 mm 含



第 58 图 第 1 ~ 3 号溝跡

第2号溝跡



第3号溝跡



第59図 第2・3号溝跡出土遺物

第19表 第2・3号溝跡出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
2-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	EK	外面：浅黄褐色 内面：じぶい黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 肌製土器 摩耗顯著
2-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	EK	外面：じぶい黄褐色 内面：じぶい黄褐色	C	胴部片	摩耗顯著
2-3	土製品 円盤	-	-	-	SK	外面：褐色 内面：黒褐色	C	胴部	摩耗顯著 長軸3.1cm 短軸3.0cm 厚み0.7cm 土器の無文部分を転用
3-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABTN	外面：じぶい黄褐色 内面：赤褐色	B	口縁部片	縦筋安定式
3-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	BBTN	外面：黒褐色 内面：じぶい黄褐色	C	口縁部片	摩耗顯著
3-3	土製品 円盤				SK	外面：黒褐色 内面：浅黄褐色	C	円盤	摩耗顯著 長軸4.0cm 短軸3.0cm 厚み0.95cm 土器の無文部分を転用

混入していること、重複遺構の新旧関係等を勘案すると、縄文時代晩期とみられる竪穴建物跡の壁周溝である可能性がある。

遺物（第59図、第19表） 縄文土器深鉢、土製円盤が出土した。

1・2は縄文土器深鉢であり、1は僅かに外形する無文の口縁部片、2は胴部片で弧を描く沈線が施される。3は無文の土器を転用した土製円盤である。

重複 第4号竪穴建物跡、第6号周溝墓と重複し、本遺構は第4号竪穴建物跡及び第6号周溝墓より古い。

時期 縄文時代晩期前半

第3号溝跡（第58図）

位置 170・171-140・141・142 グリッドに位置する。

規模 検出長 10.38 m、幅 0.15～0.33 mを測る。確認面からの深さ 0.06 m。断面は平底形状。主軸方向はN-2°-Eから、N-75°-Wに変化する。

概要 南北方向から屈曲して東南方向へ流れる溝跡である。第6号周溝墓と重複する。確認面での掘方は幅狭かつ底浅であり、北側は調査区外となり、東側は途切れる。覆土は単層であるが、自然埋没と考えられる。本遺構は溝形状を示しているが、溝跡の特徴、第1・2号竪穴建物跡の検出状況、本遺構から縄文時代晩期の遺物が出土していること、重複遺構の新旧関係等を勘案すると、縄文時代晩期とみられる竪穴建物跡の壁周溝である可能性がある。

遺物（第59図、第19表） 縄文土器深鉢、土製円盤が出土した。

1・2は縄文土器深鉢の胴部片であり、1は安行3c・d式とみられ、横位の沈線より上部に弧線、下部に斜位の沈線が施される。2は胴部片で横位の沈線が施される。3は無文の土器を転用した土製円盤である。

重複 第6号周溝墓と重複し、本遺構は第6号周溝墓より古い。

時期 縄文時代晩期前半

5 土坑

第1号土坑（第60図）

位置 182-150 グリッドに位置する。

規模 検出長 1.08 m、幅 0.66 m を測る。確認面からの深さ 0.12 ~ 0.30 m。主軸方向は N - 28° - E。

概要 平面形状は長方形を呈する。断面形状は箱形を呈し、鋭角に立ち上がる。底面は平坦であり、ピット状の落ち込みがみられた。覆土は一括埋没であるが、炭化物・焼土が混入しており人為的である可能性がある。

遺物（第61図、第20表） 縄文土器片、磨石が出土した。いずれも流れ込みと考えられる。

1-1 は縄文土器の底部片。1-2 は閃緑岩製の磨石である。

重複 第2号方形周溝墓と重複するが、新旧関係は不明である。

時期 時期不明

第2号土坑（第60図）

位置 182-150 グリッドに位置する。

規模 検出長 1.44 m、幅 0.72 m を測る。確認面からの深さ 0.18 ~ 0.60 m。断面は平底形状。主軸方向は N - 9° - W

概要 平面形状は長方形を呈する。断面形状は箱形を呈し、鋭角に立ち上がる。底面は平坦であり、ピット状の落ち込みがみられた。覆土は一括埋没であるが、炭化物・焼土が混入しており人為的な埋没である可能性がある。

遺物（第61図、第20表） 縄文土器深鉢、磨石が出土した。いずれも流れ込みと考えられる。

2-1 は安行 3 c または 3 d 式の深鉢、2 は無文の胴部片。2-3 は閃緑岩製の磨石である。

重複 第2号方形周溝墓と重複するが、新旧関係は不明である。

時期 時期不明

第3号土坑（第60図）

位置 181-149 グリッドに位置する。

規模 検出長 1.02 m、幅 0.54 m を測る。確認面からの深さ 0.06 m。断面は平底形状。主軸方向は N - 65.5° - W。

概要 平面形状は楕円形を呈する。断面形状は逆台形を呈し、やや鋭角に立ち上がる。底面は平坦である。覆土は単層であるが、混入物がないため自然埋没とみられる。第2号堅穴建物跡と重複する。

遺物（第61図、第20表） 縄文土器深鉢が出土した。

曾谷式から安行 1 式に伴う粗製土器であり、3-1 は口縁部片、3-2 は胴部片である。

重複 第2号堅穴建物跡と重複し、本遺構が第2号堅穴建物跡より新しい。

時期 縄文時代後期後半以降

第4号土坑（第60図）

位置 181-149 グリッドに位置する。

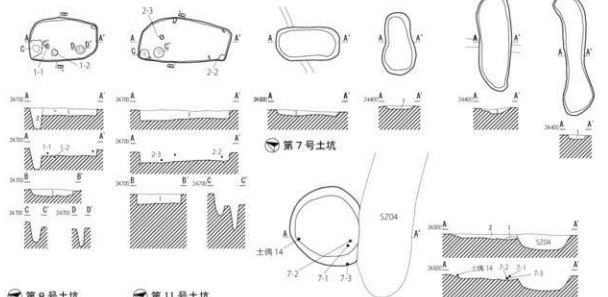
規模 検出長 0.96 m、幅 0.54 m を測る。確認面からの深さ 0.06 m。断面は平底形状。主軸方向は N - 46° - W。

概要 平面形状はやや不整形な楕円形を呈する。断面形状は逆 U 字形を呈し、緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。覆土は一括埋没であるが、ブロックが混入しており人為的である可能性がある。遺物は検出されなかった。

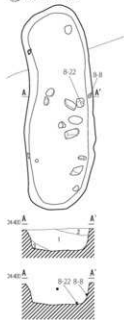
重複 第2号堅穴建物跡と重複し、本遺構が第2号堅穴建物跡より新しい。

時期 縄文時代後期後半以降

第 1 号土坑 第 2 号土坑 第 3 号土坑 第 4 号土坑 第 5 号土坑 第 6 号土坑



第 8 号土坑



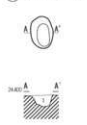
第 11 号土坑



第 9 号土坑



第 10 号土坑



第 12 号土坑



第 13 号土坑



第 14 号土坑



第 15 号土坑



第 16 号土坑



第 1 号土坑 土层说明

1. 10T84/1 棕灰色粘质土 酸化铁含 炭化物-堆土微量含
2. 2.5V4/1 黑褐色粘质土 酸化铁-炭化物含 浅黄色 γ +72 mm含

第 2 号土坑 土层说明

1. 10T84/1 棕灰色粘质土 酸化铁含 炭化物-堆土微量含

第 3 号土坑 土层说明

1. 10T2/1 黑色粘质土 酸化铁多量含

第 4 号土坑 土层说明

1. N/2 黑色粘质土 酸化铁含 灰白色 γ +75 mm多量含

第 5 号土坑 土层说明

1. 10T2/1 黑色粘质土 酸化铁多量含

第 6 号土坑 土层说明

1. 10T2/1 黑色粘质土 酸化铁多量含

第 7 号土坑 土层说明

1. 3T6/1 灰色粘质土 酸化铁含
2. 2.5V4/1 灰色粘质土 酸化铁-堆土微量含 炭化物含

第 8 号土坑 土层说明

1. 10T82/1 黑色粘质土 酸化铁含 炭化物微量含 黄褐色土微含
2. 10T82/1 黑色粘质土 酸化铁含 炭化物微量含 黄褐色土 γ +75 mm含
3. 2.5V3/1 黑褐色粘质土 酸化铁微量含 黄褐色土 γ +75 mm含

第 9 号土坑 土层说明

1. 2.5V4/1 灰色粘质土 酸化铁含
2. 10T83/1 黑褐色粘质土 酸化铁含

第 10 号土坑 土层说明

1. 5T2/1 黑色粘质土 酸化铁含

第 11 号土坑 土层说明

1. 5T2/1 黑色粘质土 酸化铁含

第 12 号土坑 土层说明

1. 2.5V4/1 灰灰色粘质土 酸化铁含
2. 10T83/1 黑褐色粘质土 酸化铁含

第 13 号土坑 土层说明

1. 2.50V6/1 灰-7 灰色粘质土 酸化铁含
2. 7.5V4/1 灰色粘质土 酸化铁-炭化物-堆土含

第 14 号土坑 土层说明

1. 2.5V4/1 黑褐色粘质土 酸化铁含 浅黄色 γ +75 mm含
2. 2.5V4/1 灰灰色粘质土 酸化铁含

第 15 号土坑 土层说明

1. 2.5V4/1 黑褐色粘质土 酸化铁-炭化物含

第 16 号土坑 土层说明

1. 2.5V3/1 黑褐色粘质土 酸化铁含
2. 2.5V4/1 灰灰色粘质土 酸化铁含 浅黄色 γ +75 mm含



第 60 图 第 1~16 号土坑

第5号土坑(第60図)

位置 180-149・150グリッドに位置する。

規模 検出長1.56m、幅0.54mを測る。確認面からの深さ0.06m。断面は平底形状。主軸方向はN-6°-W。

概要 平面形状はやや不整形な楕円形を呈する。断面形状は逆U字形を呈し、なだらかに立ち上がる。底面は凹凸がある。覆土は単層であるが、混入物がないため自然埋没とみられる。第2号竪穴建物跡と重複する。遺物は検出されなかった。

重複 第2号竪穴建物跡と重複し、本遺構が第2号竪穴建物跡より新しい。

時期 縄文時代後期後半以降

第6号土坑(第60図)

位置 180・181-149グリッドに位置する。

規模 検出長1.92m、幅0.48mを測る。確認面からの深さ0.06m。断面は平底形状。主軸方向はN-29.5°-W。

概要 平面形状は南北に長く不整形な楕円形を呈する。断面形状は逆台形を呈し、やや鋭角に立ち上がる。底面は平坦である。覆土は単層であるが、混入物がないため自然埋没とみられる。

遺物(第61図、第20表) 縄文土器深鉢が出土した。

曾谷式から安行1式に伴う無文土器であり、6-1、2とも口縁部片である。

重複 第2号竪穴建物跡と重複し、本遺構が第2号竪穴建物跡より新しい。

時期 縄文時代後期後半以降

第7号土坑(第60図)

位置 177-146グリッドに位置する。

規模 検出長1.32m、幅1.20mを測る。確認面からの深さ0.06m。断面は平底形状。主軸方向はN-44°-W。

概要 平面形状は円形を呈する。断面形状は逆台形を呈し、なだらかに立ち上がる。底面は平坦である。覆土はレンズ状堆積であり、自然埋没と考えられる。第4号周溝墓北溝と重複する。土偶が出土しており、祭祀に係る遺構の可能性はある。

遺物(第61図、第20表、第67図、第23表)

縄文土器深鉢、注口土器、土偶が出土した。

曾谷式から安行1式に伴う時期と思われるが、7-1は紐線文土器深鉢の口縁部片で、7-2は深鉢の無文の胴部片。7-3は注口土器の口縁部片で、口端に4単位の貼付文が付され、縄文が施されている。土偶は11章で後述した。

重複 第4号周溝墓と重複し、本遺構は第4号周溝墓より古い。

時期 縄文時代後期後半

第8号土坑(第60図)

位置 175・176-145グリッドに位置する。

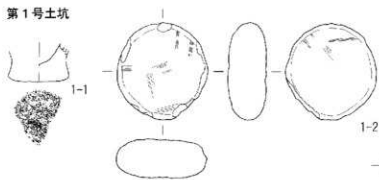
規模 検出長3.24m、幅1.14mを測る。確認面からの深さ0.36m。断面は平底形状。主軸方向はN-76.5°-W。

概要 平面形状は隅丸長方形を呈する。断面形状は逆台形を呈し、鋭角に立ち上がる。底面は平坦である。覆土はレンズ状堆積であり、自然埋没と考えられる。

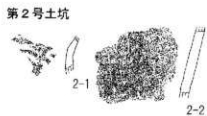
遺物(第61-62図、第20表) 縄文土器深鉢、鉢、底部片等が出土した。

概ね曾谷式から安行2式までの時期に伴うものとみられる。8-1~23は深鉢、鉢の破片である。8-1は波状口縁の波頂部の飾り。8-2、3は口縁部片で、2は外傾して直線的に立ち上がり、3は口端が平坦で内湾しながら立ち上がる形状。8-4~6は胴部片。4は沈線と刺突列が巡る下に斜位の沈線が施される。5は無文で胴部下位の破片。6は沈線による施文。8-7~9は紐線文土器。7は大きな押圧痕が巡る。加曾利B3式とみられる。

第1号土坑



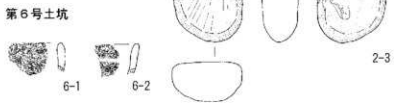
第2号土坑



第3号土坑



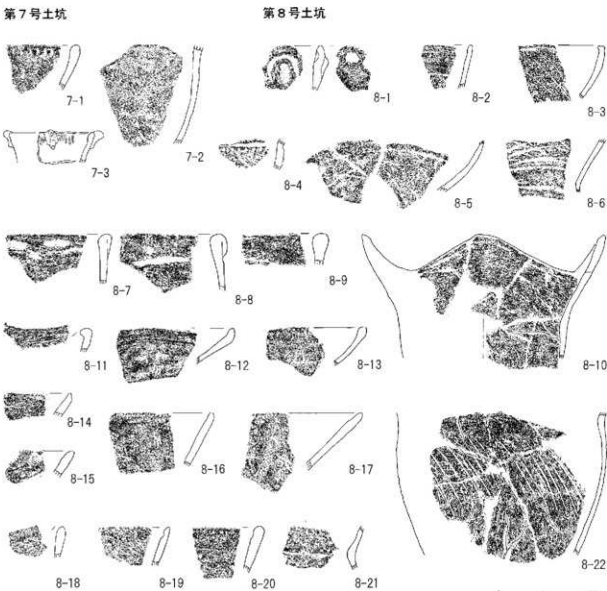
第6号土坑



第7号土坑



第8号土坑



第61图 第1~8号土坑出土遗物

2 1/4

8は内傾する。8-10～20は無文土器。8-10は4単位の波状口縁。8-11～13は口縁部が内湾して立ち上がる形状。8-14～18は口縁部が外傾して直線的に立ち上がる形状。8-19、20は口縁部内面に一条の窪みが巡る。8-21～23は胴部片である。21は中位の括れる箇所。22は中～下位に斜位の沈線が施される。23は大型個体で無文の胴部片。8-24、25は底部片で、底部外面に24は網代痕、25は木葉痕がみられる。

時期 縄文時代後期後半

第9号土坑（第60図）

位置 174・175-145グリッドに位置する。

規模 検出長0.9m、幅0.72mを測る。確認面からの深さ0.06～0.12m。断面は平底形状。主軸方向はN-58°-Eから、N-12°-Eに変化する。

概要 平面形状は円形を呈する。断面形状は箱形を呈し、鋭角に立ち上がる。底面は平坦で、ピット状の掘込がある。覆土は柱穴の痕跡が残っており人為的な埋没とみられる。遺物は検出されなかった。

重複 第1号周溝墓と重複し、本遺構が新しい。

時期 古墳時代前期以降

第10号土坑（第60図）

位置 176-144グリッドに位置する。

規模 検出長0.54m、幅0.48mを測る。確認面からの深さ0.18m。断面は平底形状。主軸方向はN-6°-W。

概要 平面形状は楕円形を呈する。断面形状は逆台形を呈し、やや鋭角に立ち上がる。底面は凹凸がある。覆土は単層であるが、混入物がないため自然埋没とみられる。遺物は検出されなかった。

時期 時期不明

第11号土坑（第60図）

位置 175-144グリッドに位置する。

規模 検出長3.12m、幅0.66mを測る。確認面からの深さ1.32m。断面は平底形状。主軸方向はN-77°-E。

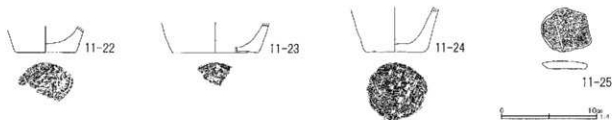
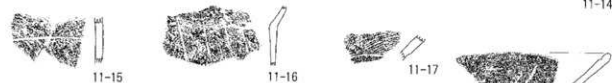
概要 平面形状は細長い長方形を呈する。断面形状は中程で狭まる形状を呈している。底面は平坦であるが、深度が1.3mと深い。覆土は単層であるが、混入物がないため自然埋没とみられる。第1号周溝墓と重複する。本遺構は規模・形状から落とし穴としての使用の可能性がある。

遺物（第62図、第20表） 縄文土器深鉢、鉢、注口土器、釣手土器、底部片、土製円盤等が出土した。

曾谷式に伴う時期が主体とみられる。11-1～6は深鉢の口縁部からの破片で、精製土器とみられる。口縁部が内湾して直立から軽く内傾する形状を呈するが、11-5は内傾が強い。いずれも帯状に沈線と縄文が施される。11-7は注口土器の口縁部片で、軽く外傾する形状。11-8は釣手箇所の破片であり、円形で2単位の穿孔がみられる。11-9は波状口縁深鉢の波長部片で、内外面に沈線により施文される。11-10は粗製土器であり、波状口縁深鉢の口縁部片で、斜格子状に斜位の沈線が交差する。11-11～14、21は鉢の口縁部片。11-11は浅鉢とみられ、僅かに屈曲して外傾し口が開く形状。11-12～14はソロバン玉形状を呈するもの。外傾して開く口縁部は無文で、以下に円形の窪みを起点として垂線、弧線、横線による文様帯の中に縄文が施される。11-21は無文の浅鉢で、口縁部内面に1条の窪みが巡る。11-15～17は胴部片。18は注口土器の口縁部片であるが、口端を欠く。11-19、20は無文の粗製土器深鉢の口縁部片。19は口縁部が肥厚して僅かに内傾する。20は口端が薄くなり僅かに外反する。11-22～24は底部片で、22、24は網代痕がみられる。



第11号土坑



第 62 图 第 8 ~ 11 号土坑出土遺物

11-25は土製円盤であり、粗製土器深鉢の胴部片を素材としており、斜位の沈線がみられる。

重複 第1号周溝墓と重複し、本遺構は第1号周溝墓より古い。

時期 縄文時代後期後半

第12号土坑(第60図)

位置 173・174-142グリッドに位置する。

規模 検出長0.84 m、幅0.66 mを測る。確認面からの深さ0.12～0.30 m。断面は平底形状。主軸方向はN-0°-E。

概要 平面形状は円形を呈する。断面形状は逆台形を呈し、やや緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、ビット状の掘込がある。覆土は柱穴の痕跡が残っており人為的な埋没とみられる。遺物は検出されなかった。

重複 第1号周溝墓と重複し、本遺構が新しい。

時期 古墳時代前期以降

第13号土坑(第60図)

位置 171-142グリッドに位置する。

規模 平面形状は不整形な楕円形を呈する。断面形状は中央がビット上に窪み、端部がやや鋭角に立ち上がる形状を呈する。底面は概ね平坦である。覆土はレンズ状堆積であり、自然埋没と考えられる。遺物は検出されなかった。

時期 時期不明

第14号土坑(第60図)

位置 170-141グリッドに位置する。

規模 検出長1.20 m、幅0.72 mを測る。確認面からの深さ0.12～0.30 m。断面は平底形状。主軸方向はN-59°-E。

概要 平面形状は楕円形を呈する。断面形状は逆台形を呈し、立ち上がりはやや鋭角だが、北側は緩やかである。底面は概ね平坦であり、ビット状

の掘り込みが3基みられる。覆土はブロックを含むことから、人為的なものと考えられる。遺物は検出されなかった。

時期 時期不明

第15号土坑(第60図)

位置 169-138グリッドに位置する。

規模 検出長1.50 m、幅0.48 mを測る。確認面からの深さ0.12 m。断面は平底形状。

概要 南側を一部検出した。北側の大半が調査区外である。平面形状は方形または楕円形を呈するものと推察される。断面形状は逆台形を呈し、立ち上がりはやや緩やかである。底面は平坦である。覆土は単層であるが、混入物がないため自然埋没とみられる。遺物は検出されなかった。

時期 時期不明

第16号土坑(第60図)

位置 168-138グリッドに位置する。

規模 検出長0.78 m、幅0.36 mを測る。確認面からの深さ0.12 m。断面は平底形状。

概要 西側を一部検出した。東側が調査区外である。平面形状は円形を呈するものと推察される。断面形状は逆台形を呈し、立ち上がりはやや鋭角である。底面は平坦である。覆土はレンズ状堆積であり、自然埋没と考えられる。遺物は検出されなかった。

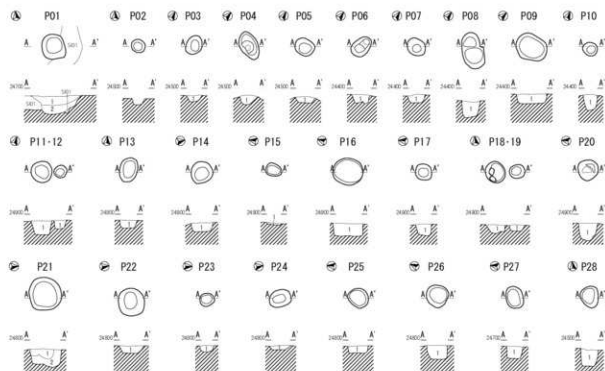
時期 時期不明

第 20 表 土坑出土遺物觀察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1-1	縄文土器 底部	-	(4.0)	6.3	AN	外面：灰黄褐色 内面：明赤褐色	C	底部 20%	摩利観音
1-2	石磨 磨石	備考：四角形製 重量 50g 最大長 10.2 cm 最大幅 9.3 cm 最大厚 4.1 cm (ほぼ完成)							
2-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEJ.JN	外面：灰黄褐色 内面：黒褐色	C	胴部片	後周方文式 摩利観音
2-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEJ.JN	外面：赤褐色 内面：L201黄褐色	C	胴部片	摩利観音
2-3	石磨 磨石	備考：四角形製 重量 394g 最大長 7.8 cm 最大幅 7.4 cm 最大厚 4.0 cm (ほぼ完成)							
3-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADEN	外面：L201黄褐色 内面：L201黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 粗製土器 摩利観音
3-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABCEJN	外面：灰黄褐色 内面：L201黄褐色	C	口縁部片	粗製土器 摩利観音
4-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEJ.N	外面：褐色 内面：褐色	B	口縁部片	平縁口縁 無文土器
4-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	AEJ.N	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	B	胴部片	平縁口縁 無文土器
7-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEJ.K	外面：L201黄褐色 内面：L201褐色	B	口縁部片	平縁口縁 粗製土器
7-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEJ.M	外面：L201褐色 内面：褐色	B	胴部片	
7-3	縄文土器 注口土器	(8.5)	(3.7)	-	ADEN	外面：浅黄褐色 内面：褐色	C	口縁部 30%	平縁口縁 摩利観音
8-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AE	外面：灰黄褐色 内面：L201褐色	C	口縁部片	説次口縁 摩利観音 波切部跡あり
8-2	縄文土器 注口土器	-	-	-	ABEJ.N	外面：L201黄褐色 内面：L201黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 粗製土器 摩利観音
8-3	縄文土器 深鉢	-	-	-	AI	外面：褐色 内面：褐色	B	口縁部片	平縁口縁 粗製土器
8-4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHJ	外面：褐色 内面：褐色	B	胴部片	
8-5	縄文土器 鉢	-	-	-	AMN	外面：灰黄色 内面：黄褐色	C	胴部片	摩利観音
8-6	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHJ	外面：褐色 内面：黄褐色	C	口縁～胴部片	摩利観音
8-7	縄文土器 深鉢	-	-	-	AHJ	外面：赤褐色 内面：黒褐色	B	口縁部片	平縁口縁 加曾村83式 縄文土器
8-8	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADEN	外面：L201黄褐色 内面：灰黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 粗製土器
8-9	縄文土器 深鉢	-	-	-	AI	外面：褐色 内面：黒褐色	B	口縁部片	平縁口縁 粗製土器
8-10	縄文土器 深鉢	(24.4)	(23.0)	-	ADEN	外面：灰黄褐色 内面：L201黄褐色	B	口縁 40%	説次口縁 無文土器
8-11	縄文土器 深鉢	-	-	-	IN	外面：暗褐色 内面：黒褐色	A	口縁部片	説次口縁 無文土器
8-12	縄文土器 深鉢	-	-	-	IK	外面：L201褐色 内面：灰褐色	A	口縁部片	平縁口縁 無文土器
8-13	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADK	外面：褐色 内面：L201褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩利観音
8-14	縄文土器 深鉢	-	-	-	AIK	外面：明赤褐色 内面：褐色	B	口縁部片	平縁口縁 無文土器
8-15	縄文土器 深鉢	-	-	-	KN	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩利観音
8-16	縄文土器 深鉢	-	-	-	IKK	外面：灰黄褐色 内面：L201黄色	B	口縁部片	平縁口縁 無文土器
8-17	縄文土器 鉢	-	-	-	ABEJ.JN	外面：L201褐色 内面：L201黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩利観音
8-18	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADENX	外面：灰黄褐色 内面：L201黄褐色	C	口縁部片	説次口縁 無文土器 摩利観音
8-19	縄文土器 深鉢	-	-	-	N	外面：L201黄褐色 内面：黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩利観音
8-20	縄文土器 深鉢	-	-	-	KN	外面：L201黄褐色 内面：L201黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 無文土器 摩利観音
8-21	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEJ.JN	外面：L201黄褐色 内面：L201黄褐色	C	胴部片	摩利観音
8-22	縄文土器 深鉢	-	(15.0)	-	ADEN	外面：明黄褐色 内面：L201黄褐色	C	胴部片	粗製土器 摩利観音
8-23	縄文土器 深鉢	-	(10.3)	-	ADENX	外面：L201黄褐色 内面：L201黄褐色	C	胴部片 15%	粗製土器 摩利観音
8-24	縄文土器 底部片	-	(1.3)	(6.2)	AI	外面：褐色 内面：灰黄褐色	B	底部 20%	胴代わり
8-25	縄文土器 底部片	-	(5.5)	(3.4)	AIKX	外面：明赤褐色 内面：褐色	B	底部 90%	木屐痕あり
11-1	縄文土器 深鉢	(12.5)	(6.8)	-	AN	外面：L201褐色 内面：灰褐色	B	口縁部 20%	平縁口縁 曾谷・高井式
11-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABCEJ.N	外面：褐色 内面：黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井式
11-3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEJDK	外面：褐色 内面：褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井式
11-4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIK	外面：L201黄褐色 内面：灰黄褐色	C	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井式 摩利観音
11-5	縄文土器 深鉢	(18.5)	(7.3)	-	ADN	外面：黒褐色 内面：暗褐色	C	口縁部 30%	平縁口縁 曾谷・高井式 摩利観音
11-6	縄文土器 深鉢	(22.5)	(6.7)	-	ADEN	外面：灰黄褐色 内面：明黄褐色	C	口縁部 20%	平縁口縁 曾谷・高井式 摩利観音
11-7	縄文土器 注口土器	(15.8)	(6.3)	-	IKN	外面：L201黄褐色 内面：L201黄褐色	C	口縁部 10%	平縁口縁 曾谷・高井式 摩利観音 外面赤色あり
11-8	縄文土器 舟形	-	-	-	AIK	外面：浅褐色 内面：浅褐色	C	舟形部片	摩利観音
11-9	縄文土器 鉢	-	-	-	ABEJ	外面：L201黄褐色 内面：明黄褐色	B	口縁部片	説次口縁 曾谷・高井式
11-10	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHJ.K	外面：暗褐色 内面：暗褐色	B	口縁部片	説次口縁 粗製土器
11-11	縄文土器 鉢	-	-	-	AEJ.N	外面：L201黄褐色 内面：L201黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 曾谷・高井式
11-12	縄文土器 鉢	(14.7)	(6.4)	-	ABEJ.K	外面：褐色 内面：褐色	A	口縁部 20%	平縁口縁 曾谷・高井式
11-13	縄文土器 鉢	(18.2)	(3.4)	-	ADEN	外面：L201黄褐色 内面：L201黄褐色	B	口縁部 10%	平縁口縁 曾谷・高井式
11-14	縄文土器 鉢	-	(4.9)	-	ABEJ.JN	外面：灰黄褐色 内面：褐色	B	胴上部 20%	曾谷・高井式
11-15	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADN	外面：L201褐色 内面：L201黄褐色	B	胴部片	粗製土器 摩利観音
11-16	縄文土器 深鉢	-	-	-	AKN	外面：明褐色 内面：明褐色	C	胴部片	粗製土器 摩利観音
11-17	縄文土器 鉢	-	-	-	IN	外面：L201黄褐色 内面：L201黄褐色	B	胴部片	
11-18	縄文土器 注口土器	-	-	-	ABEJ	外面：L201褐色 内面：L201黄褐色	B	底部 20%	外面赤色あり
11-19	縄文土器 深鉢	-	-	-	AI	外面：L201褐色 内面：褐色	B	口縁部片	説次口縁 粗製土器
11-20	縄文土器 深鉢	-	-	-	AI	外面：L201褐色 内面：明赤褐色	B	口縁部片	平縁口縁 粗製土器 摩利観音
11-21	縄文土器 鉢	-	-	-	ABEJ.N	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	B	口縁部片	平縁口縁 無文土器
11-22	縄文土器 底部	-	6.8	6.5	BHJ	外面：L201黄褐色 内面：L201黄褐色	C	底部 30%	摩利観音 胴代わり
11-23	縄文土器 底部	-	(3.2)	(9.1)	ADENX	外面：L201褐色 内面：褐色	C	底部 15%	摩利観音
11-24	縄文土器 底部	-	(4.8)	(6.5)	ABEJ.K	外面：褐色 内面：L201黄褐色	B	底部 100%	胴代わり
11-25	土製品 舟形				AIN	外面：灰黄褐色 内面：L201黄褐色	C	-	摩利観音 長軸 4.75 cm 短軸 4.5 cm 厚さ 0.75 cm 土器の厚部分を削り

6 ビット (第63図、第21表、出土遺物 第64図、第22表)

ビットは総数28基確認されたが、時期不明なものが大半を占める。計測値等は一覧表にまとめて提示した。遺物は、P7・24・25より出土した。いずれも縄文土器であり、器種は深鉢とみられる。7-1は安行3 a または3 b 式、7-2は安行3 c 式とみられる。24-1は安行3 d 式か。24-2は無文土器の口縁部片。25-1は粗製土器で、口縁部に単沈線が巡る。



P01 土層説明
1. 5Y4/1 灰色粘質土 酸化鉄含
2. 2.5Y2/2 黒褐色粘質土 酸化鉄含

P03 土層説明
1. 10Y2/2 黒褐色粘質土 酸化鉄含

P04 土層説明
1. 10Y2/2 黒褐色粘質土 酸化鉄含

P05 土層説明
1. 10Y2/2 黒褐色粘質土 酸化鉄含

P06 土層説明
1. 10Y2/2 黒褐色粘質土 酸化鉄含

P07 土層説明
1. 10Y2/2 黒褐色粘質土 酸化鉄含

P08 土層説明
1. 5Y4/1 灰色粘質土 酸化鉄含

P09 土層説明
1. 10Y2/2 黒褐色粘質土 酸化鉄含

P10 土層説明
1. 5Y4/1 灰色粘質土 酸化鉄含

P11-12 土層説明
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 酸化鉄含

P13 土層説明
1. 2.5Y2/2 黒褐色粘質土 酸化鉄含

P14 土層説明
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含

P15 土層説明
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含

P16 土層説明
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含

P17 土層説明
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含

P18-19 土層説明
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 酸化鉄含
2. 2.5Y2/2 黒褐色粘質土 酸化鉄含 灰黄色アツツ7.0mm

P20 土層説明
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 酸化鉄含

P21 土層説明
1. 5Y4/1 灰色粘質土 酸化鉄含
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含 灰黄色アツツ5.0mm

P22 土層説明
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含

P23 土層説明
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含

P24 土層説明
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含 灰黄色アツツ5.0mm

P25 土層説明
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含 灰黄色アツツ5.0mm

P26 土層説明
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含 灰化物微量

P27 土層説明
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含

P28 土層説明
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 酸化鉄含 砂粒含



第63図 ビット

第21表 ビット計測表

番号	グリッド	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	備考
P01	182-150	円形	42	42	30	—	第1号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい時期不明
P02	181-150	円形	24	18	9	—	時期不明
P03	173-143	楕円形	30	24	9	—	第1号周溝墓と重複するが、先後関係は不明 時期不明
P04	174-143	円形	48	30	12	—	第1号周溝墓と重複するが、先後関係は不明 時期不明
P05	174-143	円形	30	30	9	—	第1号周溝墓と重複するが、先後関係は不明 時期不明
P06	174-143	楕円形	36	24	12	—	第1号周溝墓と重複するが、先後関係は不明 時期不明
P07	174-143	円形	30	30	12	縄文土器	第1号周溝墓と重複し、本遺構が古い 縄文時代晩期前半
P08	174-143	楕円形	60	36	24	—	第1号周溝墓と重複し、本遺構が新しい 時期不明
P09	174-142	円形	54	42	15	—	第1号周溝墓と重複するが、先後関係は不明 時期不明
P10	173-143	円形	24	24	24	—	第1号周溝墓と重複するが、先後関係は不明 時期不明
P11	172-141	円形	33	33	21	—	時期不明
P12	172-141	円形	21	18	12	—	時期不明
P13	172-141	楕円形	42	27	12	—	時期不明
P14	171-141	円形	36	36	12	—	時期不明
P15	171-141	楕円形	24	18	3	—	時期不明
P16	171-141	円形	46	42	18	—	時期不明
P17	171-141	円形	24	24	18	—	時期不明
P18	171-141	円形	36	30	12	—	時期不明
P19	171-141	円形	24	24	9	—	時期不明
P20	171-140	円形	33	30	27	—	時期不明
P21	170-140	円形	54	54	24	—	時期不明
P22	170-140	楕円形	42	42	12	—	時期不明
P23	170-141	円形	24	24	12	—	時期不明
P24	170-141	楕円形	36	24	6	縄文土器	縄文時代晩期前半
P25	170-141	円形	33	30	12	縄文土器	縄文時代後期か
P26	170-141	円形	36	36	24	—	時期不明
P27	170-141	楕円形	36	27	18	—	時期不明
P28	169-139	楕円形	36	30	24	—	時期不明

P07



P24



P25



第64図 ビット出土遺物

第22表 ビット出土遺物観察表

No.	機種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
7-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ARCIN	外面：茶褐色 内面：灰黄褐色	A	胴部片	飯沼堂行式
7-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ARJIN	外面：茶褐色 内面：にじみ黄褐色	A	胴部片	飯沼堂行式
24-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ARBN	外面：灰褐色 内面：褐色	C	胴部片	飯沼堂行式 摩耗顯著
24-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ARBN	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	C	口縁部片	平緑口縁 縄文土器 摩耗顯著
25-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ARBN	外面：茶褐色 内面：明褐色	B	口縁部片	平緑口縁 製土器

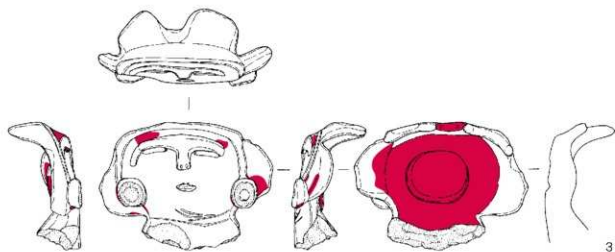
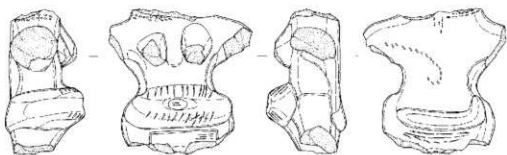
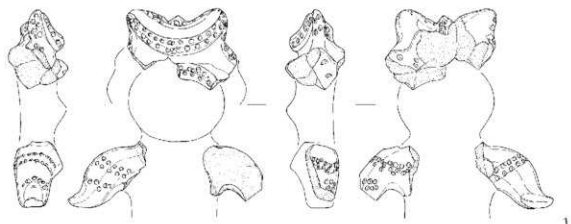
7 土偶 (第65～70図、第23表)

本調査では土偶が51個体出土し、部位が判然としない細片を除き全て図示した。新規荒川扇状地上では、特筆すべき出土量であり、特に項を設けてまとめることとした。検出場所は調査区に広がる遺物包含層が主体であり、詳細は今後に刊行予定の報告書に併せて記載する。土偶の時期をみると、縄文時代後期中葉から晩期中葉にかけて段階的に確認され、後期後葉にあたる土偶が多い。部位別の点数は、頭部が残るもの13点、体部が残るもの11点、剥落した乳房1点、右肩～腕が残るもの11点、左肩～腕が残るもの12点、左右不明な腕部1点、右脚が残るもの7点、左脚が残るもの7点である。

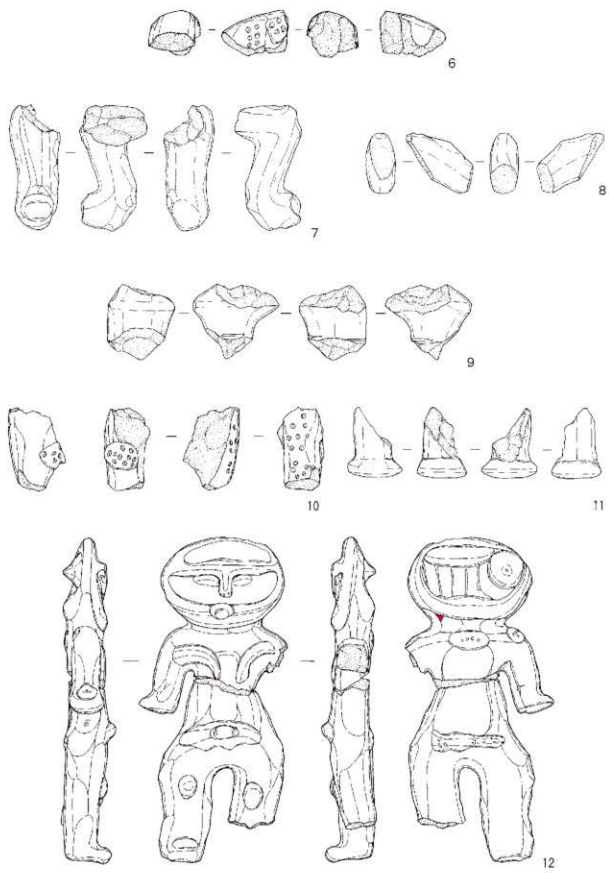
1～11は後期中～後葉初頭とみられる土偶、12～46は後期後葉とみられる土偶、47～51は晩期前～中葉とみられる土偶である。

1は頭頂部と両腕の破片で、左腕は表面と下半部を欠く。頭部装飾、両腕に円形刺突により施文される。後期中葉の土偶と考えられる。2は体部の破片で頭部、両腕、両脚を欠く。乳房は先端が欠けているが、腹部とともに豊かに表現されている。また、臀部の膨らみは隆帯で表現されている。後期中葉の土偶と考えられる。3は頭部で、赤彩が施されている。全体のつくりは薄く、頭頂部は後方にせり出している。眉と鼻はT字状で、目は眉の下部に細い沈線で、口は小さなくぼみで表現され、額の部分から耳飾りにかけ、かすかな隆帯で輪郭を形づくる。アゴの部分には細沈線が施されている。耳飾りをもち、後頭部の中央には径3cmほどの円形の瘤が付けられる。このような形状から加曾利B式末から曾谷式初期の土偶と考えられる。4は左肩から左胸までの破片。肩部は前・背面ともに円形文が施される。粘土芯を2本軸にして整形されている。5は左肩の破片。残存部は無文。背面は後世金属製のもので割られたキズが残る。6は右肩の破片で円形の刺突で装飾されている。7は右腕の破片。無文である。珍しく腕先が円形のままである。8は左腕とみられる無文の破片。9は右側腰部の破片。脚部に細かくて浅い沈線がめぐっていた痕跡がみられた。10・11は右脚の破片。10は円形の刺突で装飾されている。11は残存部が無文。足の左右幅2.6cm、足の前後長2.9cm。

12～14は、乳房の表現や背面の貼付文の状況から、13→14→12の順で新しくなるものと考えられる。12は全身が残るものの左腕と左脚の下半を欠き、胴部中央で割れて出土している。顔の輪郭と後頭部の輪郭を微隆起で表現し、眉と鼻は顔の輪郭の取り込まれるような形でT字状をなし、額の部分が明瞭である。眼は不鮮明だが眉の下にわずかな凹みで表現される。肩と背部中央には細い沈線が入るかすかな隆起。乳房、腹部は隆帯で表現され、腹部の隆帯中央には凹みでへソ状の表現がされる。後頭部は細い沈線が入り、右端には円錐状の突起が付けられる。膝にも円形の突起が付く。かすかに赤彩痕が残っており、本来は全体に赤彩が施されていたと考えられる。曾谷式に伴う土偶である。13は四肢を欠く土偶で、顔面や胸部の表現に後期中葉の土偶の様相を残すが、後頭部の三日月型の隆帯から曾谷式に伴う土偶と考えられる。14は上半身の破片で、右腕、右胸、後頭部のコブが剥落する。各所に赤彩痕がみられ、全体が赤彩されていたと考えられる。腕～乳房、頭部背面、背中のコブを含む背面に腕まで微細な刺突が施される。15は腹部以下及び左半身、腕を欠き、縦半分に割れている。頭部と胸部の粘土に継ぎ目が見られず、棒状の粘土2本を左右にならべ核にして整形されたと考えられる。細部の表現は消極的になり、耳の表現あるが貫通せず、楕円形の粘土を貼りつけ、中心に沈線で、口は円形の凹

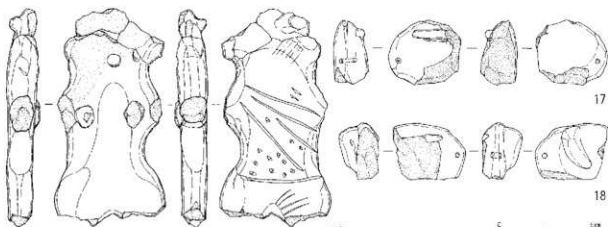
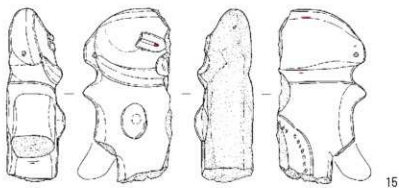
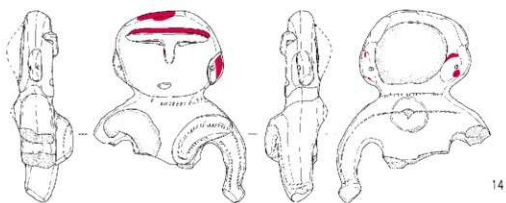
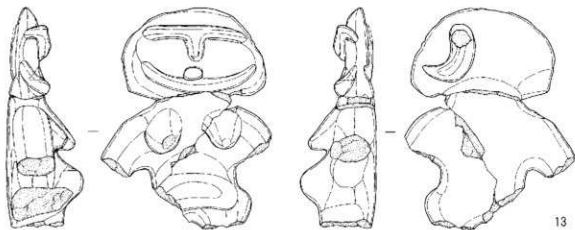


第 65 图 土偶 1



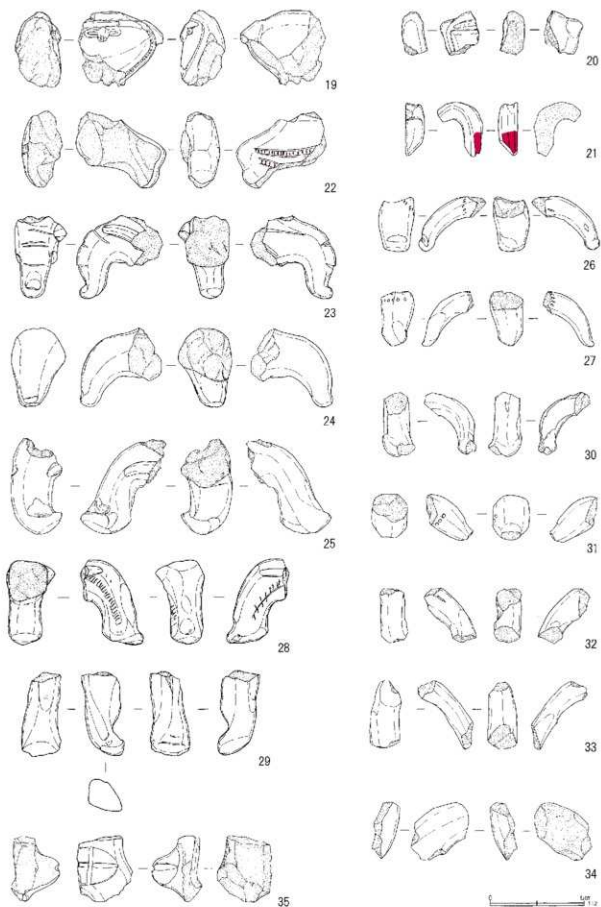
第 66 图 土偶 2



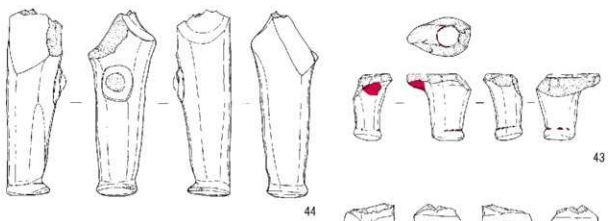
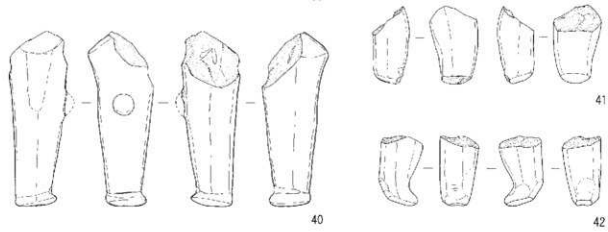
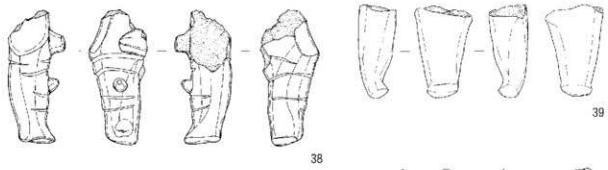
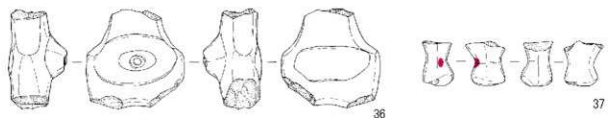


16
第 67 图 土偶 3





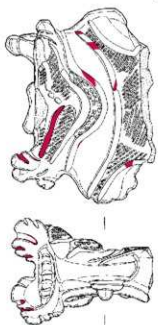
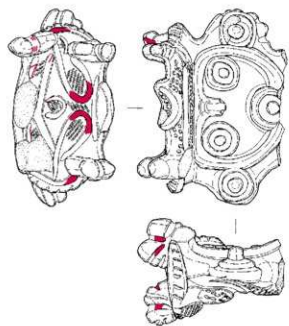
第 68 图 土偶 4



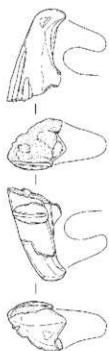
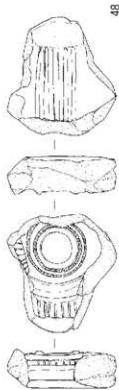
第 69 图 土偶 5

みで、乳房は楕円形の薄い膨らみで表現される。背面には細沈線及び併走する刺突が施される。背面に数か所赤彩の痕跡が残っており、全体に赤彩が施されていたと考えられる。16は頭頂部と四肢を欠く。扁平で、つくりも粗雑である。顔面は剥落しているが、口の凹みは残る。口の下部から腹部中央に向けてかすかに窪む。正面は無文。背面は斜行する沈線と粗い刺突が施される。腰部を画する横位の沈線及び臀部にかすかな細沈線が確認される。胴部の中央がわずかに窪むことや乳房の表現などから曾谷式に伴う土偶の一例と考えられる。17は頭部右半分の破片。横長の顔面とみられ、眉は隆帯で表現され、眼は眉直下の僅かな沈線である。18は頭部左半分の破片で右側頭部及び顔面を欠く。後頭部に三ヶ月型の突起。19は頭部の破片で左側及び口部以下を欠く。眉と鼻が繋がってT字に、目が横長の楕円に、隆帯により表現される。顔面眉以下を刻みの入る細い隆帯が輪郭を巡る。20は右頭部の破片である。21は左乳房の貼付が剥落した破片で赤彩が残る。22は左肩の破片で背面のみ残存する。平行沈線が施され、沈線内には刻み。刻みの内部には、赤彩痕が残る。23～27は右腕の破片。23は肩から中央に向けて施された隆帯は乳房表現。上腕部には細い沈線が入り、背面に横走する沈線が入る。24は前面の腕付け根が若干膨らむ。残存部は無文。25の残存部は無文。右腕につく貼付は乳房表現の一部で抽象化が進んでいる。曾谷式段階でも新しいものか。26は肩の付け根に刺突が、27は肩部に刺突列が施される。28～33左腕の破片。28は正面に乳房へと続く隆帯の痕跡みられ、腕正面には爪形状の細かい文様が入る。背面肩部にはかすかな隆帯状の文様が横走する。肩から腕先にかけて細い沈線と細かい爪形文が入る。整形は全体的に粗雑である。29は無文で整形が粗雑である。腕の断面形は不呈の菱形である。30は無文で整形が粗雑である。背面には新しいキズが見られる。31は前面に刺突。32は無文で整形が粗雑である。33は無文。34は腕とみられる前面のみの破片。35は左側腹部の破片。腹部に沈線で施文され、背面を欠く。36は胴下半部の破片。腹部は中央にへそ状の表現がされる貼付がなされ、臀部にも薄い貼付がみられる。表面は摩耗がはげしいが、無文と思われる。37～40は右脚の破片。37は無文だが、赤彩痕がみられる。38は右脚で腹部に楕円の貼付で表現される。膝部の突起も貼付である。39は無文。40は膝の貼付が剥落している。残存部は無文である。41～46は左脚の破片。41・42は無文。43は足首に小さな刺突がめぐる。刺突内股部に赤彩痕がみられ、赤彩の痕跡は剥離面にもみられる。この痕跡はある程度生乾きの状況で脚部と胴部を接合する前に赤彩された可能性が大きい。44は無文。膝の部分の円形突起は先端を欠く。45は横走する沈線による施文。膝は貼付による円形突起。46は2点の窪みが上下にみられ、脚の内側とした。後期から晩期の破片と捉えておきたい。

47はミミツク土偶の頭部である。眉と鼻はT字状に表現され、顔の輪郭は眉の両端と一体になる。目と口は円形の二重突起で表現される。額部は、眉の直上から上方に広がるように頭頂部に移行し、平らな頭頂部の中央および左右の前後端に結髪状の突起が付けられる。耳飾りは、円形の突起の中央にさらに突起を付けて表現される。額部および後頭部の結髪直下には、円形刺突で装飾された隆帯がつく。頭頂部と後頭部には磨消縄文(RL)がほどこされている。なお、頭頂部および後頭部の沈線内には赤彩痕が残っており、全体に赤彩が施されていたと思われる。48はミミツク土偶の頭部のうち右目付近の破片である。眼は浅いくぼみで表現される。眼の周囲は刺突列が2重に施される。顔の輪郭の一部と眉の一部が残る。顔の外側及び背面には結髪表現が見られるが、表面の摩耗が激しく鮮明ではない。49は右肩の破片で、ミミツク土偶の可能性がある。肩前面の楕円形の貼付文は乳房を表現した可能性があ

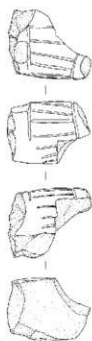
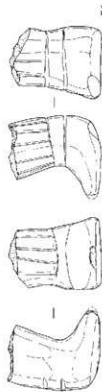


47



48

49



51

50



第 70 圖 土偶 6

る。背面肩部には2条の沈線がみられた。50は左側腰部の破片で、I字文を持つ土偶である。横走する2条の沈線間に縦位の細沈線が数条施される。51は左脚でI字文土偶である。50・51ともI字文土偶の中では新しい様相を示す。

今回の調査では、51個体の土偶が出土している。時期判定が可能な土偶49個体のうち、46点が後期中葉から末葉にかけてのものであり、後期中葉に属する土偶が10点、曾谷式期に伴う土偶が34点、後期末のものが2点と、後期土偶中、曾谷式期の土偶が74パーセントを占める。晩期のものは、安行3a式期のミミツク土偶が1点と安行3d式期のI字文土偶が2点の計3点である。出土土偶全体でも、曾谷式期の土偶が69パーセントを占めている。大半が包含層からの出土で、土器の出土量も同様の傾向を示している。

また、65図3、67図14、69図43などの土偶には赤彩痕が明瞭に残るが、これらの他にも曾谷式期の土偶に赤彩の痕が残っているものが比較的多く見られる。土偶の赤彩は、後期後葉から晩期中葉のミミツク土偶に多く認められる特徴であるが、曾谷式期に赤彩痕が観察できる土偶が多いことは、この時期以降、土偶に赤彩が施される傾向が顕著になったことを示す好資料といえる。さらに製作技法の面からも、この時期の当地域の土偶の傾向を知るうえで貴重な資料であると云える。

第23表 土偶観察表

No.	部位	時期	出土位置	現存高	最大幅	最大厚	胎土	色調	焼成
1	後期土偶頭部と両腕	加曾利B3式期小	175-186	10.5	10.2	8.1	滑	赤褐色	良好
2	後期土偶腰部	加曾利B3式期	179-177G	7.7	7.6	4.2	粗い砂粒を多数に含む	赤褐色	真
3	後期土偶脚部	加曾利B3式期または前期の曾谷式期	180-186G	6.7	9.2		滑 砂粒を若干含む	褐色は深い灰色全体に赤彩が施される。	ややもろい
4	後期土偶左肩	加曾利B3式期	182-186G	4.4	4.2	2.0	やや粗い	黄褐色	良好
5	後期土偶左肩	後期中葉～後葉	181-186G	3.2	3.2	2.0	粗	暗褐色	真
6	後期土偶右肩小	後期中葉	175-186G	1.9	3.0	2.7	滑 砂粒をほぼ含まない	黄褐色	もろい
7	後期土偶右腕	加曾利B3式期	169-141-142B	6.6	3.5	2.1	滑 砂粒多し	暗褐色	良好
8	後期土偶左腕小	後期中葉～後葉小	一匹	3.2	0.5	1.5	やや粗	緑褐色	やや良好
9	土偶右腕脚部	後期中葉小	一匹	4.0	4.6	3.5	滑	暗黄褐色	良好
10	後期土偶右腕小	後期中葉	175-186G	4.4	2.3	3.1	滑 砂粒少ない	赤褐色	良好
11	後期土偶右脚	後期中葉小	181-186G	3.7			滑	暗黄褐色	良好
12	後期土偶左腕、左脚を欠く	曾谷式期	182-186G	17.2	7.9	2.9	粗い砂粒多し	暗褐色 赤彩痕がわずかに残る。	ややもろい
13	後期後葉土偶	曾谷式期	178-186G	11.7	9.1	4.0	粗 砂粒多し	赤褐色	真
14	後期後葉土偶	曾谷式期	5B07	10.1	6.0	2.8	滑 砂粒を若干含む	明るい褐色 赤彩痕	良好
15	後期土偶右半身	曾谷式期	5103	9.3	4.6	2.7	粗 径1～2mmの長石、石英などが多く混ざる。	暗褐色 背面に数箇所赤彩が残る。	良好
16	後期土偶	曾谷式期	181-177G	11.5	5.9	1.5	粗い砂粒多し	暗褐色	もろい
17	後期土偶脚部	曾谷式期	182-186G	3.4	3.8	1.9	滑	暗黄褐色土	良好
18	後期土偶脚部	曾谷式期	182-186G	3.0	3.8	2.1	滑	灰褐色	良好

No.	部位	時期	出土位置	現存高	最大幅	最大厚	胎土	色調	焼成
19	後周土俵西端部	曾谷式期	175-144G	4.0	4.5	2.4	滑 白色砂粒多く混ざる	赤褐色	良好
20	後周土俵右端部	曾谷式期小	175-144G	1.8	2.1	0.9	滑	赤褐色	良好
21	後周土俵の石丸部	曾谷式期	182・183・149G	2.9	2.4	1.0	滑 砂粒多し	暗黄褐色	良好
22	後周土俵右側	曾谷式期	182・148G	4.0	4.8	2.1	滑 砂粒多く混る	地色は灰黄褐色 本底は赤鉄色していた。	良好
23	後周土俵右側	曾谷式期	一區	4.5	4.6	2.8	粗い 砂粒多し	暗褐色	良好
24	後周土俵右側	曾谷式期	S103	4.2	4.3	2.8	滑	赤褐色	良好
25	後周土俵右側	曾谷式期	182・148G	3.1	4.5	2.7	粗 砂粒多く混ざる	黄褐色	良好
26	後周土俵右側	曾谷式期	179-147G	2.9	3.6	1.9	滑	黄褐色	良好
27	後周土俵右側	-	180-147G	2.9	2.8	1.8	滑	明暗褐色	良好
28	後周土俵左側	曾谷式期	176-147G	4.5	3.4	2.6	滑 砂粒はほとんど含まず。	黄褐色。赤鉄斑残る。	良好
29	後周土俵左側	曾谷式期	179-146G	4.5	2.3	2.1	粗 砂粒多し	暗褐色	良好
30	後周土俵左側	曾谷式期	179-147G	3.3	2.7	1.7	滑	暗褐色	良好
31	後周土俵左側	曾谷式期	S107	2.4	2.5	1.9	滑	暗赤褐色	良好
32	後周土俵左側	曾谷式期小	180-147G	2.9	2.8	1.4	滑 砂粒混る	肌褐色	良好
33	後周土俵左側小	曾谷式期	180-147G	3.6	3.0	1.6	滑 砂粒多し	明暗褐色	良好
34	後周土俵の側小	おそらく後周 曾谷式期小	S204	3.1	3.1	1.2	滑 砂粒多く含む	暗赤褐色	
35	後周土俵左側部	曾谷式期	178-146G	3.5	3.0	2.7	滑	暗褐色	良好
36	後周土俵側下半部	曾谷式期	180-148G	5.3	5.2	3.1	粗 砂粒多し	暗褐色	やや良
37	後周土俵右側	曾谷式期	179-147G	2.4	2.1	1.7	滑	暗褐色	良好
38	後周土俵右側	曾谷式期	179-147G	7.3	3.2	2.3	滑 砂粒含む	茶褐色	
39	後周土俵右側	曾谷式期	176-145G	5.0	3.1	2.1	滑 砂粒混る	黄褐色～灰黄褐色	良好
40	後周土俵右側	曾谷式期	S103	9.3	3.1	3.0	滑 微砂粒（白色）混ざる	暗褐色	やや良
41	後周土俵右側	曾谷式期	181-147G	4.2	2.6	1.9	滑 砂粒多く混ざる	灰黄褐色	良好
42	後周土俵右側	曾谷式期	175-146G	3.7	2.1	2.3	粗 砂粒多し	暗黄褐色～灰褐色	良好
43	後周土俵右側	曾谷式期	177-146G	3.53	3.40	1.60	滑 砂粒（長石）多く含む	明褐色	良好
44	後周土俵右側	曾谷式期	178-146G	10.0	3.7	3.0	細密 砂粒の含有量少ない	赤褐色	良好
45	後周土俵右側	曾谷式期	179-147G	5.0	3.5	2.4	滑 砂粒を若干含む	茶褐色	良好
46	土俵右側	後周～前期小	175-146G	4.6	2.5	2.2	滑	暗褐色	良好
47	ミヅナ土俵西端部	実行3期式期	181-149G	7.8	10.3	5.6	滑 砂粒（長石）僅かに含む	暗褐色。赤鉄斑	良好
48	ミヅナ土俵右目	実行2期式期	一區	5.8	6.3	2.0	滑 砂粒は微小	暗褐色。部分的に赤色の粘土がこる。	不良
49	後周土俵右側部	後周末	一區	2.8	4.9	2.7	滑 白色砂粒目立つ	茶色	良好
50	後周土俵左側部	実行3期式期	S104	4.40	3.7	3.30	やや粗 砂粒（長石類）多く含む	暗褐色	良好
51	後周土俵左側	実行3期式期	169-141・142G	4.9	3.8	2.8	滑	赤褐色	やや良 表面の磨耗が激しい

V 調査のまとめ

縄文時代後・晩期について

遺物包含層は溝状の窪地に堆積した土層であり、遺物が大量に含まれていた。環状盛土遺構の存在について、検討はしてみたものの、前述のとおり調査区は確認面の土層まで攪乱が著しく、平面的な確認はできず、調査区壁での土層断面の確認にも限界があった。状況として、縄文土器は確認面より上位からの出土がほぼみられなかったこと、遺物包含層は溝状の窪地に沿って形成されていたことから、現状では確認できなかつたとしておきたい。

遺構は第1・2号竪穴建物跡が同じ軸方向かつ同規模で平行する位置関係で検出された。第3号竪穴建物跡は形状は崩れているものの規模が大きい。出土遺物の内容は深鉢が大半だが、祭祀遺物が多分に含まれており、炉跡が確認されたことから、単なる住居跡ではない可能性がある。本遺跡東側に所在する諏訪木遺跡から同時期にあたる後期後半から晩期中頃までの遺物が確認されていたが、新たに当該期の痕跡が本遺跡により西側へ広がったことは成果といえよう。

第1号周溝墓について

第1号周溝墓は、平面形が前方後方形を呈する古墳時代前期の周溝墓である。遺構確認面からの周溝掘方は全体的には浅いが、前方部と後方部の境にあたる括れる箇所を両側に最深部があり、前方部を明確に造り出す意図がうかがえる。盛土は大部分が崩落・流出しており、周溝覆土中に確認された。おそらく、河川の氾濫等により押し流されたものと推測する。主体部とみられる土坑は3箇所検出したが、SK1・2は土壌がグライ化により変色し、明確な掘方としての見極めが困難で、検出状況は不良であった。検出位置は後方部の中央であり、位置的には良い箇所である。出土遺物は包含層由来のものであり、明確な相伴遺物は見受けられなかった。覆土には骨片が含まれていたが、阿部常樹氏に実見いただいたところ、シカとイノシシの四肢骨の可能性を御指摘いただいた。また、梶ヶ山真理氏によれば、骨片の遺存状態は肉付きの状態で800～1,000℃で焼成された焼骨ではないかとの御見解をいただいた。祭祀行為による犠牲獣とみた場合、シカやイノシシは縄文的だが、歯が含まれず、四肢骨のみの検出状況は、その後の時代の祭祀行為に近いと阿部氏に御教示いただいた。本遺跡の時代は複合しており、SK1・2は前述の状況から、帰属時期を不明とせざるを得ない状況があるが、出土位置からは、主体部の可能性があるとしておきたい。SK3は段のある長方形の掘方であり、棺の痕跡はみられなかったが覆土には拳大の礫が含まれていた。遺物は検出されなかったが、本遺構に伴う主体部としておきたい。周溝からは、木製品を第33図Cで示したとおり集中して検出した。いずれも掘削用具であるが、状況からは祭祀行為に伴うものと考えられる。また、第33図Dで示した溝内土坑付近からは、壺2点、埴1点、S字甕1点を検出した。同じく祭祀行為に伴うものと考えられる。

第2号周溝墓について

第2号周溝墓は、平面形が「コ」字状を呈する古墳時代前期の方形周溝墓である。北西溝からは、溝内土坑が確認され、その付近で木製品が集中して出土した。

溝内土坑は、人骨及び玉類からなる副葬品から墓壙と判断した。掘方は、長軸方向2.2mと十分な長さがあるが、短軸方向は0.6mと幅が狭小である。現代人のサイズでは側臥でなければ収まらない規模

である。人骨の鑑定からは、成人のものだと判断されていることから、仰臥位で収まっている場合、被葬者は小柄な体形であったと推定される。また、側臥位での埋葬の場合はこの限りではない。なお、掘方が長軸が長い長方形状であること、幅狭であることから、屈葬の可能性は否定しておきたい。棺の存在について、溝内土坑からは小札状の木片が1点出土し、床面からは部分的ではあるが、木質の腐った痕跡が僅かながら確認された。しかし、土坑の断面調査を実施したところ、棺による窪み等は確認されなかった。このような状況があり、棺の存在については、不明とせざるをえない。

出土木製品について、北西溝以外の溝の覆土には、木材の混入がみられず、集中して出土した状況から、自然埋没に伴う混入物ではなく、人為的に廃棄されたものと考えられる。北西溝からは不明な木製品が4点出土している。前述の小札状を除くと、板状のもの、炭化した鋤先状のもの、棒状のものが各1点ずつである。板状のものについて、長さがあり大型であること、また、棒状のものについて、長さあり端部の片側は太く反対側は細くなっている以外は不明である。炭化した鋤先状のものは掘削用具とみられ、焼却して遺棄されたものと判断される。何らかの行為に伴い遺棄されたものと考えられ、溝内土坑のある北西溝からの出土であることから、葬送に係る祭祀遺物である可能性を指摘しておきたい。また、第1号周溝墓から出土した木製品は、掘削用具が含まれている点について、本遺構と共通している。

まとめ

本遺跡は、市内成田地区に広がる遺跡群の西端ともいべき状況を呈している。時期別にみるならば、縄文時代後・晩期は諏訪木遺跡で確認されていたが、本遺跡によって西へ広がることが判明した。弥生時代は中期中頃以降、東は池上遺跡、北は北島遺跡、南・西は前中西遺跡に集落が広がることが分かっていたが、これに加えて、本遺跡の第4号竪穴建物跡が現状での西限となる。この状況は、新規荒川扇状地の扇端部に立地することが要因と考えられ、この時期の集落が扇端部特有の湧水に依拠していることの証左といえる。また、新規荒川扇状地上では現状で唯一となる前方後方形周溝墓である第1号周溝墓が確認された。本遺構は当時の首長墓的要素を持つものと考えられ、象徴性が極めて高く、構築場所は厳選されたと思われる。調査地点は、集落経営の根幹である水源地直近であり、選定条件に合う重要な地点であったと推察する。なお、調査地の南側は沼が近年まであり、明治19年の迅速測図にその姿を確認することができ、本調査においても調査区北東の沼の端部あたりの落ち込みを検出し、底面からは後・晩期の縄文土器が出土している。また、縄文時代後・晩期の包含層や遺構からは祭祀遺物である加曾利B3式段階から晩期安行3d式段階に至る土偶が継続して確認されており、水辺の祭祀に係る可能性が考えられ、古くから生活に重要な地点であったことが分かる。未報告ではあるが、本調査区の東側近接地にあたる平成23年度の前中西遺跡西端部の調査では、古墳時代前期の土師器、木製品等を用いた祭祀の痕跡と奈良・平安時代の木簡、漆パレット転用の須恵器稜境、土師器坏等を用いた祭祀の痕跡、また湧水点とみられる円形窪みによる凹凸がある地山を検出しており、地点を若干変えながらも水辺に係る祭祀は長きにわたり続けられていたと考えられる。今回の調査では、各時代における成果はいうまでもなく、遺跡の立地や成立要因の一端に迫る重要な成果が上がったと考えられる。今後の課題としては数多くあるが、縄文時代においては、晩期末の遺構を伴う集落が未発見である。古墳時代前期においては、藤之宮遺跡において集落が確認されているが小規模であり、首長墓的要素をもつ墓域に対応した集落の確認等が挙げられる。以上、今後の資料の集積を期待してまとめとする。

VI 附編

1 新期荒川扇状地南東部の地形地質

清水康守・小勝幸夫・小川政之・武藤博士

1. はじめに

日本列島は山地が多いため、河川を作る堆積地形の扇状地は多い。一般に、扇状地上の河川は扇頂から放射状に分流し、各分流は網状流路となる。また、粗粒な堆積物で構成されるため、水はけがよいなどの特徴がある。清水(2015)は新期荒川扇状地上の旧荒川の流路跡と考古遺跡の検討から、旧荒川的主要流路跡の時代性を述べた。この時、主要流路跡に第一～第四流路と名付けた。第一流路は忍川とその支流であり、支流のうち大きなものは、北側の衣川用水路と南側の平戸用水路である。最近の考古学的発掘は衣川とその支流沿いに集中している。そこで、この発掘調査で明らかになったことを地質学的に説明してみる。調査において、熊谷市教育委員会の松田 哲、蔵持俊輔、塚塚博隆の各氏にはいろいろとお世話になった。感謝したい。

筆者らの研究グループの重要な一員であった駒井 潔氏が、平成27年に急逝した。この報文に示す調査地点の一部は、彼と一緒に調査したものであることを明記させてもらい、あらためてご冥福を祈るものである。

2. 衣川周辺の地形

熊谷市河川課によれば、衣川は熊谷市役所の北で箱田用水路から衣川用水路と平戸用水路に分流し、始まるものである。ここから北側の箱田四丁目と中西一丁目の間を東へ流れ、中西三丁目の北端を北に大きく湾曲し、中西四丁目の北端を西から東へと流れている。熊谷市立東中学校で流路を南に変え、忍川へと合流している(第1図)。衣川の100～150mほど南には衣川に並行する支流が位置し、中西四



第71図 衣川とその支流

丁目の東端で衣川に合流している。この支流の西端部は熊谷総合病院を取り囲むように北と南に分かれている。これは、土地の古老によれば、沼地のあった場所とのことである。衣川とその支流の流域に中西遺跡（第1図の①地点）、前中西遺跡の数次にわたる調査（（第1図の②地点、③地点）、諏訪木遺跡一乗院地点（第1図の④・④'地点）などが位置している。これらの河川の流路はヒトにより少し変化されているものと思われるが、古い流路と大きくは違わないところに当初からあったものと考えている。

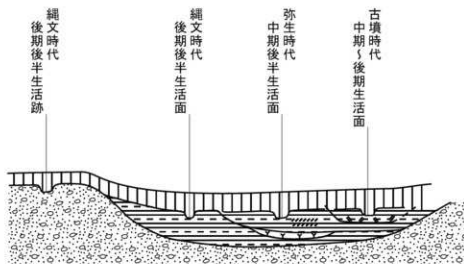
この地域の標高をみると、西の熊谷総合病院の北で26 m、東の一乗院付近で24 mを示し、緩やかに東へ傾斜している。傾斜率をみると2.9 m/1000 mとなり、新期荒川扇状地の扇端近くの3 m/1000 mとほぼ同じ値といえる（清水 2015）。中西四丁目の支流の流路の南の試掘では、表土の下に礫層があり、この礫は荒川新期扇状地の礫層であると考えられる。すなわち、この地域は扇状地の先端付近に位置している。

3. 衣川周辺の地質

前述のように、衣川周辺の遺跡は新期荒川扇状地の先端付近に、旧荒川の流路が位置するところといえる。すなわち、扇状地面そのものからなるところと、旧荒川の流路からなるところに分かれる。流路には泥質の堆積物が堆積している。このため、荒川は扇状地礫から水の浸透がなくなり、安定した河川水の流れるところとなった。安定した水を得られること、これが、ヒトの生活の基礎となり、遺跡の形成につながったといえる。

衣川やその支流の低地帯の形成は第2図のようにまとめることができる。図の左端部は扇状地面下の地質を表している。地層の記号は第3～8図で使用した地質柱状図のものと同じものである。地表の下の縦線は表土層を示している。

縄文時代後期前半以前に衣川やその支流の河川は、洪水などにより、その流域にシルト質の粘土層を堆積した。これで、水が浸透しやすかった河川（水無川）に安定して水が流れるようになった。縄文時

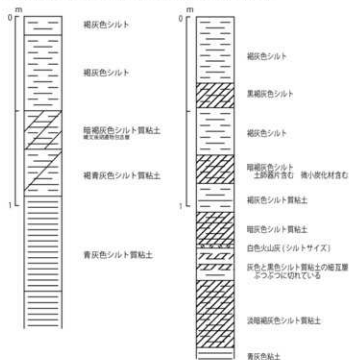


第72図 模式地質断面図

代後期後半になると、河川の中央部では湿地化が進み泥炭層が形成された。河道から離れたところでは、草地となり地表付近に腐食が形成された。ここを人々が生活の場にしていった。

縄文時代晩期から弥生時代中期までに、衣川やその支流には再びシルト質の粘土層が堆積した。このシルト質の粘土層は何回かの洪水で形成されたと考えられる。一回の洪水で灰色粘土層が堆積し、その上に落ち葉などの植物が堆積した。これが腐植に富んだシルト質粘土層になり、灰色シルト質粘土層と黒色シルト質粘土層の細互層を形成した。その後、草地となり地表付近に腐食が形成された。ここを弥生時代中期の人々が生活の場にしていった。

古墳時代の中期、5世紀のころに洪水が起こり、灰色シルト質粘土層が堆積した。その後、ここは草地となり地表付近に腐食が形成された。ここを古墳時代の人々が生活の場にしていった。その後は大きな洪水は少なくなっていくものと思われる。



第73図 発掘区西壁の地質

第74図 発掘区北東部の地質



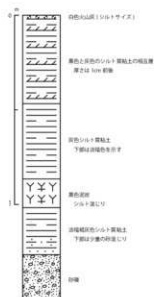
第75図 方形周溝墓の周溝部の地質

(1) 中西遺跡(第①地点)の地質

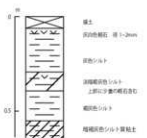
中西遺跡は、南北に延びる道沿いに発掘調査は進められた。調査区の南側では、礫層が高く位置し、礫層上に住居跡などの遺構がみられた。北側には粘土質のシルト層が堆積している。その中に腐植が集積し、暗褐色をしたシルト質粘土層があり、その中に縄文時代後期後半の土器が含まれていた(第3図)。この層が東へ傾いて分布していた。発掘区の北東部には第4図に示すように、下位から青灰色粘土、暗褐色白色シルト質粘土層があり、この上に黒色と灰色の薄いシルト質粘土層の細互層が堆積していた。この黒色と灰色の薄いシルト質粘土層の細互層は厚さが1~2cm以下と薄いものであるが地震によってぶつぶつに切られていた。この細互層の上には榛名二ツ岳(Hr-FA)に対比で白色のシルトサイズの火山灰層が認められた(第4図)。以下これをFAと呼ぶ。これらの層は縄文時代後期後半の土器包含層などを斜交関係で接していた。

(2) 前中西遺跡内第②地点の地質

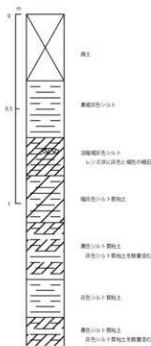
この地点は衣川とその支流の中間に位置しに位置し、多くの遺構がみられた。その中でも、方形周溝墓とその周溝を埋積して



第 76 図 トレンチ中央の地質柱状図



第 77 図 第④地点南壁の地質



第 78 図 第④'地点の発掘域

いる腐植に富んだ暗褐色シルト質粘土層が認められた。この上には、周溝の凹地に沿ってたわんで堆積した灰色シルト質粘土層がある（第 5 図）。この基底付近には白色のシルトサイズの火山灰層がみられた。

(3) 前中西遺跡内第③地点の地質

この地点は衣川支流に位置し、この河川の成績物の調査から、形成の過程を知ることができた。支流の河道に垂直方向のトレンチの壁面で、礫層表面が河道状にへこんだところを埋積している堆積物が確認できた（第 6 図）。扇状地礫層の上に乗るこの堆積物は、下位から淡暗褐色灰白色シルト質粘土層、黒色泥炭層、灰色シルト質粘土層、黒色と灰色の薄いシルト質粘土層の細互層、厚さ 2 cm の白色のシルトサイズの火山灰層と堆積している。厚さ 2 cm の白色シルトサイズの火山灰層は FA と呼ばれる 5～6 世紀ごろの火山灰に対比できる。淡暗褐色灰白色シルト質粘土層は縄文時代後期以前、黒色泥炭層は縄文時代後期後半以降、灰色シルト質粘土層は弥生時代以降、黒色と灰色の薄いシルト質粘土層の細互層は古墳時代中期以前の堆積と考えられる。

(4) 諏訪木遺跡一乗院地点（第④・④'地点）の地質

諏訪木遺跡一乗院地点は衣川沿いに所在し、平成 27 年度に一乗院の北側（第 1 図の④地点）を、平成 29 年度に南側（第 1 図の④'地点）が発掘調査された。北側の発掘区の南壁面を調べ、遺跡の確認面までの地層は第 6 図に示した。上の方から見ると、舗装道路の下は角礫が敷かれており、盛土と判断した。その下の灰色シルト層の最上部に灰白色の軽石が認められた。地表から 55cm 下にこの地点の遺構確認面となる暗褐色シルト質粘土層が位置している。

④'地点では、弥生時代の住居跡や河川の流路跡が検出されている。河川の流路跡を埋積している地層を第 8 図で示した。ここでは、地表下 65cm のところに厚さ 20cm の淡暗褐色シルト層があり、この中に厚さが数 mm のレンズ状に灰白色～褐色の軽石がみられた。

(5) 珪藻分析

各地点のシルト質粘土層について、珪藻分析を実施した。分析方法については省略する。第③地点の扇状地礫層上の淡暗褐色灰白色シルト質粘土層（第 5 図）を処理すると珪藻化石

を検出できた。

最も多かったのが、流水性といわれる *Synedra ulna* でほとんどが破片となっていたが、371 個体確認できた。その他に流水性といわれる *Achnanthes lanceolata*・*Cocconeis placentula*・*Gomphonema intricatum*・*Melosira varians*・*Navicula radiosa* がそれぞれ 1・4・1・3・1 個体ずつ検出された。その他に、*Amphora affinis* が 2 個体、*Cymbella* spp. が 4 個体、*Epihemia adnata* が 5 個体、*Eunotia* spp. が 4 個体、*Gomphonema* spp. が 2 個体、*Pinularia* spp. が 12 個体、*Tabellaria fenestrata* が 3 個体認められた。以上述べたすべての種類は淡水性の珪藻であり、流水性の珪藻がほとんどを占めている。

よって、河川の洪水などで堆積した地層である。ほかのシルト質粘土層も洪水などで堆積した地層であると推定できる。

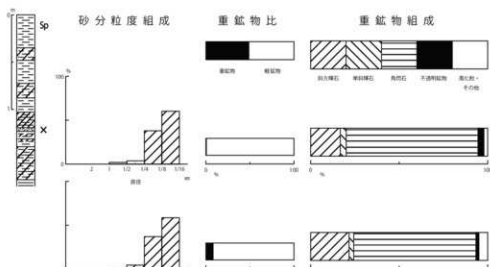
(6) 火山灰分析

火山灰分析の方法を略述する。試料を乾燥させ、重量を測定し、水中で泥を分散させながら、1φごとの分析篩で粒度分けをする。この際、砂分と泥を良く分離するため、濁りがなくなるまで、水中で指でよくこする。分離した砂は、乾燥させ、重量を求め (1/1000mg)、砂分の粒度組成を求める。細粒砂 (1/4 ~ 1/8mm) について、重液にブロムフォルムを用いて重液分離をし、重鉱物と軽鉱物に分ける。各々秤量し、重鉱物の割合 (重鉱物比) を求める。重鉱物と軽鉱物は 4 分法で適量にし、各々プレパラートを作成し、偏光顕微鏡で鉱物の同定をする。

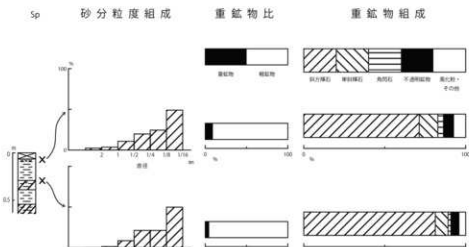
第 9 図は①地点 (上の図) と②地点 (下の図) の白色シルト質火山灰層の分析結果である。火山灰の砂分の総量は第①地点で 31.6%、第②地点 31.4% とシルト以下の粒子の割合が多く、肉眼で確認した細粒の火山灰層であることを裏づけている。砂分の粒度組成をみると、極細粒砂が両方とも 50% をこえて、最も多い特徴があり、重鉱物比は 10% 以下とやや低い値を示す。重鉱物組成は角閃石が多く、両輝石の量はそれに比して多くない。

以上の特徴から、両者は榛名山二ツ岳を噴出源とする榛名山二ツ岳渋川 (Hr-FA) に対比できる。

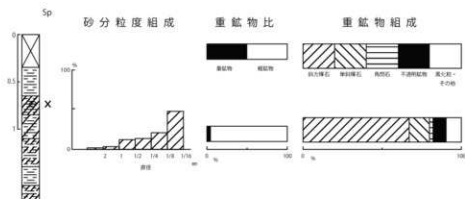
第 10 図は第④地点の 2 試料である。両試料とも泥の中に淡灰白色の軽石が混じる層相である。すな



第 79 図 白色シルト質火山灰の分析結果



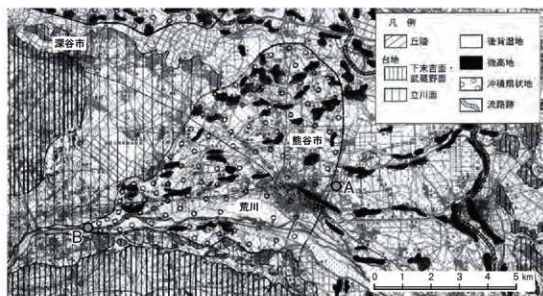
第 80 図 第④地点の火山灰の分析結果



第 81 図 第④' 地点の火山灰の分析結果

わち、軽石の純層ではない、砂分の粒度組成をみると極細粒砂（直径 $1/8 \sim 1/16\text{mm}$ ）が最も多く、泥の粒度組成の特徴に一致する。しかし、上の試料には直径 2mm 以上の軽石を含んでいる。極粗粒砂（直径 $2 \sim 1\text{mm}$ ）をみても角張っており、降下火山灰の特徴が明瞭である。重鉱物組成は斜方輝石の多い両輝石の量が 80% を超えている。これは、浅間山起源の降下軽石と考えることができる。上の試料は粗粒な軽石が多い天明三年の噴出の浅間 A（As - A）で、下の試料は天仁元年の浅間 B（As - B）と考えられる。このことは、古代から江戸にかけてここには洪水堆積層がほとんど堆積しなかったことを裏づけている。

第 11 図は第④' 地点の火山灰層である。褐鉄鉱で汚染され、褐色になっているが、一部淡灰白色の軽石も残っており、軽石層であることが分かる。流路跡を埋積した地層の上部に含まれている。直径 2mm 以上の軽石を含んでいる。これと極粗粒砂（直径 $2 \sim 1\text{mm}$ ）をみても角張っており、降下火山灰の特徴が明瞭である。重鉱物組成は斜方輝石の多い両輝石の量が 80% を超えていて、浅間山起源の降下軽石と考えることができる。粗粒な軽石粒を含むことから、天明 3 年の噴出 As - A に対比できる。この流路跡は天明三年にはかなり埋まっいて、水の流れはほとんどなかったことが分かる。



第 82 図 礫分析試料採取地点

Aは前中西遺跡、Bは植松橋下流右岸（図は「熊谷市史資料編1考古（2015）」を一部割愛し使用）

4. 新期荒川扇状地礫層の礫分析

(1) 礫分析試料と分析方法

前中西遺跡と深谷市荒川の上松橋下流右岸にて新期荒川扇状地礫層中の礫を採取した。前中西遺跡は新期荒川扇状地の扇端に、上松橋下流右岸は扇頂に位置する（第12図）。そこで、扇頂付近および扇端付近での扇状地礫の礫種組成の分析を行った。

前中西遺跡（第1図③地点）では、トレンチにおいて新期荒川扇状地礫層の最上面、縦約75cm、横約60cm、深さ約10cmの範囲で採取した。また、採取した礫層の地質柱状図での位置を第6図に示す。また、礫は円礫主体で、最大礫の長径は13～14cmである。なお、地下水による水つきのためマトリックスの砂の採取は粒度分析用には不十分であった。

植松橋下流850m地点の荒川右岸寄り州の露頭では新期荒川扇状地礫層の上に現世河床礫が覆っている。この扇状地礫層において100×50×6cm（縦×横×奥）の範囲で採取した。また、この礫層は褐色で、最大礫の長径20～25cmで、円礫主体で、砂岩・石英閃緑岩は著しく風化してポロポロのものもある。

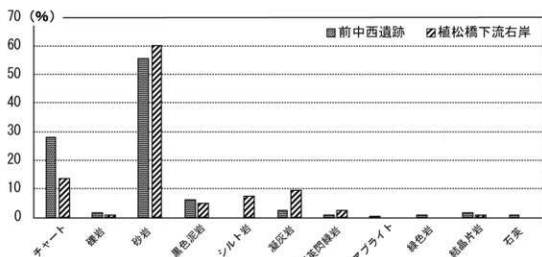
分析方法として、まず試料の水洗後、全礫を順次、長径が12.8cm以上、12.8～6.4cm、6.4～3.2cm、3.2～1.6cmに分け、3.2cm以上の礫について礫種組成を検討した。なお、表面が風化したり、鉄汚染したものはハンマーで割り破断面を観察した。

(2) 礫種組成分析結果

堆積岩類は、「チャート」「砂岩」「礫岩」「黒色泥岩」「シルト岩」「凝灰岩」に区分した。このうちシルト岩は、灰白で比較的柔らかく第三系起源のものである。凝灰岩は、灰色、白色、緑灰色で、破断面は緻密だが極微小の長石が見られ、角張った黒色岩片を含むものもある。また珩質緑灰色のものも一括した。

火成岩類では、深成岩の「石英閃緑岩」、「アブライト」が識別され、安山岩などの火山岩はなかった。石英閃緑岩は、ゴマ塩状で表面はでこぼこで、植松橋では風化したものも見られる。アブライトは、表

	長径	チャート	礫岩	砂岩	黒色泥岩	シルト岩	凝灰岩	石英閃緑岩	アフライト	緑色岩	結晶片岩	石英	合計 (個数)
前中西遺跡	25.6~12.8cm	1		2									3
	12.8~6.4cm	2		11	3		1			2			19
	6.4~3.2cm	50	3	92	9		4	2	1		3	2	166
	25.6~3.2cm	53	3	105	12		5	2	1	2	3	2	188
植松橋下流右岸	25.6~12.8cm	1		6				1					8
	12.8~6.4cm	5	1	26	4	7	4	3			2		52
	6.4~3.2cm	22	1	90	6	8	15	1					143
	25.6~3.2cm	28	2	122	10	15	19	5			2		203



第 83 図 個数による礫種組成

面は褐色だが破断面は白色である。粗粒な石英・長石の集合で、黄鉄鉱も点在する。

変成岩類は、「緑色岩」「結晶片岩」に区分した。なお、「石英」は白色、無色半透明であるが、結晶片岩の一部を含むことから、結晶片岩中の石英脈である。

長径 25.6～3.2cm の礫について、個数とその割合を第 13 図に示す。両地点とも、砂岩とチャートを主体とし、次に黒色泥岩となっている。上松橋下流右岸で、シルト岩が多く凝灰岩も多いのは、この上流の荒川の河床に露出しているためである。また、ぼろぼろに風化した石英閃緑岩や風化した砂岩も認められた。

(3) 礫径（長径）区分による個数分布結果

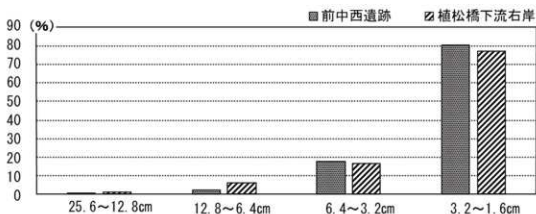
礫の長径 1.6cm 以上について、礫径区分による個数と割合を第 14 図に示す。全試料とも、長径 3.2～1.6cm の礫が多く、順次長径 6.4～3.2cm、12.8～6.4cm、12.8cm 以上と順次少なくなっている。

ただし、12.8cm 以上の礫の長径は、扇頂付近の前中西遺跡では 13～14cm、扇頂付近の植松橋下流右岸では 20～25cm である。

(4) 扇状地礫層の扇頂・扇端における礫の比較結果

新期荒川扇状地の扇端付近の前中西遺跡と扇頂付近の植松橋下流右岸で採取した礫層中の礫を比較する。礫種組成では、ともに砂岩とチャートを多く含み、礫岩、黒色泥岩などともに堆積岩礫を主体とする。ただし、扇頂付近では、砂岩の円磨度は円・超円で褐色の風化しぼろぼろのものを含む。ほかに石

礫径(長径)		25.6~12.8cm	12.8~6.4cm	6.4~3.2cm	3.2~1.6cm	25.6~1.6cm
前中西遺跡	個数	3	19	166	771	959
植松橋下流右岸		8	52	143	678	881
礫径(長径)		25.6~12.8cm	12.8~6.4cm	6.4~3.2cm	3.2~1.6cm	25.6~1.6cm
前中西遺跡	%	0.3	2.0	17.3	80.4	100.0
植松橋下流右岸		0.9	5.9	16.2	77.0	100.0



第 84 図 礫径(長径)区分による個数分布

英閃緑岩、結晶片岩を含み、安山岩などの火山岩類を含まない。扇頂、扇端ではともにほぼ同じ礫種構成である。また、このことは新期荒川扇状地城での現世荒川の河床礫と類似するが、現河床で少量含まれるホルンフェルスは含まれなかった。

礫径(長径)区分では、扇頂、扇端ともに長径3.2~1.6cm礫を主体とし、次に6.4~3.2cm礫が多く、12.8~6.4cm礫は少なく、12.8cm以上は極少量である。

ただし、12.8cm以上の礫の長径は、扇端付近の前中西遺跡では13~14cm、扇頂付近の植松橋下流右岸では20~25cmで、扇頂付近の方がより大きな礫が多いという結果となった。扇頂の方がより礫径の大きなものが堆積している。

引用文献

熊谷市教育委員会 2015「熊谷市史資料編1考古」p. 1~18

2 中西遺跡出土の歯

(独) 国立科学博物館人類研究部
梶ヶ山 真里

1. 緒言

中西遺跡は、熊谷市中西四丁目に所在する縄文時代後期から奈良・平安時代までの複合遺跡である。中西遺跡南西部にあたる181・182・183 - 149・150・151グリッドから第2号周溝墓が検出された。第2号周溝墓は、平面の形状から古墳時代前期とみられ、北西溝内の土坑墓からヒトの歯が3点検出された。

以下、この3点のヒトの歯についての記載である。なお、計測値の単位はmmである。

2. 所見

(成人・男性)

歯は、第85図の歯式に示す部位が保存されている。

																M2	M3
																M1	

第85図 歯式

便宜上、番号をつける。

NO.1・・・(M1)・左下顎第1大臼歯か？

歯冠は近心の半分に満たない部分しか保存されていない。咬耗の程度はエナメル質が磨り減っている程度で、象牙質の露出は全くない。

NO.2・・・(M2)・左上顎第2大臼歯

歯冠は完形である。歯根は残っていない。咬耗程度は、内側咬頭がやや磨り減っている程度、外側咬頭の磨り減りは全くない。象牙質は露出していない。

歯冠計測値 (近遠径 10.1 / 頬舌径 11.2)

NO.3・・・(M3)・左上顎第3大臼歯

歯冠は完形である。歯根は残っていない。第4咬頭は退縮しており、形態は小臼歯に似ている。エナメル質はわずかに磨り減りがある。したがって、萌出はしたがほとんど象牙質は露出していない。

歯冠計測値 (近遠径 8.2 / 頬舌径 10.2)

以上のことから、この3点歯が同一個体であれば、この個体は、性別不明の30才程度であると思われる。なお、歯の計測値は古墳時代人としては小さい。歯の大きさだけから判断すると縄文的である。しかし、第2大臼歯、第3大臼歯の計測値は男性としてはやや小さく、女性のものであれば古墳時代人としてもそれほど矛盾はない。

したがって、この3点の歯から、年齢は30才前後もので、性別は不明であるといえる。歯が小さいので、縄文的な男性個体、あるいは、古墳時代の女性の可能性も捨てきれない。



第 86 図 第 2 号周溝墓溝内土坑出土歯

3 中西遺跡出土木製品の自然科学分析調査

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、第2号周溝墓の北西溝からまとまって出土した木製品・炭化材や、周溝墓の溝内土坑から出土した木片について、木材利用の基礎資料を作成するために樹種同定を実施した。また、北西溝から出土した炭化材については、遺構の年代確認のために放射性炭素年代測定を併せて実施した。

1. 試料

試料は、第2号周溝墓の北西溝から出土した木製品（生木）2点（試料No.1・2）と炭化材1点（試料No.3）、第2号周溝墓の溝内土坑から出土した木片1点（試料No.4）の合計4点である。生材試料3点は樹種同定を実施し、炭化材試料1点は放射性炭素年代測定と樹種同定を実施する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

炭化材は、毛細根や土壌などをピンセットや超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて δ 13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.00（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、

2 σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、2 σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

剃刀を用いて、木片から木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作成し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

試料No.3の放射性炭素年代測定および暦年校正結果を第24表に示す。同位体効果による補正を行った測定結果は、1,700 \pm 30BPを示し、測定誤差を σ として計算させた暦年校正結果は、cal AD262 \sim 389である。

第24表 放射性炭素年代測定結果

試料No. 選標	状態 (種類)	処理 方法	測定年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年校正用) BP	暦年校正結果			Code No.	
						誤差	cal BC/AD	cal BP		相対比
試料No.3 第2号周溝墓 (ヤナギ 属) (北西溝)	炭化材	AaA	1,690 \pm 20	-24.33 \pm 0.44	1,700 \pm 30 (1,702 \pm 25)	σ	cal AD 262 - cal AD 278	cal BP 1,688 - 1,672	0.178	IAAA -113303
							cal AD 329 - cal AD 389	cal BP 1,621 - 1,561	0.822	
						2σ	cal AD 256 - cal AD 303	cal BP 1,694 - 1,647	0.268	
							cal AD 315 - cal AD 409	cal BP 1,635 - 1,541	0.732	

1) 処理方法は、酸処理-アルカリ処理-酸処理(AAA処理)であるが、アルカリ濃度が1N未満のため、AaAと表記している。

2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

3) BP年代値は、1950年を基準として何年前であることを示す。

4) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。

6) 暦年の計算には、①で暦年校正用年代として示した、一柾目を丸める前の値を使用している。

7) 年代値は、1柾目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年校正用年代値は1柾目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68.3%、 2σ は95.4%である。

9) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を第25表に示す。試料No.1, 2, 4は、いずれも針葉樹のヒノキ科、試料No.3は広葉樹のヤナギ属に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかへやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヤナギ属 (Salix) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-15細胞高。

第25表 樹種同定結果

試料No.	グリッド	遺構	出土位置	図版	状態	種類	備考
1	183-150	第2号周溝墓	北西溝	第45図4	生木	ヒノキ科	
2	183-150	第2号周溝墓	北西溝	第45図3	生木	ヒノキ科	
3	183-150	第2号周溝墓	北西溝	第45図2	炭化材	ヤナギ属	IAAA-113303
4	183-149	第2号周溝墓	北西溝内土坑	第45図1	生木	ヒノキ科	

4. 考察

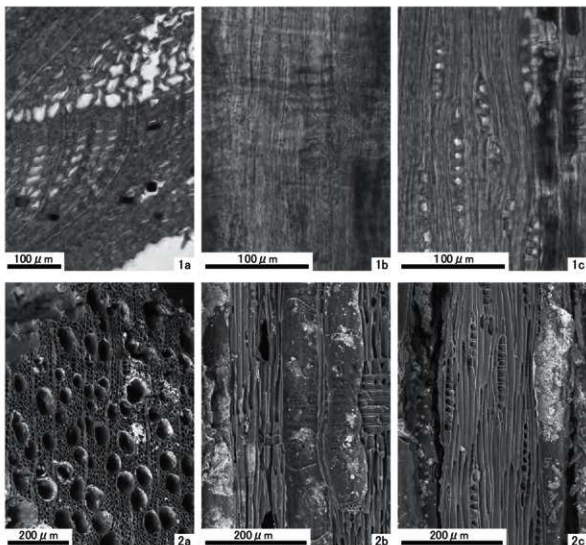
第2号周溝墓の北西溝から出土した木製品・炭化材は、1箇所からまとまって出土している。木材（試料No.1,2）は板状や棒状を呈し、部分的に炭化が認められる。炭化材（試料No.3）は完全に炭化しており、鋤の身の部分に形状が似ている。第2号周溝墓では、この他の地点から木製品・木片が全く検出されていないことから、これらの木材・炭化材は葬送に係る儀礼に利用された後、意図的に廃棄された可能性が想定されている。一方第2号周溝墓の溝内土坑からは、ヒトの歯や首飾りが出土しており、埋葬施設であることが確認されている。出土した木片（試料No.4）は、土坑外側壁面に貼り付いた状態で出土しており、木棺の一部に由来する可能性があるが、他に木片が出土していないことから、埋設・埋没時の流れ込みである可能性も残るとされる。

第2号周溝墓の北西溝から出土した炭化材の放射性炭素年代測定結果は、補正年代で $1,700 \pm 30BP$ を示し、測定誤差を σ として計算させた暦年較正結果は、cal AD262～389であった。この結果から、この遺構の年代は3世紀中頃～4世紀代と推定され、出土遺物などの考古学的所見より推定された年代と調和的である。

出土した木材・炭化材は、試料No.12,4がヒノキ科、試料No.3がヤナギ属であった。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ等の有用材が含まれる。いずれも木理が直直で割裂性、耐水性が比較的高く、加工は容易である。一方ヤナギ属の木材は軽軟で、強度・保存性は低い。ヒノキ科については、現在の本遺跡周辺に分布していないが（高橋,1998）、小敷田遺跡（熊谷市・行田市）では、自然木にヒノキ科のヒノキやサワラが確認されていることから（鈴木・能城,1991）、過去には周辺地域に生育し、木材が入手できた可能性がある。ヤナギ属については、河畔などに普通に見られる種類であり、小敷田遺跡（熊谷市・行田市）では古墳時代前期の自然木にも確認されていることから（鈴木・能城,1991）、本遺跡周辺に生育していた樹木を利用した可能性がある。炭化材は鋤に似るとされるが、ヤナギ属は材質から鋤・鋤のような農具には不適である。そのため、炭化材が鋤であるとすれば、実用品でなく葬送儀礼用に加工の容易な木材を利用して製作した可能性もある。

本遺跡周辺における古墳時代前期の調査事例をみると、稲荷山古墳（行田市）から出土した辛亥銘鉄剣の鞘がヒノキ科に同定されているほか、小敷田遺跡の板、丸太、角材、田下駄横木、刀形、建築部材、火鑽杵、割材、北島遺跡（熊谷市）の糸巻き、横槌、弓等にヒノキ科のヒノキ、サワラ、アスナロが同定されている（松田,1982;鈴木・能城,1991;バリノ・サーヴェイ株式会社,2005）。またヤナギ属は、自然木で事例が多いが、小敷田遺跡の棒、柄、木鍾、杭、部材などにも利用が認められる。

なお木棺については、全国的にみれば、ヒノキの利用などが確認されており（島地・伊東,1988）、溝内遺構から出土したヒノキ科の木片が木棺の部材としても矛盾はない。なお本遺跡周辺では、北島遺跡の古墳時代前期とされる削り貫き木棺が、広葉樹のヤマグワに同定されている（バリノ・サーヴェイ株式会社,2005）。



1.ヒノキ科(試料No.3) 2.ヤナギ属(試料No.4) a:木口.b:柾目.c:板目

第 87 図 木材・炭化材

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181。
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176。
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201。
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166。
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216。
- 松田隆嗣, 1982, 榎木の樹種鑑定, 「埼玉稲荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書」, 埼玉県教育委員会, 13。
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 2005, 北島遺跡第19地点出土木製品の樹種同定, 「北島遺跡 XIII」, 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第305集, 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 222-234。
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- 鈴木三男・能城修一, 1991, 小敷田遺跡の木材化石群集, 「行田市・熊谷市 小敷田遺跡 一般国道17号線熊谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告<河川跡遺物編・第Ⅱ分冊>」, 埼玉県埋蔵文化財 調査事業団調査報告第95集, 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 268-318。
- 高橋重男, 1998, 埼玉の裸子植物, 伊藤 洋 (編)「1998年度 埼玉県植物誌」, 埼玉県教育委員会, 81-86。
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴 リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

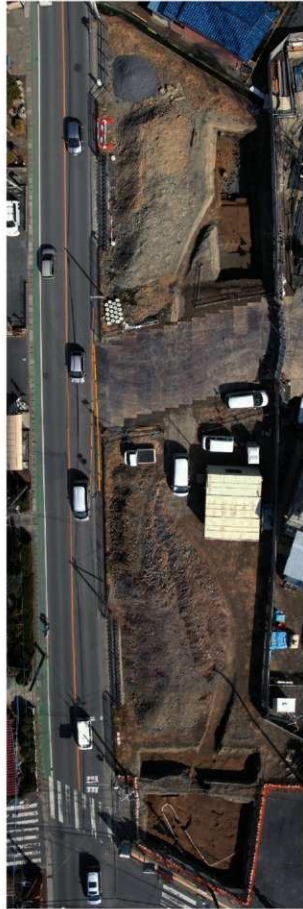
写 真 图 版



調査区遠景2（北東方向 平成23年度調査）



調査区遠景1（南西方向 平成23年度調査）



調査区全景1（上が北西 平成23年度調査）

図版 2



調査区全景 2 (北東から 平成 22 年度調査反転前)



調査区全景 3 (南西から 平成 22 年度調査反転前)



調査区全景 4 (南西から 平成 22 年度調査反転後)



調査区全景 5 (上が北西 平成 23 年度調査西側)

図版 4



調査区全景 6 (上が北西 平成 23 年度調査東側)



調査区全景 7 (南西から 平成 24 年度調査)



第2号竖穴建物跡（南から 平成23年度調査）



第2号竖穴建物跡（南から 平成22年度調査）



第1号竖穴建物跡（東から）



第3号竖穴建物跡遺物出土状況1（北から）



第3号竖穴建物跡（東から）



第3号竖穴建物跡遺物出土状況2（東から）



第3号竖穴建物跡遺物出土状況3



第3号竖穴建物跡遺物出土状況4

図版 6



第4号竪穴建物跡（南から）



第4号竪穴建物跡遺物出土状況1（西から）



第4号竪穴建物跡遺物出土状況2（西から）



第4号住居跡遺物出土状況3（西から）



第5号竪穴建物跡遺物出土状況（西から）



第7号竪穴建物跡（南東から）



第6号竪穴建物跡遺物出土状況1（南東から平成24年度調査）



第6号竪穴建物跡遺物出土状況2（南東から平成23年度調査）



第1号周溝墓（南東から 平成22年度調査）



第1号周溝墓遺物出土状況1（北西から）



第1号周溝墓内第4号土坑遺物出土状況（西から）



第1号周溝墓遺物出土状況2（南東から）



第1号周溝墓前方部土層断面（北西から）

図版 8



第1号周溝墓東溝1 (南東から 平成24年度調査)



第1号周溝墓内第1・2号土坑遺物出土状況(北東から)



第1号周溝墓東溝2 (南東から 平成23年度調査)



第1号周溝墓内第3号土坑遺物出土状況(西から)



第2号周溝墓(上が北西)



第2号周溝墓・第1号溝跡(南西から)



第2号周溝墓北西溝遺物出土状況(西から)



第2号周溝墓北西溝内第1号土坑(南東から)



第3号周溝墓(南から)



第4号周溝墓(北西から 平成22年度調査反転前)



第5号周溝墓北溝(北西から 平成24年度調査)



第5号周溝墓北溝遺物出土状況(北西から)



第5号周溝墓西溝(南東から 平成23年度調査)



第5号周溝墓東溝(南東から 平成23年度調査)



第6号周溝墓南溝(北から)



第6号周溝墓南溝遺物出土状況(北から)

図版 10



第1号土器棺墓 (南から)



第2・3号溝跡 (南東から)



第1・2号土坑 (上が北東)



第3号土坑 (南から)



第4号土坑 (南から)



第5号土坑 (南から)



第7号土坑遺物出土状況1 (西から)



第7号土坑遺物出土状況2 (西から)



第6号土坑 (西から)



第8号土坑遺物出土状況 (北から)



第9号土坑 (南東から)



第11号土坑 (南から)



第12号土坑 (南東から)



第13号土坑 (南から)



第14号土坑 (南から)



第15号土坑 (南東から)

图版 12



第6图 S101-1~9



第6图 S101-10



第6图 S101-23



第6图 S101-26



第6图 S101-36



第8图 S102-24. 25. 27~35. 37~40. 42. 43



第8图 S102-41



第 10 图 S103- 1 ~ 15



第 10 图 S103-17



第 10 图 S103-25



第 10 · 11 图 S103-16. 18 ~ 24. 26 ~ 35



第 11 图 S103-39



第 11 图 S103-39



第 11 图 S103-36 ~ 38. 40 ~ 51. 56. 58 ~ 60



第 11 图 S103-53

图版 14



第 11 图 S103-54



第 11 图 S103-55



第 11 图 S103-62



第 12 图 S103-64



第 11 图 S103-57



第 11 ~ 13 图 S103-61.65 ~ 75.77 ~ 81.83



第 12 图 S103-63



第 13 · 14 图 S103-84 ~ 86.88.89.92.96 ~ 111



第 13 图 S103-76



第 13 图 S103-82



第 13 図 S103-87



第 13 図 S103-91



第 13 図 S103-93



第 13 図 S103-90



第 13 図 S103-94



第 14 図 S103-95



第 14・15 図 S103-112 ~ 118. 121. 124. 126. 128. 129 ~ 131



第 14 図 S103-119



第 14 図 S103-120



第 15 図 S103-122



第 15 図 S103-123



第 15 図 S103-125

图版 16



第 15 图 S103-132 ~ 146



第 15 图 S103-127



第 15 图 S103-147 第 16 图 S103-148



第 16 图 S103-149 · 154



第 16 图 S103-150 ~ 153



第 18 图 S104- 1



第 18 图 S104- 2



第 18 图 S104- 4



第 18 图 S104- 5



第 18 图 S104- 3



第 18 图 S104-6



第 19 图 S104-9



第 18 图 S104-7



第 18 图 S104-8



第 19 图 S104-11. 12. 16 ~ 25. 28 ~ 31



第 19 图 S104-10



第 19 图 S104-13



第 20 图 S104-39. 43



第 19 图 S104-26. 27



第 19 图 S104-14



第 19 图 S104-32. 33



第 19 图 S104-15



第 20 图 S104-34 ~ 36



第 20 图 S104-37. 38. 40 ~ 42

图版 18



第 22 图 S105- 2 ~ 10



第 22 图 S105- 1



第 24 图 S106- 1



第 24 图 S106- 2



第 22 图 S105-11 ~ 15



第 24 图 S106- 3



第 24 图 S106- 4



第 24 图 S106- 5



第 24 图 S106- 6



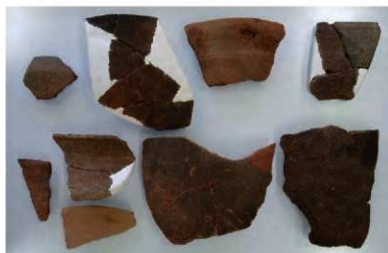
第 24 图 S106- 8



第 24 图 S106-18



第 24 图 S106-19



第 24 图 S106- 7. 9 ~ 13. 15 ~ 17



第 24 图 S106-14



第 26·27 图 S107- 1. 2. 7. 8. 10 ~ 13. 15 ~ 17. 19. 20. 22. 23



第 26 图 S107- 3



第 26 图 S107-04



第 26 图 S107- 5



第 26 图 S107- 6



第 26 图 S107-14



第 27 图 S107-18



第 26 图 S107- 9



第 27 图 S107-24_26_28_30_32_33_35_38_41_42



第 27 图 S107-21



第 27 图 S107-27



第 27 图 S107-31

图版 20



第 27 图 S107-34



第 27 图 S107-39



第 27 图 S107-40



第 27 图 S107-43



第 35 图 SZ01- 3



第 35 图 SZ01- 1



第 35 图 SZ01- 2



第 35 图 SZ01- 4



第 35 图 SZ01- 5



第 35 图 SZ01- 6



第 35 图 SZ01- 7



第 35 图 SZ01- 8



第 35 图 SZ01- 9



第 36 图 SZ01-10



第 36 图 SZ01-11



第 36 图 SZ01-12



第 36 图 SZ01-13



第 36 图 SZ01-14



第 36 图 SZ01-15



第 36 图 SZ01-016



第 36 图 SZ01-17. 18



第 36 图 SZ01-019



第 34 图 SZ01- 1 · 2



第 34 图 SZ01- 3



第 34 图 SZ01- 4 · 5



第 37 图 SZ01-20 ~ 42



第 37 图 SZ01-47



第 37 图 SZ01-64



第 37 图 SZ01-43 ~ 46. 48 ~ 63



第 38 图 SZ01-80



第 38 图 SZ01-107



第 37 · 38 图 SZ01-65 ~ 79



第 39 图 SZ01-114



第 39 图 SZ01-113 第 39 图 SZ01-115



第 38 图 SZ01-81 ~ 95



第 38 图 SZ01-96 ~ 106, 108 ~ 112



第 39 图 SZ01-116, 118 ~ 121, 123 ~ 130,
134 ~ 136



第 40 图 SZ01-137 ~ 145, 147



第 39 图 SZ01-122



第 39 图 SZ01-117



第 39 图 SZ01-131



第 40 图 SZ01-146



第 39 图 SZ01-132, 133



第 40 图 SZ01-148 ~ 150, 157



第 40 图 SZ01-151, 155, 156

图版 24



第 44 图 SZ02- 1



第 44 图 SZ02- 2



第 45 图 SZ02- 3

第 45 图 SZ02- 4



第 43 图 1



第 43 图 2



第 43 图 3



第 43 图 4



第 43 图 5



第 43 图 6



第 43 图 7



第 46 图 1 ~ 7, 9 ~ 15, 17 ~ 21, 23, 29



第 46 图 SZ02- 8



第 46 图 SZ02-16



第 46 图 SZ02-22



第 46 图 SZ02-25



第 46 图 SZ02-24 第 46 图 SZ02-28



第 46 图 SZ02-27 第 46 图 SZ02-26



第 46 图 SZ02-30, 31



第 48 图 SZ03- 2



第 48 图 SZ03- 3



第 48 图 SZ03- 6



第 48 图 SZ03- 7



第 48 图 SZ03- 9



第 48 图 SZ03- 1, 4, 5, 8



第 50 图 SZ04- 1



第 50 图 SZ04-11



第 50 图 SZ04- 2. 4. 6 ~ 10. 12 ~ 17



第 50 图 SZ04- 3



第 50 图 SZ04-18 ~ 29



第 50 图 SZ04- 5



第 51 图 SZ04-30



第 51 图 SZ04-31 ~ 40



第 51 图 SZ04-41



第 51 图 SZ04-42. 43



第 53 图 SZ05- 1 ~ 18



第 53 图 SZ05-19 ~ 22. 24 ~ 30



第 55 图 SZ06- 1 ~ 14



第 53 图 SZ05-23



第 55 图 SZ06-15



第 53 图 SZ05-31. 32



第 55 图 SZ06-16



第 57 图土器棺墓 1- 2



第 59 图 SD02-03- 1 ~ 3



第 61 图 SK01- 1 · 2



第 57 图土器棺墓 1- 1



第 61 图 SK02- 1 ~ 3 第 61 图 SK03-1. 2



第 61 图 SK06- 1 · 2



第 61 图 SK07- 1 · 2 · 3

图版 28



第 61 图 SK08- 1 ~ 9



第 61 · 62 图 SK08-11 ~ 21.24



第 61 图 SK08-10



第 61 图 SK08-22



第 62 图 SK08-23



第 62 图 SK08-25



第 62 图 SK11- 1



第 62 图 SK11- 5



第 62 图 SK11- 6



第 62 图 SK11- 2 ~ 4. 7. 9 ~ 11. 13.

15 ~ 23. 25



第 62 图 SK11- 8



第 62 图 SK11-14



第 62 图 SK11-12



第 62 图 SK11-24



第 64 图 P07- 1. 2



第 64 图 P24- 1. 2



第 64 图 P25-1



第 65 图 1 (表)



第 65 图 1 (裏)



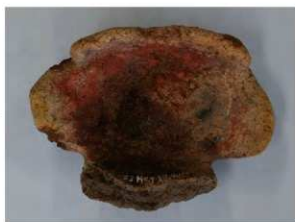
第 65 图 2 (表)



第 65 图 2 (裏)



第 65 图 3 (表)



第 65 图 3 (裏)



第 65 图 4 (表)



第 65 图 4 (裏)

图版 30



第 66 图 5



第 66 图 6



第 66 图 7



第 66 图 8



第 66 图 10



第 66 图 9



第 66 图 11



第 66 图 12 (表)



第 66 图 12 (裏)



第 67 图 13 (表)



第 67 图 13 (裏)



第 67 图 14 (表)



第 67 图 14 (裏)



第 67 图 15 (表)



第 67 图 15 (裏)



第 67 图 16 (表)



第 67 图 16 (裏)



第 67 图 17



第 67 图 18



第 68 图 19



第 68 图 20



第 68 图 21



第 68 图 22



第 68 图 23



第 68 图 24



第 68 图 25



第 68 图 26



第 68 图 28



第 68 图 29



第 68 图 27



第 68 图 30



第 68 图 31



第 68 图 32



第 68 图 33



第 69 图 37



第 68 图 34



第 69 图 35



第 69 图 36



第 69 图 39



第 69 图 38



第 69 图 40



图版 34



第 69 图 41



第 69 图 42



第 69 图 43



第 69 图 44



第 69 图 45



第 69 图 46



第 70 图 48



第 70 图 49



第 70 图 50



第 70 图 51



報 告 書 抄 録

ふりがな	なかにしいせき							
書名	中西遺跡1							
副書名	熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書X							
巻次	—							
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第27集							
編集者名	蔵持 俊輔							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2018(平成30)年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(°′″)	(°′″)		(㎡)	
なかにしいせき 中西遺跡	熊谷市中西四丁目 2400番1、2400番9、 2401番地1地先ほか	11202	59-114	36° 08′ 57″	139° 23′ 45″	第1次 20110104 ～ 20110331 第2次 20120115 ～ 20120330 第3次 20130201 ～ 20130329	1,330	区画整理街 路築造工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中西遺跡	集落跡 墓 遺物包含層	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安 時代	竪穴建物跡7軒 周溝墓6基 土器棺墓1基 溝跡3条 土坑16基 ピット28基	縄文土器・弥 生土器・須恵 器・土師器・ 土製品・石器・ 石製品・木製 品・土偶	縄文時代後・晩期の遺物包 含層及び集落跡を検出した。 弥生時代中期後半の集落跡 及び方形周溝墓・土器棺墓を 検出した。 古墳時代前期の前方後方形 周溝墓を検出した。 奈良・平安時代の集落跡を 検出した。			

熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第27集

中西遺跡Ⅰ

—熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書X—

平成30年3月31日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／関東図書株式会社